# 日本保険医学会100年史

日本保険医学会

# 日本保険医学会100年史

日 本 保 険 医 学 会

# はじめに

日本保険医学会会長　薙　野　久　法

日本保険医学会は，2001年現在，95を数える日本医学会の分科会において第33分科会として，また「日本学術会議」の第７部会に登録されている学術団体として，疾病や生命の長期予後研究を中心的なテーマに掲げて活動してきた，他にその例を見ない特色ある学会です。

その創立は，1901年１月29日と言われ，21世紀最初の年である，今年，創立100周年を迎えました。100周年を迎えるにあたって，組織委員会では，メインテーマとして「医学と生命保険の架け橋として次の世紀へ」と掲げ取組んできました。

ところで，現在のような生命保険事業が置かれた厳しい環境のもと，100周年を迎える時期としては，予算的にもマンパワーの面でも大変厳しいものがありました。そこで組織委員会としては，生命保険や保険医学会をめぐる状況が激動する今，迎える100周年を，保険医学や自分たち医務職の役割と今後の進んでいく方向を考えるとともに，保険医学の原点に立ち返る機会・節目として迎えたいと努めてまいりました。

お陰をもちまして，５月には，100周年記念総会が滞りなく終了し，予定していた記念事業も着々と実行されております。この100周年記念誌も記念事業の一環として編纂・発行されるものです。これらも偏に，組織委員会はじめ会員各位ならびに関係各位のご支援の賜物であり，この場をお借りしてお礼申しあげます。

最後になりましたが，迎えた新しい世紀も関係各位のご支援・ご鞭撻を切にお願い申しあげまして序といたします。

# 目　　次

はじめに ……日本保険医学会会長　薙　野　久　法

第一編　学会史

Ⅰ　日本保険医学会史 ……朝日生命　森　田　明　夫…(1)
Ⅱ　本部役員 ……朝日生命　竹　内　幹　夫…(4)
Ⅲ　日本保険医学会会員数の変遷 ……住友生命　木　村　　力…(33)
Ⅳ　日本保険医学会の現在の活動 ……日本生命　久米　麻美子…(35)

第二編　日本保険医学会創立100周年記念式典

日本保険医学会創立100周年記念式典を挙行 ……日本生命　岩　佐　　寧…(38)
会長挨拶 ……日本保険医学会会長　薙　野　久　法…(40)
来賓祝辞 ……日本医学会会長　森　　亘…(43)
来賓祝辞 ……日本保険学会理事長　森　宮　　康…(45)
来賓祝辞 ……生命保険協会会長　宇　野　郁　夫…(47)
（生命保険協会専務理事　上田　公一 代読）
来賓祝辞……日本アクチュアリー会理事長　林　　勲…(48)
100周年記念式典閉会の辞 ……日本保険医学会副会長　梅　津　哲　二…(50)

第三編　随想

半世紀の関わり ……昭和56年～59年会長　平　尾　正　治…(51)
“Gute Alte Zeit” ……昭和58年～59年副会長　日　置　　博…(56)
保険会社に30年在籍して ……昭和60年～62年会長　安　藤　博　章…(59)
私の体験的「体格・血圧論」―保険医学会創立100周年に思う―
昭和63年～平成元年会長　塚　本　　宏…(64)
90周年寸描 ……平成２年～４年会長　岡　本　　浩…(68)
過去・現在・未来 ……平成５年会長　横　森　周　信…(70)
100年の１部分の感慨 ……平成６年会長　北　島　武　志…(73)
日本保険医学会100周年を迎えて ……平成７年～９年会長　濱　口　知　昭…(77)
日本保険医学会の発展を祈る ……平成10年～12年副会長　梅　津　哲　二…(79)

## 第四編　論文目録

論文索引 ……明治生命　井　上　宏　史…(81)

編集後記 ……日本保険医学会会誌幹事　岩　佐　　寧…(163)

# 第一編　日本保険医学会100年史

# 第一編　学　会　史

## Ⅰ　日本保険医学会史

### 年表；日本保険医学会史・関連史

| 西暦 | 年号 | 記　　事 |
|---|---|---|
| 1901 | 明治34 | 「日本保険医協会」設立<br>初代会長　中浜　東一郎　氏<br>（1月29日　日本保険医学会創立の日） |
| 1902 | 明治35 | 支部設置の開始<br>この頃より，検尿を危険選択に導入 |
| 1908 | 明治41 | 「日本保険医学会協会」と改名<br>学会経費の各社負担による学会経済基盤の確立 |
| 1918 | 大正 7 | 「日本医学会」へ加入 |
| 1920 | 大正 9 | 血圧測定を危険選択に導入 |
| 1923 | 大正12 | 医務部委員会（生命保険協会）設置 |
| 1935 | 昭和10 | 第1回国際生命保険医学会（ICLAM）開催（ロンドン） |
| 1936 | 昭和11 | 「日本保険医学会」と改名（4月24日） |
| 1946 | 昭和21 | 医務委員会（生命保険協会）設置 |
| 1947 | 昭和22 | 日本保険医学会が日本医学会第33分科会と規定<br>衛生学会や公衆衛生学会などとともに第3部会（社会医学）となる（生命並びに疾病の長期予後の研究調査を主たるテーマとする学会活動） |
| 1951 | 昭和26 | 日本保険医学会創立50周年記念総会 |
| 1952 | 昭和27 | 第4回国際保険医学会に戦後はじめて日本保険医学会より出席<br>この頃，胸部X線撮影が多くの会社で制度化 |
| 1955 | 昭和30 | この頃より，試験紙による検尿開始 |

| 西暦 | 年号 | 記　　事 |
|---|---|---|
| 1958 | 昭和33 | 心電図検査を危険選択に導入 |
| 1959 | 昭和34 | 第15回日本医学会総会にはじめて日本保険医学会より発表（高血圧成因のシンポジウム）<br>この頃より，健康証明書（個別代用診査，健康診断書扱等）の取扱開始 |
| 1962 | 昭和37 | 血圧測定研究会設置 |
| 1964 | 昭和39 | 災害保障特約販売開始（全社統一約款による） |
| 1965 | 昭和40 | 死亡率調査委員会（医務委員会）設置 |
| 1968 | 昭和43 | 「日本保険医学会65年史」発刊 |
| 1969 | 昭和44 | 第１回日本全会社生命表（1960～1963）作成発表 |
| 1972 | 昭和47 | 「日本保険医学用語集」発刊 |
| 1973 | 昭和48 | 面接士（検定調査士）制度発足 |
| 1974 | 昭和49 | この頃より，疾病入院および手術給付特約の販売本格化<br>日本保険医学会「あり方委員会」設置 |
| 1975 | 昭和50 | 共同研究班設置（JRと共同研究） |
| 1976 | 昭和51 | 日本保険医学会ニュース第１号発行<br>女性保険料率導入<br>成人病入院特約販売 |
| 1977 | 昭和52 | PGE（Post Graduate Education）開始<br>1988年（昭和63年）設置の教育委員会へ継続 |
| 1978 | 昭和53 | 統一モデル告知書を全社的に使用開始<br>約款検討専門委員会（医務委員会）設置 |
| 1980 | 昭和55 | 共同研究を東京女子医大と開始 |
| 1981 | 昭和56 | 日本保険医学会創立80周年記念総会<br>「日本保険医学会80年史」発刊 |
| 1984 | 昭和59 | 血液検査の危険選択への導入 |

| 西暦 | 年号 | 記　　事 |
|---|---|---|
| 1986 | 昭和61 | 東京にて，第15回国際生命保険医学会議（ICLAM）開催<br>変額保険販売 |
| 1987 | 昭和62 | 腫瘍マーカーの危険選択への導入<br>1995～1996年にかけて多くの会社で施行 |
| 1988 | 昭和63 | 医療保障保険（個人型）販売 |
| 1991 | 平成 3 | 日本保険医学会90周年記念総会<br>日本保険医学会シンボルマーク制定 |
| 1992 | 平成 4 | 日本保険医学会認定医制度発足<br>「中浜東一郎日記」発刊<br>平成 7 年第 5 巻にて完結<br>生前給付保険販売<br>「生命保険医学」（日本保険医学会教科書）発刊 |
| 1993 | 平成 5 | 「AIDSと保険医学」研究会報告書発刊<br>（1981年米国で初のエイズ報道） |
| 1994 | 平成 6 | 「脳死・臓器移植と生命保険」研究会報告書発刊<br>（1979年日本初の死体腎移植）<br>（1989年日本初の生体肝移植）<br>（1993年日本初の脳死肝移植） |
| 1996 | 平成 8 | 「遺伝子検査と生命保険」研究会報告書発刊<br>新保険業法施行 |
| 1998 | 平成10 | 非喫煙者割引保険（優良体保険）を数社で販売開始<br>金融監督庁発足 |
| 2000 | 平成12 | 医務委員会の名称消滅，「契約サービス委員会医務部会」となる。<br>（生命保険協会組織再編）<br>日本保険医学会ホームページ開設 |
| 2001 | 平成13 | 日本保険医学会創立100周年記念総会<br>「日本保険医学会100年史」発刊 |

# Ⅱ 本 部 役 員

## 保険醫協会

明治32年

| | | |
|---|---|---|
| 幹　事 | 進藤隆之助 | （護國生命） |
| 幹　事 | 小池　義三 | （仁壽生命） |
| 幹　事 | 佐藤　　保 | （大日本生命） |
| 幹　事 | 平内　佳一 | （六條生命） |

明治33年

| | | |
|---|---|---|
| 幹　事 | 進藤隆之助 | （護國生命） |
| 幹　事 | 小池　義三 | （開業） |
| 幹　事 | 佐藤　　保 | （大日本生命） |
| 幹　事 | 平内　佳一 | （六條生命） |

## 日本保険醫協会

明治34年

| | | |
|---|---|---|
| 会　長 | 中浜東一郎 | （明治生命） |
| 副会長 | 矢野　恒太 | （農商務省） |
| 幹　事 | 進藤隆之助 | （護國生命） |
| 幹　事 | 小池　義三 | （開業） |
| 幹　事 | 石岡繁太郎 | （共済生命） |

明治35年

| | | |
|---|---|---|
| 会　長 | 中浜東一郎 | （明治生命） |
| 副会長 | 矢野　恒太 | （農商務省） |
| 幹　事 | 進藤隆之助 | （護國生命） |
| 幹　事 | 石岡繁太郎 | （共済生命） |
| 幹　事 | 尼子　四郎 | （内國生命） |

明治36年度

| | | |
|---|---|---|
| 会　長 | 中浜東一郎 | （明治生命） |

| | |
|---|---|
| 副 会 長 | 矢野　恒太（第一生命） |
| 幹　　事 | 進藤隆之助（大同生命） |
| 幹　　事 | 石岡繁太郎（開業） |
| 幹　　事 | 尼子　四郎（内國生命） |

明治37年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 中浜東一郎（明治生命） |
| 副 会 長 | 矢野　恒太（第一生命） |
| 幹　　事 | 石岡繁太郎（第一生命） |
| 幹　　事 | 丸岡　真義（日本生命） |
| 幹　　事 | 森本　誠之（内國生命） |

明治38年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 中浜東一郎（明治生命） |
| 副 会 長 | 矢野　恒太（第一生命） |
| 幹　　事 | 石岡繁太郎（第一生命） |
| 幹　　事 | 大島　　楳（日本生命） |
| 幹　　事 | 森本　誠之（内國生命） |

明治39年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 中浜東一郎（明治生命） |
| 副 会 長 | 矢野　恒太（第一生命） |
| 幹　　事 | 石岡繁太郎（第一生命） |
| 幹　　事 | 大島　　楳（日本生命） |
| 幹　　事 | 森本　誠之（内國生命） |

明治40年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 中浜東一郎（明治生命） |
| 副 会 長 | 矢野　恒太（第一生命） |
| 幹　　事 | 石岡繁太郎（第一生命） |
| 幹　　事 | 大島　　楳（日本生命） |
| 幹　　事 | 森本　誠之（内國生命） |

明治41年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 中浜東一郎（明治生命） |
| 副 会 長 | 矢野　恒太（第一生命） |

| | | |
|---|---|---|
| 幹　　事 | 石岡繁太郎（第一生命） |
| 幹　　事 | 玉崎　隆三（帝國生命） |
| 幹　　事 | 森本　誠之（内國生命） |

明治42年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 中浜東一郎（明治生命） |
| 副 会 長 | 矢野　恒太（第一生命） |
| 幹　　事 | 石岡繁太郎（第一生命） |
| 幹　　事 | 玉崎　隆三（帝國生命） |
| 幹　　事 | 森本　誠之（内國生命） |

明治43年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 中浜東一郎（明治生命） |
| 副 会 長 | 矢野　恒太（第一生命） |
| 幹　　事 | 野間　謹治（第一生命） |
| 幹　　事 | 玉崎　隆三（帝國生命） |
| 幹　　事 | 諫山　　直（國光生命） |

明治44年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 中浜東一郎（日之出生命） |
| 副 会 長 | 鈴木孝之助（明治生命） |
| 幹　　事 | 野間　謹治（第一生命） |
| 幹　　事 | 玉崎　隆三（帝國生命） |
| 幹　　事 | 諫山　　直（國光生命） |

明治45（大正元）年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 中浜東一郎（日之出生命） |
| 副 会 長 | 栗本　東明（明治生命） |
| 幹　　事 | 野間　謹治（第一生命） |
| 幹　　事 | 玉崎　隆三（帝國生命） |
| 幹　　事 | 諫山　　直（國光生命） |

大正２年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 中浜東一郎（日之出生命） |
| 副 会 長 | 栗本　東明（明治生命） |
| 幹　　事 | 野間　謹治（第一生命） |
| 幹　　事 | 玉崎　隆三（帝國生命） |

| | |
|---|---|
| 幹　事 | 諫山　直（國光生命） |

大正３年度

| | |
|---|---|
| 会　長 | 中浜東一郎（日之出生命） |
| 副会長 | 栗本　東明（明治生命） |
| 幹　事 | 野間　謹治（第一生命） |
| 幹　事 | 玉崎　隆三（帝國生命） |
| 幹　事 | 諫山　直（國光生命） |

大正４年度

| | |
|---|---|
| 会　長 | 中浜東一郎（日之出生命） |
| 副会長 | 栗本　東明（明治生命） |
| 幹　事 | 石岡繁太郎（第一生命） |
| 幹　事 | 三好常三郎（帝國生命） |
| 幹　事 | 高田他家雄（明治生命） |

大正５年度

| | |
|---|---|
| 会　長 | 中浜東一郎（日之出生命） |
| 副会長 | 栗本　東明（明治生命） |
| 幹　事 | 石岡繁太郎（第一生命） |
| 幹　事 | 三好常三郎（帝國生命） |
| 幹　事 | 高田他家雄（明治生命） |

大正６年度

| | |
|---|---|
| 会　長 | 中浜東一郎（日之出生命） |
| 副会長 | 栗本　東明（明治生命） |
| 幹　事 | 石岡繁太郎（第一生命） |
| 幹　事 | 三好常三郎（帝國生命） |
| 幹　事 | 高田他家雄（明治生命） |

大正７年度

| | |
|---|---|
| 会　長 | 中浜東一郎（日之出生命） |
| 副会長 | 栗本　東明（明治生命） |
| 幹　事 | 石岡繁太郎（第一生命） |
| 幹　事 | 三好常三郎（帝國生命） |
| 幹　事 | 高田他家雄（明治生命） |

大正８年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 中浜東一郎（日之出生命） |
| 副 会 長 | 栗本　東明（明治生命） |
| 幹　　事 | 石岡繁太郎（第一生命） |
| 幹　　事 | 三好常三郎（帝國生命） |
| 幹　　事 | 高田他家雄（明治生命） |

大正９年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 中浜東一郎（日之出生命） |
| 副 会 長 | 栗本　東明（明治生命） |
| 幹　　事 | 石岡繁太郎（第一生命） |
| 幹　　事 | 三好常三郎（帝國生命） |
| 幹　　事 | 高田他家雄（明治生命） |

大正10年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 中浜東一郎（日之出生命） |
| 副 会 長 | 栗本　東明（明治生命） |
| 幹　　事 | 石岡繁太郎（第一生命） |
| 幹　　事 | 秋山　妙治（帝國生命） |
| 幹　　事 | 高田他家雄（明治生命） |

大正11年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 中浜東一郎（日之出生命） |
| 副 会 長 | 栗本　東明（明治生命） |
| 幹　　事 | 石岡繁太郎（第一生命） |
| 幹　　事 | 秋山　妙治（帝國生命） |
| 幹　　事 | 高田他家雄（明治生命） |

大正12年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 中浜東一郎（日之出生命） |
| 副 会 長 | 石岡繁太郎（第一生命） |
| 幹　　事 | 秋山　妙治（帝國生命） |
| 幹　　事 | 高田他家雄（明治生命） |

大正13年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 中浜東一郎（日之出生命） |

副 会 長　　石岡繁太郎（第一生命）
幹　　事　　秋山　妙治（帝國生命）
幹　　事　　高田他家雄（明治生命）
幹　　事　　石岡繁太郎（第一生命）

大正14年度
会　　長　　中浜東一郎（日之出生命）
副 会 長　　石岡繁太郎（第一生命）
幹　　事　　高田他家雄（明治生命）
幹　　事　　石岡繁太郎（第一生命）

大正15（昭和元）年度
会　　長　　中浜東一郎（日之出生命）
副 会 長　　石岡繁太郎（第一生命）
幹　　事　　高田他家雄（明治生命）
幹　　事　　石岡繁太郎（第一生命）

昭和２年度
会　　長　　中浜東一郎（日之出生命）
副 会 長　　石岡繁太郎（第一生命）
幹　　事　　高田他家雄（明治生命）
幹　　事　　高田義一郎（仁壽生命）
幹　　事　　石岡繁太郎（第一生命）

昭和３年度
会　　長　　中浜東一郎（日之出生命）
副 会 長　　石岡繁太郎（第一生命）
幹　　事　　高田他家雄（明治生命）
幹　　事　　高田義一郎（仁壽生命）
幹　　事　　石岡繁太郎（第一生命）

昭和４年度
会　　長　　中浜東一郎（日之出生命）
副 会 長　　石岡繁太郎（第一生命）
幹　　事　　高田他家雄（明治生命）
幹　　事　　高田義一郎（仁壽生命）

| | |
|---|---|
| 幹　　事 | 石岡繁太郎（第一生命） |

昭和5年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 石岡繁太郎（第一生命） |
| 副 会 長 | 竹田　六郎（太陽生命） |
| 副 会 長 | 丹治　善造（日本生命） |
| 幹　　事 | 渡辺　　定（安田生命） |
| 幹　　事 | 神山能寶留（常磐生命） |
| 幹　　事 | 高田他家雄（明治生命） |

昭和6年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 石岡繁太郎（第一生命） |
| 副 会 長 | 竹田　六郎（太陽生命） |
| 副 会 長 | 丹治　善造（日本生命） |
| 幹　　事 | 渡辺　　定（安田生命） |
| 幹　　事 | 神山能寶留（常磐生命） |
| 幹　　事 | 高田他家雄（明治生命） |

昭和7年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 石岡繁太郎（第一生命） |
| 副 会 長 | 竹田　六郎（太陽生命） |
| 副 会 長 | 丹治　善造（日本生命） |
| 幹　　事 | 渡辺　　定（安田生命） |
| 幹　　事 | 神山能寶留（常磐生命） |
| 幹　　事 | 高田他家雄（明治生命） |

昭和8年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 石岡繁太郎（第一生命） |
| 副 会 長 | 竹田　六郎（太陽生命） |
| 副 会 長 | 丹治　善造（日本生命） |
| 幹　　事 | 渡辺　　定（安田生命） |
| 幹　　事 | 神山能寶留（常磐生命） |
| 幹　　事 | 高田他家雄（明治生命） |

昭和9年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 石岡繁太郎（第一生命） |

| | |
|---|---|
| 副 会 長 | 竹田　六郎（太陽生命） |
| 副 会 長 | 丹治　善造（日本生命） |
| 幹　　事 | 渡辺　　定（安田生命） |
| 幹　　事 | 神山能寶留（常磐生命） |
| 幹　　事 | 高田他家雄（明治生命） |

昭和10年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 石岡繁太郎（第一生命） |
| 副 会 長 | 竹田　六郎（太陽生命） |
| 副 会 長 | 増田　雷助（大同生命） |
| 会計事務幹事 | 平松　濤平（帝國生命） |
| 庶務幹事 | 高田他家雄（明治生命） |
| 庶務幹事 | 川口　輝志（愛國生命） |
| 雑誌事務幹事 | 渡辺　　定（安田生命） |
| 幹　　事 | 原田謙太郎（明治生命） |
| 幹　　事 | 神山能寶留（常磐生命） |
| 幹　　事 | 大村　　正（東洋生命） |
| 幹　　事 | 大串菊太郎（千代田生命） |
| 幹　　事 | 沢田　嘉吉（野村生命） |
| 幹　　事 | 鈴木　　又（日清生命） |

昭和11年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 石岡繁太郎（第一生命） |
| 副 会 長 | 竹田　六郎（太陽生命） |
| 副 会 長 | 増田　雷助（大同生命） |
| 常任幹事 | 渡辺　　定（安田生命） |
| 常任幹事 | 川口　輝志（愛國生命） |
| 常任幹事 | 高田他家雄（明治生命） |
| 常任幹事 | 平松　濤平（帝國生命） |
| 幹　　事 | 原田謙太郎（明治生命） |
| 幹　　事 | 神山能寶留（常磐生命） |
| 幹　　事 | 田中　眞平（三井生命） |
| 幹　　事 | 大串菊太郎（千代田生命） |
| 幹　　事 | 沢田　嘉吉（野村生命） |
| 幹　　事 | 鈴木　　又（日清生命） |

昭和12年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 石岡繁太郎（第一生命） |
| 副 会 長 | 竹田　六郎（太陽生命） |
| 副 会 長 | 増田　雷助（大同生命） |
| 常任幹事 | 渡辺　　定（安田生命） |
| 常任幹事 | 川口　輝志（愛國生命） |
| 常任幹事 | 高田他家雄（明治生命） |
| 常任幹事 | 平松　濤平（帝國生命） |
| 幹　　事 | 原田謙太郎（明治生命） |
| 幹　　事 | 神山能寶留（常磐生命） |
| 幹　　事 | 田中　眞平（三井生命） |
| 幹　　事 | 大串菊太郎（千代田生命） |
| 幹　　事 | 沢田　嘉吉（野村生命） |
| 幹　　事 | 鈴木　　又（日清生命） |

昭和13年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 石岡繁太郎（第一生命） |
| 副 会 長 | 竹田　六郎（太陽生命） |
| 副 会 長 | 増田　雷助（大同生命） |
| 常任幹事 | 渡辺　　定（安田生命） |
| 常任幹事 | 川口　輝志（愛國生命） |
| 常任幹事 | 高田他家雄（明治生命） |
| 常任幹事 | 平松　濤平（帝國生命） |
| 幹　　事 | 原田謙太郎（明治生命） |
| 幹　　事 | 神山能寶留（常磐生命） |
| 幹　　事 | 田中　眞平（三井生命） |
| 幹　　事 | 大串菊太郎（千代田生命） |
| 幹　　事 | 沢田　嘉吉（野村生命） |
| 幹　　事 | 鈴木　　又（日清生命） |

昭和14年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 高田他家雄（明治生命） |
| 副 会 長 | 大串菊太郎（千代田生命） |
| 副 会 長 | 増田　雷助（大同生命） |
| 当番幹事 | 川口　輝志（愛國生命） |
| 当番幹事 | 平松　濤平（帝國生命） |

| | | |
|---|---|---|
| 幹　　事 | 板沢　政治 | （第一生命） |
| 幹　　事 | 一色　嗣武 | （帝國生命） |
| 幹　　事 | 住西　　彰 | （仁壽生命） |
| 幹　　事 | 渡辺　　定 | （安田生命） |
| 幹　　事 | 神山能寶留 | （常磐生命） |
| 幹　　事 | 田中　眞平 | （三井生命） |
| 幹　　事 | 竹田　六郎 | （太陽生命） |
| 幹　　事 | 前田　春雄 | （共立生命） |
| 幹　　事 | 沢田　嘉吉 | （野村生命） |
| 幹　　事 | 徐　　昌道 | （有隣生命） |
| 幹　　事 | 鈴木　　又 | （日清生命） |

昭和15年度

| | | |
|---|---|---|
| 会　　長 | 高田他家雄 | （明治生命） |
| 副 会 長 | 大串菊太郎 | （千代田生命） |
| 副 会 長 | 増田　雷助 | （大同生命） |
| 常任幹事 | 川口　輝志 | （愛國生命） |
| 常任幹事 | 平松　濤平 | （帝國生命） |
| 常任幹事 | 茂在　　照 | （第一生命） |

昭和16年度

| | | |
|---|---|---|
| 会　　長 | 寶吉　純郎 | （昭和生命） |
| 副 会 長 | 川口　輝志 | （愛國生命） |
| 副 会 長 | 増田　雷助 | （大同生命） |
| 常任幹事 | 川口　輝志 | （愛國生命） |
| 常任幹事 | 平松　濤平 | （帝國生命） |
| 常任幹事 | 茂在　　照 | （第一生命） |

昭和17年度

| | | |
|---|---|---|
| 会　　長 | 高田他家雄 | （明治生命） |
| 副 会 長 | 川口　輝志 | （愛國生命） |
| 副 会 長 | 中條　鋭一 | （住友生命） |
| 会計幹事 | 川口　輝志 | （愛國生命） |
| 雑誌幹事 | 一色　嗣武 | （帝國生命） |
| 庶務幹事 | 原田謙太郎 | （明治生命） |
| 研究会幹事 | 三谷　章次 | （千代田生命） |

昭和18年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 増田　雷助（大同生命） |
| 副 会 長 | 川口　輝志（愛國生命） |
| 副 会 長 | 中條　鋭一（住友生命） |
| 会計幹事 | 板沢　政治（第一生命） |
| 雑誌幹事 | 一色　嗣武（帝國生命） |
| 庶務幹事 | 原田謙太郎（明治生命） |
| 研究会幹事 | 三谷　章次（千代田生命） |

昭和19年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 川口　輝志（愛國生命） |
| 副 会 長 | 茂在　　照（第一生命） |
| 副 会 長 | 中條　鋭一（住友生命） |
| 幹　　事 | 一色　嗣武（帝國生命） |
| 幹　　事 | 三谷　章次（千代田生命） |
| 幹　　事 | 新田　義直（日本生命） |
| 幹　　事 | 景山　　直（明治生命） |

昭和20年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 古瀬　安俊（中央会） |
| 副 会 長 | 茂在　　照（第一生命） |
| 副 会 長 | 中條　鋭一（住友生命） |
| 幹　　事 | 一色　嗣武（帝國生命） |
| 幹　　事 | 西　　卓爾（日本生命） |
| 幹　　事 | 三谷　章次（千代田生命） |
| 幹　　事 | 新田　義直（日本生命） |
| 幹　　事 | 景山　　直（明治生命） |

昭和21年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 一色　嗣武（帝國生命） |
| 副 会 長 | 三谷　章次（千代田生命） |
| 副 会 長 | 伊藤　中二（日本生命） |
| 庶務幹事兼雑誌幹事 | 町田　　信（三井生命） |
| 会計幹事 | 稲田　　淳（第一生命） |
| 幹　　事 | 熊田　修一（光生生命） |
| 幹　　事 | 景山　　直（明治生命） |

昭和 22 年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 一色　嗣武（朝日生命） |
| 副 会 長 | 町田　　信（三井生命） |
| 副 会 長 | 伊藤　中二（日本生命） |
| 会計幹事 | 稲田　　淳（第一生命） |
| 研究会幹事 | 熊田　修一（光生生命） |
| 庶務幹事 | 山崎　健雄（明治生命） |
| 雑誌幹事 | 岩田　　鎭（富國生命） |

昭和 23 年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 一色　嗣武（朝日生命） |
| 副 会 長 | 草刈　春逸（国民生命） |
| 副 会 長 | 伊藤　中二（日本生命） |
| 会計幹事 | 稲田　　淳（第一生命） |
| 研究会幹事 | 熊田　修一（光生生命） |
| 庶務幹事 | 山崎　健雄（明治生命） |
| 厚生幹事 | 三上　治夫（東京生命） |
| 雑誌幹事 | 岩田　　鎭（富國生命） |

昭和 24 年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 一色　嗣武（朝日生命） |
| 副 会 長 | 町田　　信（三井生命） |
| 副 会 長 | 岡　　為輔（大同生命） |
| 幹事（庶務） | 山崎　健雄（明治生命） |
| 幹事（会計） | 細谷　重雄（第百生命） |
| 幹事（研究会） | 岩田　　鎭（富国生命） |
| 幹事（雑誌） | 三上　治夫（東京生命） |
| 幹事（厚生） | 大谷　英男（日本生命） |

昭和 25 年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 一色　嗣武（朝日生命） |
| 副 会 長 | 町田　　信（三井生命） |
| 副 会 長 | 岡　　為輔（大同生命） |
| 幹事（会計） | 細谷　重雄（第百生命） |
| 幹事（厚生） | 大谷　英男（日本生命） |
| 幹事（庶務） | 山崎　健雄（明治生命） |

| | |
|---|---|
| 幹事（雑誌） | 三上　治夫（東京生命） |
| 幹事（研究会） | 岩田　　鎭（富国生命） |

昭和 26 年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 町田　　信（三井生命） |
| 副 会 長 | 稲田　　淳（第一生命） |
| 副 会 長 | 岡　　為輔（大同生命） |
| 関西会長 | 伊藤　中二（日本生命） |

昭和 27 年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 町田　　信（三井生命） |
| 副 会 長 | 稲田　　淳（第一生命） |
| 副 会 長 | 山本　亮毅（日本生命） |
| 庶務幹事 | 三上　治夫（東京生命） |
| 会計幹事 | 八木沢光孝（協栄生命） |
| 研究幹事 | 平松左右一（安田生命） |
| 雑誌幹事 | 大谷　英男（日本生命） |
| 厚生幹事 | 小池　博美（住友生命） |

昭和 28 年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 徐　　昌道（東邦生命） |
| 副 会 長 | 岡村　正雄（千代田生命） |
| 副 会 長 | 山本　亮毅（日本生命） |
| 庶務幹事 | 山崎　健雄（明治生命） |
| 会計幹事 | 細谷　重雄（第百生命） |
| 研究幹事 | 岩田　　鎭（富国生命） |
| 雑誌幹事 | 原　　滋（日産生命） |
| 厚生幹事 | 川幡　千秋（平和生命） |

昭和 29 年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 徐　　昌道（東邦生命） |
| 副 会 長 | 岡村　正雄（千代田生命） |
| 副 会 長 | 幸島　春夫（住友生命） |
| 庶務幹事 | 山崎　健雄（明治生命） |
| 会計幹事 | 細谷　重雄（第百生命） |
| 研究幹事 | 平松左右一（安田生命） |

| | | |
|---|---|---|
| 雑誌幹事 | 原　　滋 | （日産生命） |
| 厚生幹事 | 三上　治夫 | （東京生命） |

昭和30年度

| | | |
|---|---|---|
| 会　　長 | 稲田　　淳 | （第一生命） |
| 副 会 長 | 三上　治夫 | （東京生命） |
| 副 会 長 | 幸島　春夫 | （住友生命） |
| 庶務幹事 | 岩田　　鑭 | （富国生命） |
| 会計幹事 | 八木沢光孝 | （協栄生命） |
| 研究幹事 | 大谷　英男 | （日本生命） |
| 雑誌幹事 | 谷嶋　辰男 | （朝日生命） |
| 厚生幹事 | 小池　博美 | （住友生命） |

昭和31年度

| | | |
|---|---|---|
| 会　　長 | 稲田　　淳 | （第一生命） |
| 副 会 長 | 三上　治夫 | （東京生命） |
| 副 会 長 | 岡　　為輔 | （大同生命） |
| 庶務幹事 | 岩田　　鑭 | （富国生命） |
| 会計幹事 | 八木沢光孝 | （協栄生命） |
| 研究幹事 | 大谷　英男 | （日本生命） |
| 雑誌幹事 | 谷嶋　辰男 | （朝日生命） |
| 厚生幹事 | 平松左右一 | （安田生命） |

昭和32年度

| | | |
|---|---|---|
| 会　　長 | 三上　治夫 | （東京生命） |
| 副 会 長 | 山崎　健雄 | （明治生命） |
| 副 会 長 | 岡　　為輔 | （大同生命） |
| 庶務幹事 | 大谷　英男 | （日本生命） |
| 会計幹事 | 細谷　重雄 | （第百生命） |
| 研究幹事 | 金井　　潔 | （三井生命） |
| 雑誌幹事 | 谷嶋　辰男 | （朝日生命） |
| 厚生幹事 | 宮沢真左男 | （千代田生命） |

昭和33年度

| | | |
|---|---|---|
| 会　　長 | 三上　治夫 | （東京生命） |
| 副 会 長 | 山崎　健雄 | （明治生命） |

| | |
|---|---|
| 副 会 長 | 山本　亮毅（日本生命） |
| 庶務幹事 | 大谷　英男（日本生命） |
| 会計幹事 | 細谷　重雄（第百生命） |
| 研究幹事 | 平松左右一（安田生命） |
| 雑誌幹事 | 金井　　潔（三井生命） |
| 厚生幹事 | 春日　沢男（住友生命） |

昭和34年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 山崎　健雄（明治生命） |
| 副 会 長 | 谷嶋　辰男（朝日生命） |
| 副 会 長 | 小池　博美（住友生命） |
| 庶務幹事 | 八木沢光孝（協栄生命） |
| 会計幹事 | 伊東　　茂（日本生命） |
| 研究幹事 | 平尾　正治（第一生命） |
| 雑誌幹事 | 高橋　　順（千代田生命） |
| 厚生幹事 | 春日　沢男（住友生命） |

昭和35年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 山崎　健雄（明治生命） |
| 副 会 長 | 谷嶋　辰男（朝日生命） |
| 副 会 長 | 小池　博美（住友生命） |
| 庶務幹事 | 八木沢光孝（協栄生命） |
| 会計幹事 | 伊東　　茂（日本生命） |
| 研究幹事 | 平尾　正治（第一生命） |
| 雑誌幹事 | 高橋　　順（千代田生命） |
| 厚生幹事 | 春日　沢男（住友生命） |

昭和36年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 谷嶋　辰男（朝日生命） |
| 副 会 長 | 平松左右一（安田生命） |
| 副 会 長 | 岡　　為輔（大同生命） |
| 庶務幹事 | 木野村扶桑（平和生命） |
| 会計幹事 | 町田　靖雄（大正生命） |
| 研究幹事 | 岩田　　鎭（富国生命） |
| 雑誌幹事 | 伊東　　茂（日本生命） |
| 厚生幹事 | 高橋　　順（千代田生命） |

昭和37年度

| | | |
|---|---|---|
| 会　　長 | 谷嶋　辰男 | （朝日生命） |
| 副 会 長 | 平松左右一 | （安田生命） |
| 副 会 長 | 岡　　為輔 | （大同生命） |
| 庶務幹事 | 木野村扶桑 | （平和生命） |
| 会計幹事 | 町田　靖雄 | （大正生命） |
| 研究幹事 | 岩田　　鎭 | （富国生命） |
| 雑誌幹事 | 伊東　　茂 | （日本生命） |
| 厚生幹事 | 高橋　　順 | （千代田生命） |

昭和38年度

| | | |
|---|---|---|
| 会　　長 | 細谷　重雄 | （第百生命） |
| 副 会 長 | 岩田　　鎭 | （富国生命） |
| 副 会 長 | 三科　洵一 | （日本生命） |
| 庶務幹事 | 館野　　豊 | （安田生命） |
| 会計幹事 | 金丸　武夫 | （第一生命） |
| 研究幹事 | 金井　　潔 | （三井生命） |
| 雑誌幹事 | 上野　元男 | （日本生命） |
| 厚生幹事 | 高橋　　順 | （千代田生命） |

昭和39年度

| | | |
|---|---|---|
| 会　　長 | 細谷　重雄 | （第百生命） |
| 副 会 長 | 原　　滋 | （日産生命） |
| 副 会 長 | 三科　洵一 | （日本生命） |
| 庶務幹事 | 鈴木　　馨 | （日本生命） |
| 会計幹事 | 金丸　武夫 | （第一生命） |
| 研究幹事 | 金井　　潔 | （三井生命） |
| 雑誌幹事 | 館野　　豊 | （安田生命） |
| 厚生幹事 | 高橋　　順 | （千代田生命） |
| 監　　事 | 吉川　武夫 | （朝日生命） |

昭和40年度

| | | |
|---|---|---|
| 会　　長 | 原　　滋 | （日産生命） |
| 副 会 長 | 吉川　武夫 | （朝日生命） |
| 副 会 長 | 石田　　孚 | （住友生命） |
| 庶務幹事 | 鈴木　　馨 | （日本生命） |

| | | |
|---|---|---|
| 会計幹事 | 水戸　良七 | （三井生命） |
| 研究幹事 | 吉田　　忠 | （明治生命） |
| 雑誌幹事 | 小西　公三 | （富国生命） |
| 厚生幹事 | 安倍　由巳 | （大和生命） |
| 監　　事 | 金丸　武夫 | （第一生命） |

昭和41年度

| | | |
|---|---|---|
| 会　　長 | 原　　滋 | （日産生命） |
| 副 会 長 | 吉田　　忠 | （明治生命） |
| 副 会 長 | 有澤　　誠 | （大同生命） |
| 庶務幹事 | 鈴木　　馨 | （日本生命） |
| 会計幹事 | 水戸　良七 | （三井生命） |
| 研究幹事 | 平尾　正治 | （第一生命） |
| 雑誌幹事 | 高橋三代司 | （千代田生命） |
| 厚生幹事 | 安倍　由巳 | （大和生命） |
| 監　　事 | 小西　公三 | （富国生命） |

昭和42年度

| | | |
|---|---|---|
| 会　　長 | 吉田　　忠 | （明治生命） |
| 副 会 長 | 小西　公三 | （富国生命） |
| 副 会 長 | 有澤　　誠 | （大同生命） |
| 庶務幹事 | 大竹　喜彦 | （朝日生命） |
| 会計幹事 | 原川　信次 | （三井生命） |
| 研究幹事 | 平尾　正治 | （第一生命） |
| 雑誌幹事 | 館野　　豊 | （安田生命） |
| 監　　事 | 上野　元男 | （日本生命） |

昭和43年度

| | | |
|---|---|---|
| 会　　長 | 吉田　　忠 | （明治生命） |
| 副 会 長 | 小西　公三 | （富国生命） |
| 副 会 長 | 岸　　哲雄 | （住友生命） |
| 庶務幹事 | 佐藤　繁治 | （第百生命） |
| 会計幹事 | 斎藤　武彦 | （日本団体生命） |
| 研究幹事 | 館野　　豊 | （安田生命） |
| 雑誌監事 | 大竹　喜彦 | （朝日生命） |
| 監　　事 | 上野　元男 | （日本生命） |

昭和44年度

| | | |
|---|---|---|
| 会　　長 | 上野　元男 | （日本生命） |
| 副 会 長 | 小西　公三 | （富国生命） |
| 副 会 長 | 館野　　豊 | （安田生命） |
| 庶務幹事 | 佐藤　繁治 | （第百生命） |
| 会計幹事 | 斎藤　武彦 | （日本団体生命） |
| 研究幹事 | 大竹　喜彦 | （朝日生命） |
| 雑誌監事 | 原川　信次 | （三井生命） |
| 監　　事 | 平尾　正治 | （第一生命） |

昭和45年度

| | | |
|---|---|---|
| 会　　長 | 上野　元男 | （日本生命） |
| 副 会 長 | 小西　公三 | （富国生命） |
| 副 会 長 | 館野　　豊 | （安田生命） |
| 庶務幹事 | 佐藤　繁治 | （第百生命） |
| 会計幹事 | 斎藤　武彦 | （日本団体生命） |
| 研究幹事 | 大竹　喜彦 | （朝日生命） |
| 雑誌監事 | 原川　信次 | （三井生命） |
| 監　　事 | 平尾　正治 | （第一生命） |

昭和46年度

| | | |
|---|---|---|
| 会　　長 | 館野　　豊 | （安田生命） |
| 副 会 長 | 大竹　喜彦 | （朝日生命） |
| 副 会 長 | 有澤　　誠 | （大同生命） |
| 庶務幹事 | 原川　信次 | （三井生命） |
| 会計幹事 | 斎藤　武彦 | （日本団体生命） |
| 研究幹事 | 三原　　通 | （明治生命） |
| 雑誌監事 | 奈良　勝典 | （東京生命） |
| 監　　事 | 平尾　正治 | （第一生命） |

昭和47年度

| | | |
|---|---|---|
| 会　　長 | 館野　　豊 | （安田生命） |
| 副 会 長 | 大竹　喜彦 | （朝日生命） |
| 副 会 長 | 有澤　　誠 | （大同生命） |
| 庶務幹事 | 原川　信次 | （三井生命） |
| 会計幹事 | 斎藤　武彦 | （日本団体生命） |

| | |
|---|---|
| 研究幹事 | 三原　　通（明治生命） |
| 雑誌幹事 | 奈良　勝典（東京生命） |
| 監　　事 | 平尾　正治（第一生命） |
| 監　　事 | 浮島　晤郎（千代田生命） |

昭和 48 年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 鳥井　静夫（日本生命） |
| 副 会 長 | 大竹　喜彦（朝日生命） |
| 庶務幹事 | 川崎　輝治（三井生命） |
| 会計幹事 | 斎藤　武彦（日本団体生命） |
| 研究幹事 | 佐々　千之（第一生命） |
| 会誌幹事 | 荒川　三郎（安田生命） |
| 幹　　事 | 三原　　通（明治生命） |
| 幹　　事 | 高橋　　静（千代田生命） |
| 監　　事 | 奈良　勝典（東京生命） |
| 監　　事 | 平位　　勉（住友生命） |

昭和 49 年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 鳥井　静夫（日本生命） |
| 副 会 長 | 大竹　喜彦（朝日生命） |
| 庶務幹事 | 川崎　輝治（三井生命） |
| 会計幹事 | 斎藤　武彦（日本団体生命） |
| 研究幹事 | 佐々　千之（第一生命） |
| 会誌幹事 | 小原　　護（明治生命） |
| 広報幹事 | 荒川　三郎（安田生命） |
| 幹　　事 | 高橋　　静（千代田生命） |
| 監　　事 | 奈良　勝典（東京生命） |
| 監　　事 | 平位　　勉（住友生命） |

昭和 50 年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 大竹　喜彦（朝日生命） |
| 副 会 長 | 有澤　　誠（大同生命） |
| 庶務幹事 | 川崎　輝治（三井生命） |
| 会計幹事 | 斎藤　武彦（日本団体生命） |
| 研究幹事 | 安藤　博章（日本生命） |
| 会誌幹事 | 小原　　護（明治生命） |

| | |
|---|---|
| 広報幹事 | 荒川　三郎（安田生命） |
| 幹　　事 | 斎藤　弘吉（第一生命） |
| 監　　事 | 平位　　勉（住友生命） |
| 監　　事 | 奈良　勝典（東京生命） |

昭和 51 年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 大竹　喜彦（朝日生命） |
| 副 会 長 | 有澤　　誠（大同生命） |
| 庶務幹事 | 斎藤　武彦（日本団体生命） |
| 会計幹事 | 浅井　末得（三井生命） |
| 研究幹事 | 安藤　博章（日本生命） |
| 会誌幹事 | 小原　　護（明治生命） |
| 広報幹事 | 荒川　三郎（安田生命） |
| 幹　　事 | 斎藤　弘吉（第一生命） |
| 監　　事 | 平位　　勉（住友生命） |
| 監　　事 | 奈良　勝典（東京生命） |

昭和 52 年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 大竹　喜彦（朝日生命） |
| 副 会 長 | 有澤　　誠（大同生命） |
| 庶務幹事 | 斎藤　武彦（日本団体生命） |
| 会計幹事 | 浅井　末得（三井生命） |
| 研究幹事 | 斎藤　弘吉（第一生命） |
| 会誌幹事 | 荒川　三郎（安田生命） |
| 広報幹事 | 藤原　敬男（明治生命） |
| 幹　　事 | 高橋　　静（千代田生命） |
| 幹　　事 | 尼子　隆士（日本生命） |
| 監　　事 | 平位　　勉（住友生命） |

昭和 53 年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 有澤　　誠（大同生命） |
| 副 会 長 | 高橋　　静（千代田生命） |
| 庶務幹事 | 斎藤　武彦（日本団体生命） |
| 会計幹事 | 中山　稔久（安田生命） |
| 研究幹事 | 福田　　譲（日本生命） |
| 会誌幹事 | 吉江幹之助（朝日生命） |

| | |
|---|---|
| 広報幹事 | 藤原　敬男（明治生命） |
| 幹　　事 | 杉田　　啓（第一生命） |
| 幹　　事 | 日置　　博（住友生命） |
| 監　　事 | 原川　信次（三井生命） |

昭和 54 年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 有澤　　誠（大同生命） |
| 副 会 長 | 高橋　　静（千代生命） |
| 庶務幹事 | 日置　　博（住友生命） |
| 会計幹事 | 中山　稔久（安田生命） |
| 研究幹事 | 福田　　譲（日本生命） |
| 会誌幹事 | 吉江幹之助（朝日生命） |
| 広報幹事 | 塚本　　宏（明治生命） |
| 幹　　事 | 杉田　　啓（第一生命） |
| 幹　　事 | 斎藤　武彦（日本団体生命） |
| 監　　事 | 原川　信次（三井生命） |

昭和 55 年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 有澤　　誠（大同生命） |
| 副 会 長 | 小原　　護（明治生命） |
| 庶務幹事 | 日置　　博（住友生命） |
| 会計幹事 | 中山　稔久（安田生命） |
| 研究幹事 | 塚本　　宏（明治生命） |
| 会誌幹事 | 吉江幹之助（朝日生命） |
| 広報幹事 | 尼子　隆士（日本生命） |
| 幹　　事 | 杉田　　啓（第一生命） |
| 幹　　事 | 斎藤　武彦（日本団体生命） |
| 監　　事 | 原川　信次（三井生命） |

昭和 56 年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 平尾　正治（第一生命） |
| 副 会 長 | 小原　　護（明治生命） |
| 庶務幹事 | 日置　　博（住友生命）（支部担当兼任） |
| 会計幹事 | 中山　稔久（安田生命） |
| 研究幹事 | 尼子　隆士（日本生命） |
| 会誌幹事 | 木下　和之（朝日生命） |

| | | |
|---|---|---|
| 広報幹事 | 三井　美澄 | （富国生命） |
| 幹　　事 | 杉田　　啓 | （第一生命）（80年史担当） |
| 幹　　事 | 上田　耕作 | （日産生命） |
| 監　　事 | 原川　信次 | （三井生命） |

昭和57年度

| | | |
|---|---|---|
| 会　　長 | 平尾　正治 | （第一生命） |
| 副 会 長 | 小原　　護 | （明治生命） |
| 庶務幹事 | 日置　　博 | （住友生命）（支部担当兼任） |
| 会計幹事 | 中山　稔久 | （安田生命） |
| 研究幹事 | 三井　美澄 | （富国生命） |
| 会誌幹事 | 木下　和之 | （朝日生命） |
| 広報幹事 | 餘目　　慧 | （日本生命） |
| 幹　　事 | 栃原　廣之 | （第一生命）（共同研究担当） |
| 幹　　事 | 岩城　栄一 | （第百生命） |
| 監　　事 | 原川　信次 | （三井生命） |

昭和58年度

| | | |
|---|---|---|
| 会　　長 | 平尾　正治 | （第一生命） |
| 副 会 長 | 日置　　博 | （住友生命） |
| 庶務幹事 | 餘目　　慧 | （日本生命） |
| 会計幹事 | 三井　美澄 | （富国生命） |
| 研究幹事 | 塚本　　宏 | （明治生命） |
| 会誌幹事 | 栃原　廣之 | （第一生命） |
| 広報幹事 | 岩城　栄一 | （第百生命） |
| 幹　　事 | 中山　稔久 | （安田生命）（支部担当） |
| 幹　　事 | 佐野　松雄 | （朝日生命）（共同研究班担当） |
| 監　　事 | 原川　信次 | （三井生命） |

昭和59年度

| | | |
|---|---|---|
| 会　　長 | 平尾　正治 | （第一生命） |
| 副 会 長 | 日置　　博 | （住友生命） |
| 庶務幹事 | 餘目　　慧 | （日本生命） |
| 会計幹事 | 三井　美澄 | （富国生命） |
| 研究幹事 | 塚本　　宏 | （明治生命） |
| 会誌幹事 | 栃原　廣之 | （第一生命） |

| | | |
|---|---|---|
| 広報幹事 | 岩城　栄一 | （第百生命） |
| 幹　　事 | 中山　稔久 | （安田生命）（支部担当） |
| 幹　　事 | 佐野　松雄 | （朝日生命）（共同研究班担当） |
| 監　　事 | 原川　信次 | （三井生命） |

昭和60年度

| | | |
|---|---|---|
| 会　　長 | 安藤　博章 | （日本生命） |
| 副 会 長 | 塚本　　宏 | （明治生命） |
| 庶務幹事 | 餘目　　慧 | （日本生命） |
| 会計幹事 | 森岡　達治 | （ソニー・プルデンシャル生命） |
| 研究幹事 | 沼田　輝夫 | （日本生命） |
| 会誌幹事 | 佐野　松雄 | （朝日生命） |
| 広報幹事 | 横森　周信 | （富国生命） |
| 幹　　事 | 渡辺　隆夫 | （千代田生命）（支部担当） |
| 幹　　事 | 上野　　武 | （第一生命）（共同研究班担当） |
| 監　　事 | 中山　稔久 | （安田生命） |

昭和61年度

| | | |
|---|---|---|
| 会　　長 | 安藤　博章 | （日本生命） |
| 副 会 長 | 塚本　　宏 | （明治生命） |
| 庶務幹事 | 餘目　　慧 | （日本生命） |
| 会計幹事 | 森岡　達治 | （ソニー・プルデンシャル生命） |
| 研究幹事 | 沼田　輝夫 | （日本生命） |
| 会誌幹事 | 岩田　汎夫 | （朝日生命） |
| 広報幹事 | 横森　周信 | （富国生命） |
| 幹　　事 | 渡邊　隆夫 | （千代田生命）（支部担当） |
| 幹　　事 | 上野　　武 | （第一生命）（共同研究班担当） |
| 監　　事 | 中山　稔久 | （安田生命） |

昭和62年度

| | | |
|---|---|---|
| 会　　長 | 安藤　博章 | （日本生命） |
| 副 会 長 | 塚本　　宏 | （明治生命） |
| 庶務幹事 | 餘目　　慧 | （日本生命） |
| 会計幹事 | 森岡　達治 | （ソニー・プルデンシャル生命） |
| 研究幹事 | 沼田　輝夫 | （日本生命） |
| 会誌幹事 | 岩田　汎夫 | （朝日生命） |

| | |
|---|---|
| 広報幹事 | 横森　周信（富国生命） |
| 幹　　事 | 田村　慶三（第一生命） |
| 幹　　事 | 長谷川和三郎（安田生命） |
| 監　　事 | 渡邊　隆夫（千代田生命） |

昭和63年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 塚本　　宏（明治生命） |
| 副 会 長 | 沼田　輝夫（日本生命） |
| 庶務幹事 | 岩田　汎夫（朝日生命） |
| 会計幹事 | 西殿　之彦（三井生命） |
| 研究幹事 | 豊川　秀治（明治生命） |
| 教育幹事 | 小西　克彦（日本生命） |
| 会誌幹事 | 中尾　博司（日本生命） |
| 広報幹事 | 依田　　調（住友生命） |
| 幹　　事 | 長谷川和三郎（安田生命）（支部担当） |
| 幹　　事 | 田村　慶三（第一生命）（共同研究班担当） |
| 幹　　事 | 五十嵐千代子（東京生命）（無任所） |
| 幹　　事 | 沼田　輝夫（日本生命）（国際渉外） |
| 監　　事 | 渡邊　隆夫（千代田生命） |

昭和64年度・平成元年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 塚本　　宏（明治生命） |
| 副 会 長 | 沼田　輝夫（日本生命） |
| 庶務幹事 | 岩田　汎夫（朝日生命） |
| 会計幹事 | 西殿　之彦（三井生命） |
| 研究幹事 | 豊川　秀治（明治生命） |
| 教育幹事 | 小西　克彦（日本生命） |
| 会誌幹事 | 北島　武志（第一生命） |
| 広報幹事 | 田中　穂積（住友生命） |
| 幹　　事 | 長谷川和三郎（安田生命）（支部担当） |
| 幹　　事 | 小林三世治（第一生命）（共同研究班担当） |
| 幹　　事 | 五十嵐千代子（東京生命）（無任所） |
| 幹　　事 | 正寿　康雄（住友生命）（国際渉外） |
| 監　　事 | 渡邊　隆夫（千代田生命） |

平成２年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 岡本　　浩（三井生命） |
| 副 会 長 | 小西　克彦（日本生命） |
| 庶務幹事 | 山田　　充（三井生命） |
| 会計幹事 | 薙野　久法（明治生命） |
| 研究幹事 | 伊藤　博澄（日本生命） |
| 教育幹事 | 磯浪　　亘（日本生命） |
| 会誌幹事 | 北島　武志（第一生命） |
| 広報幹事 | 田中　穂積（住友生命） |
| 幹　　事 | 小林三世治（第一生命）（共同研究班担当） |
| 幹　　事 | 長谷川和三郎（安田生命）（支部担当） |
| 幹　　事 | 五十嵐千代子（東京生命）（無任所） |
| 幹　　事 | 正寿　康雄（住友生命）（国際渉外） |
| 監　　事 | 横森　周信（富国生命） |

平成３年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 岡本　　浩（三井生命） |
| 副 会 長 | 小西　克彦（日本生命） |
| 庶務幹事 | 種田　裕昭（日本生命） |
| 会計幹事 | 薙野　久法（明治生命） |
| 研究幹事 | 北島　武志（第一生命） |
| 教育幹事 | 磯浪　　亘（日本生命） |
| 会誌幹事 | 梅津　哲二（大同生命） |
| 広報幹事 | 田中　穂積（住友生命） |
| 認定医幹事 | 中川　俊郎（千代田生命） |
| 共同研究班担当幹事 | 小林三世治（第一生命） |
| 支部担当幹事 | 田中　治男（安田生命） |
| 無任所幹事 | 五十嵐千代子（東京生命） |
| 国際渉外幹事 | 今井　知躬（住友生命） |
| 監　　事 | 横森　周信（富国生命） |

平成４年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 岡本　　浩（三井生命） |
| 副 会 長 | 小西　克彦（日本生命） |
| 監　　事 | 横森　周信（富国生命） |
| 庶務幹事 | 種田　裕昭（日本生命） |

| | |
|---|---|
| 会計幹事 | 薙野　久法（明治生命） |
| 研究幹事 | 北島　武志（第一生命） |
| 教育幹事 | 織田　正孝（日本生命） |
| 会誌幹事 | 梅津　哲二（大同生命） |
| 広報幹事 | 田中　穂積（住友生命） |
| 認定医幹事 | 森田　明夫（朝日生命） |
| 共同研究班幹事 | 小林三世治（第一生命） |
| 支部担当幹事 | 田中　治男（安田生命） |
| 無任所幹事 | 五十嵐千代子（東京生命） |
| 国際渉外幹事 | 今井　知躬（住友生命） |

平成5年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 横森　周信（富国生命） |
| 副 会 長 | 小西　克彦（日本生命） |
| 監　　事 | 五十嵐千代子（東京生命） |
| 庶務幹事 | 坂下　哲朗（日本生命） |
| 会計幹事 | 薙野　久法（明治生命） |
| 研究幹事 | 前田　　優（第一生命） |
| 教育幹事 | 織田　正孝（日本生命） |
| 会誌幹事 | 梅津　哲二（大同生命） |
| 広報幹事 | 山岡　誠二（住友生命） |
| 認定医幹事 | 安藤　矩子（郵政省簡易保険局） |
| 共同研究班幹事 | 本間　春城（第一生命） |
| 支部幹事 | 田中　治男（安田生命） |
| 国際渉外幹事 | 今井　知躬（住友生命） |

平成6年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 北島　武志（第一生命） |
| 副 会 長 | 五十嵐千代子（東京生命） |
| 監　　事 | 小西　克彦（日本生命） |
| 庶務幹事 | 井上　公俊（第一生命） |
| 会計幹事 | 薙野　久法（明治生命） |
| 研究幹事 | 濱口　知昭（日本生命） |
| 教育幹事 | 坂下　哲朗（日本生命） |
| 会誌幹事 | 林田　　清（大同生命） |
| 広報幹事 | 山岡　誠二（住友生命） |

| | | |
|---|---|---|
| 認定医幹事 | 安藤　矩子 | （郵政省簡易保険局） |
| 共同研究班幹事 | 中西　幸子 | （朝日生命） |
| 支部幹事 | 田中　治男 | （安田生命） |
| 国際渉外幹事 | 糸川　英樹 | （住友生命） |

平成７年度

| | | |
|---|---|---|
| 会　　長 | 濱口　知昭 | （日本生命） |
| 副 会 長 | 薙野　久法 | （明治生命） |
| 監　　事 | 小西　克彦 | （日本生命） |
| 庶務幹事 | 坂下　哲朗 | （日本生命） |
| 会計幹事 | 緒方　行男 | （第一生命） |
| 研究幹事 | 桜井　　裕 | （第一生命） |
| 教育幹事 | 宮嵜　和則 | （三井生命） |
| 会誌幹事 | 林田　　清 | （大同生命） |
| 広報幹事 | 山岡　誠二 | （住友生命） |
| 認定医幹事 | 安藤　矩子 | （郵政省簡易保険局） |
| 共同研究班幹事 | 中西　幸子 | （朝日生命） |
| 支部幹事 | 田中　治男 | （安田生命） |
| 国際渉外幹事 | 村尾　明之 | （住友生命） |

平成８年度

| | | |
|---|---|---|
| 会　　長 | 濱口　知昭 | （日本生命） |
| 副 会 長 | 薙野　久法 | （明治生命） |
| 監　　事 | 小西　克彦 | （日本生命） |
| 庶務幹事 | 坂下　哲朗 | （日本生命） |
| 会計幹事 | 緒方　行男 | （第一生命） |
| 研究幹事 | 井上　公俊 | （第一生命） |
| 教育幹事 | 宮嵜　和則 | （三井生命） |
| 会誌幹事 | 林田　　清 | （大同生命） |
| 広報幹事 | 清水　功基 | （住友生命） |
| 認定医幹事 | 安藤　矩子 | （郵政省簡易保険局） |
| 共同研究班幹事 | 中西　幸子 | （朝日生命） |
| 支部幹事 | 大峰　雅樹 | （安田生命） |
| 国際渉外幹事 | 村尾　明之 | （住友生命） |

平成 9 年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 濱口　知昭（日本生命） |
| 副 会 長 | 薙野　久法（明治生命） |
| 監　　事 | 大峰　雅樹（安田生命） |
| 庶務幹事 | 坂下　哲朗（日本生命） |
| 会計幹事 | 姫野　陽一（第一生命） |
| 研究幹事 | 井上　公俊（第一生命） |
| 教育幹事 | 殿谷　　栄（明治生命） |
| 会誌幹事 | 林田　　清（大同生命） |
| 広報幹事 | 鈴木　孝典（住友生命） |
| 認定医幹事 | 安藤　矩子（郵政省簡易保険局） |
| 共同研究班幹事 | 今泉　恵次（日本生命） |
| 支部幹事 | 嘉藤田　進（安田生命） |
| 国際渉外幹事 | 小松　裕司（住友生命） |

平成 10 年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 薙野　久法（明治生命） |
| 副 会 長 | 梅津　哲二（大同生命） |
| 監　　事 | 大峰　雅樹（安田生命） |
| 庶務幹事 | 殿谷　　栄（明治生命） |
| 会計幹事 | 姫野　陽一（第一生命） |
| 研究幹事 | 泉尾　　護（第一生命） |
| 教育幹事 | 上坂　邦夫（日本生命） |
| 会誌幹事 | 林田　　清（ソニー生命） |
| 広報幹事 | 鈴木　孝典（住友生命） |
| 認定医幹事 | 安藤　矩子（郵政省簡易保険局） |
| 共同研究班幹事 | 今泉　恵次（日本生命） |
| 支部幹事 | 嘉藤田　進（安田生命） |
| 国際渉外幹事 | 小松　裕司（住友生命） |

平成 11 年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 薙野　久法（明治生命） |
| 副 会 長 | 梅津　哲二（大同生命） |
| 監　　事 | 大峰　雅樹（安田生命） |
| 庶務幹事 | 殿谷　　栄（明治生命） |
| 会計幹事 | 小松　裕司（住友生命） |
| 研究幹事 | 姫野　陽一（第一生命） |

| | |
|---|---|
| 教育幹事 | 上坂　邦夫（日本生命） |
| 会誌幹事 | 森田　明夫（朝日生命） |
| 広報幹事 | 鈴木　孝典（住友生命） |
| 認定医幹事 | 安藤　矩子（郵政省簡易保険局） |
| 共同研究班幹事 | 今泉　恵次（日本生命） |
| 支部幹事 | 嘉藤田　進（安田生命） |
| 国際渉外幹事 | 井上　公俊（第一生命） |

平成 12 年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 薙野　久法（明治生命） |
| 副 会 長 | 梅津　哲二（大同生命） |
| 監　　事 | 大峰　雅樹（安田生命） |
| 庶務幹事 | 田中　信正（明治生命） |
| 会計幹事 | 小松　裕司（住友生命） |
| 研究幹事 | 青田　浩司（第一生命） |
| 教育幹事 | 上坂　邦夫（日本生命） |
| 会誌幹事 | 森田　明夫（朝日生命） |
| 広報幹事 | 鈴木　孝典（住友生命） |
| 認定医幹事 | 高山　　学（三井生命） |
| 共同研究班幹事 | 今泉　恵次（日本生命） |
| 支部幹事 | 柴田　　徹（安田生命） |
| 国際渉外幹事 | 井上　公俊（第一生命） |

平成 13 年度

| | |
|---|---|
| 会　　長 | 小林三世治（第一生命） |
| 副 会 長 | 五島良太郎（住友生命） |
| 監　　事 | 大峰　雅樹（安田生命） |
| 庶務幹事 | 田中　信正（明治生命） |
| 会計幹事 | 大橋　茂充（朝日生命） |
| 研究幹事 | 青田　浩司（第一生命） |
| （共同研究幹事兼任） | |
| 教育幹事 | 西川　征洋（日本生命） |
| 会誌幹事 | 岩佐　　寧（日本生命） |
| 広報幹事 | 小松　裕司（住友生命） |
| 認定医幹事 | 高山　　学（三井生命） |
| 国際渉外幹事 | 牧野　弘志（スイス再保） |
| 支部幹事 | 柴田　　徹（安田生命） |

# Ⅲ　日本保険医学会会員数の変遷

| 年号 | 会員 | | 名誉会員 | 賛助会員 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|
| 明治34年 | 21 | | — | | 21 |
| 35年 | 130 | | — | | 130 |
| 36年 | 188 | | — | | 188 |
| 37年 | 254 | | — | | 254 |
| 38年 | 235 | | — | | 235 |
| 39年 | 307 | | — | | 307 |
| 40年 | 303 | | — | | 303 |
| 41年 | 284 | | — | | 284 |
| 42年 | 308 | | — | | 308 |
| 43年 | 1,512 | | 50 | | 1,562 |
| | 普通会員 | | | | |
| 44年 | 1,433 | | 49 | | 1,482 |
| 大正元年 | 1,432 | | 49 | | 1,481 |
| 2年 | 1,507 | | 47 | | 1,554 |
| 3年 | 1,507 | | 47 | | 1,554 |
| 4年 | 1,566 | | 47 | | 1,613 |
| 5年 | 1,600 | | 60 | | 1,660 |
| 6年 | 1,232 | | 66 | | 1,298 |
| 7年 | 1,230 | | 66 | | 1,296 |
| 8年 | 1,300 | | 14 | | 1,314 |
| 9年 | 1,300 | | 16 | | 1,316 |
| 10年 | 683 | | 16 | | 699 |
| 11年 | 731 | | 16 | | 747 |
| 12年 | 1,477 | | 47 | | 1,524 |
| 13年 | 798 | | 15 | | 813 |
| 14年 | 1,270 | | 49 | | 1,319 |
| 昭和元年 | 1,435 | | 51 | | 1,486 |
| 2年 | 1,435 | | 51 | | 1,486 |
| 3年 | 1,450 | | 51 | | 1,501 |
| 4年 | 1,436 | | — | | 1,436 |
| 5年 | 1,500 | | 16 | | 1,516 |
| 6年 | 1,300 | | 16 | | 1,316 |
| 7年 | 1,300 | | 15 | | 1,315 |
| 8年 | 1,300 | | 15 | | 1,315 |
| 9年 | 1,300 | | 16 | | 1,316 |
| 10年 | 729 | | — | | 729 |
| 11年 | 730 | | 16 | | 746 |

| 年号 | 会員 | | 名誉会員 | 賛助会員 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|
| 12年 | 796 | | 16 | | 812 |
| 13年 | 798 | | 15 | | 813 |
| 14年 | 854 | | 17 | | 871 |
| 15年 | 860 | | 19 | | 879 |
| 16年 | 1,050 | | 22 | | 1,072 |
| 17年 | 879 | | 28 | | 907 |
| 18年 | 926 | | 17 | | 943 |
| 19年 | — | | — | | 0 |
| 20年 | — | | — | | 0 |
| 21年 | 592 | | — | | 592 |
| 22年 | — | | — | | 0 |
| 23年 | — | | — | | 0 |
| 24年 | — | | — | | 0 |
| 25年 | — | | — | | 0 |
| 26年 | — | | 21 | | 21 |
| 27年 | 535 | | 21 | | 556 |
| 28年 | 585 | | 22 | | 607 |
| 29年 | 630 | | 26 | | 656 |
| 30年 | 677 | | 24 | | 701 |
| 31年 | 702 | | 24 | | 726 |
| 32年 | 751 | | 23 | | 774 |
| 33年 | 820 | | 22 | | 842 |
| 34年 | 882 | | 23 | | 905 |
| 35年 | 1,010 | | 23 | | 1,033 |
| 36年 | 966 | | 19 | | 985 |
| 37年 | 1,004 | | 20 | | 1,024 |
| 38年 | 995 | | 19 | | 1,014 |
| 39年 | 947 | | 19 | | 966 |
| 40年 | 896 | | 21 | | 917 |
| 41年 | 851 | | 26 | 1 | 878 |
| 42年 | 859 | | 26 | 18 | 903 |
| 43年 | 859 | | 26 | 17 | 902 |
| 44年 | 853 | | 27 | 27 | 907 |
| 45年 | 867 | | 27 | 14 | 908 |
| 46年 | 856 | | 27 | 15 | 898 |
| 47年 | 834 | | 27 | 15 | 876 |

| 年号 | A会員 | B会員 | 名誉会員 | 賛助会員 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|
| 48年 | 822 | 32 | 28 | 33 | 915 |
| 49年 | 839 | 29 | 29 | 31 | 928 |
| 50年 | 813 | 24 | 29 | 33 | 899 |
| 51年 | 832 | 27 | 26 | 35 | 920 |
| 52年 | 889 | 75 | 27 | 16 | 1,007 |
| 53年 | 791 | 80 | 25 | 28 | 924 |
| 54年 | 784 | 66 | 24 | 28 | 902 |
| 55年 | 770 | 69 | 24 | 30 | 893 |
| 56年 | 756 | 69 | 23 | 34 | 882 |
| 57年 | 780 | 71 | 20 | 40 | 911 |
| 58年 | 785 | 70 | 20 | 39 | 914 |
| 59年 | 799 | 75 | 20 | 33 | 927 |
| 60年 | 799 | 78 | 20 | 33 | 930 |
| 61年 | 825 | 80 | 21 | 37 | 963 |
| 62年 | 840 | 79 | 21 | 40 | 980 |
| 63年 | 838 | 85 | 21 | 38 | 982 |

| 年号 | 正会員 | 研究会員 | 名誉会員 | 賛助会員 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|
| 平成元年 | 865 | 77 | 19 | 35 | 996 |
| 2年 | 887 | 79 | 19 | 35 | 1,020 |
| 3年 | 914 | 84 | 19 | 35 | 1,052 |
| 4年 | 941 | 86 | 18 | 38 | 1,083 |
| 5年 | 951 | 89 | 18 | 42 | 1,100 |
| 6年 | 933 | 92 | 17 | 40 | 1,082 |
| 7年 | 911 | 93 | 16 | 37 | 1,057 |
| 8年 | 878 | 99 | 15 | 40 | 1,032 |
| 9年 | 863 | 95 | 15 | 34 | 1,007 |
| 10年 | 832 | 88 | 14 | 30 | 964 |
| 11年 | 781 | 94 | 14 | 23 | 912 |
| 12年 | 715 | 91 | 12 | 29 | 847 |
| 13年 | 678 | 90 | 12 | 24 | 804 |

# Ⅳ　日本保険医学会の現在の活動

日本保険医学会は生命保険医学に関する研究を行い，その進歩発展を図ることを目的として，研究会，講演会等の開催，日本保険医学会誌の発行，その他必要な事業を組織的に行っています。本会には議決機関である評議員会があり，会長，副会長，監事は評議員会により選出され総会において決定されます。会長により指名される幹事を役員として幹事会が組織されます。実際の業務は各幹事のもとで構成された委員会が実行しています。以下に各委員会の現在の活動を報告いたします。

研究委員会は保険医学会総会・学術集会の企画運営，研究講演会や保険医学基礎講座の企画運営を行っています。研究講演会は，最新の医学知識を吸収する場として講師には医学の各分野の研究者をお願いしています。一方，保険医学基礎講座は若手会員を対象に，死亡率統計や予後調査といった危険選択に係わる基礎的な知識の吸収を目的として開催されます。共同研究班は他団体との共同研究の企画立案を行っています。現在までの共同研究は国鉄・JR病院との心電図５年間の変動（～昭和55年），肝疾患，HB抗原抗体の疫学（昭和61年）をはじめとして，東京女子医科大学糖尿病センターとの糖尿病患者の長期予後調査（昭和55～62年），東京女子医科大学附属心臓血圧研究所との循環器疾患の予後調査（平成３～12年）が行われました。現在は，次回のテーマを検討しているところです。

会誌委員会は，日本保険医学会誌，英文抄録の発行を年一回行っています。今年度は保険医学会100周年記念事業の一環として100年史も保険医学会誌とともに発行の予定です。

広報委員会は，日本保険医学会ニュースを発行しています。会員間の情報伝達，交換の場として，現在，定期に年４回刊行され，その内容は会員からの他学会への参加報告やアメリカ保険医学会（AAIM）の参加報告といった企画，当学会よりの連絡などが中心となっています。また100周年記念事業の一環として今年度からインターネット上に保険医学会のホームページが開設され，本会の活動内容を広く一般に開示，宣伝することを目的として企画，運営されています。URL：wwwsoc.nii.ac.jp/alimj/

教育委員会は，危険選択研究会を企画運営をしています。危険選択に係わる最新の医学的知識の吸収を目的として学会の内外より講師を招いて東京地区で年５回行われています。また入会後３年以内の会員を対象として，ワークショップを開催していま

す。危険選択実務を中心とした保険医学の基礎的な知識修得を目的とした毎年総会の時期に合わせて行われます。今年度は100周年記念事業の一環として，平成４年に当学会より生命保険医学の教科書として出版された「生命保険医学」の改訂作業を行っています。

認定医制度委員会は，平成元年からの認定医制度準備プロジェクトチームを経て平成３年に設置されました。認定医制度は保険医学に精通し，医学全体の進歩にも即応した医師の養成を目的に実施されています。委員会では，認定医の認定，更新，認定医試験の運営を行い，かつ本制度の改善のための検討を行っています。

国際渉外委員会は，国際的な保険医学会情報，各種海外団体の活動情報等の収集，発信を主な目的として活動をしています。主なものとしてアメリカ保険医学会，国際保険医学会議，アジア保険医学会（AIMA），国際アンダーライティング会議等の世界会議があります。

支部委員会は，地方の支部活動の支援を行っています。現在，地方会として北海道，東北，東海，関西，中国・四国，九州の全国６支部が活動をしています。地域会員の研究親睦等を行う目的で支部総会，研究会等の活動を独自に行っています。

庶務委員会は，総会，幹事会等の会議においての進行，および各委員会毎の活動の調整を行っています。現在は定時総会の秋季開催にむけての調整が進んでいます。

会計委員会は，学会収入の予測，出金状況の点検確認を定期的に行い，評議員会報告をしています。

その他の活動としては，100周年記念事業の一環として，翻訳編集委員によりMedical Selection of Life Risks第４版の翻訳編集作業が現在行われています。

また過去には生命保険協会との共同活動として，死亡率調査委員会（昭和60～62年），疾病障害関係専門委員会（昭和60年），疾病保険研究会（昭和55年），約款検討専門委員会（昭和55年）が設置されそれぞれ総会にて報告を行っています。

# 第二編　日本保険医学会創立100周年記念式典

# 第二編　日本保険医学会創立100周年記念式典

日時及び会場
平成13年５月15日

記念式典　午後１：00～１：50　朝日ホール（東京・有楽町）

# 日本保険医学会創立100周年記念式典を挙行

日本保険医学会会誌幹事　岩　佐　　寧

本学会は2001年１月29日をもって1901年１月29日中浜東一郎氏を初代会長として発足した日本保険医協会いらい満100年を向かえた。この創立100周年を記念する式典が，５月15日12時50分より東京都千代田区の有楽町朝日ホールにて，第98回定時総会に先立って行われた。

記念式典は薙野会長の開会の辞および会長挨拶により開始され，日本医学会会長　森　亘氏，日本保険学会理事長　森宮　康氏，生命保険協会長　宇野　郁夫氏（専務理事　上田　公一氏代読），日本アクチュアリー会理事長　林　勲氏より祝辞を頂き梅津副会長の閉会の辞で締めくくった。

薙野会長は，この100周年の節目を，多くの先輩方への畏敬と保険医学の原点を振り返り，保険医学のこれからの進むべき方向性を考える機会として取り組んできたこと，保険医学テキストの全面改訂，Medical Selection of Life Risksの翻訳版発刊，ホームページの開設などの100周年記念事業を紹介し，今後は会員一人一人の英知と情熱を結集して真摯に学会活動に取り組み，生命保険事業の発展と社会福祉の向上に貢献したいとの抱負を述べた。

日本医学会の森会長は，保険医学会が小さいながらも，古くからの分科会として，疫学的手法を用いて予後研究，特に成人病の予後研究をしてきた特色ある活動の歴史を持つことに敬意を表された。また，現在の日本は高齢化社会の到来と疫病構造の変化，国民の医療に対するニーズの変化などの社会的変化，遺伝子医学，移植医療などに代表される医学医療の発展などが相まって素晴らしいこともある反面，倫理面も含めて大きな問題が投げかけられているなど社会と医学・医療とのあいだには課題が山積みされており，保険医学会が保険医学的見地からこれらの課題の解決に取り組むことを期待された。

日本保険学会の森宮会長は，保険医学会が，保険学会，日本アクチュアリー会に続いて100周年を迎えたことに保険関連の組織として共に喜び，経済，金融環境の激変するなかでの社会的意義を意識せざるを得ないと述べられた。また，保険研究の領域は広く，経済，経営，法学的なアプローチのみでなく，ライフリスクに関する保険医学，保険経営の面からのアクチャリアルサイエンスとの共同研究が必要と強調された。昨年秋の「遺伝子診断と保険事業」と題する保険学会シンポジウムはその出発点であり，ライフリスクの一見医学的な問題でも，例えば，PSTD（心的外傷後ストレス障害），高齢化社会と介護，「死の選択」とリビングベネフィットなどには保険経営的アプローチ（保険設計，既契約者へのサービス）も必要であり，保険に関する社会

環境の変化のなかで保険関連三学会での共同作業を進めたいと述べられた。

生保協会の宇野会長（専務理事　上田公一氏代読）は，保険医学会が一世紀にわたり「生命の長期予後」「医学的危険選択」の研究を続けてきたことを讃えられた。また，日本の生命保険事業が概ね日本経済と軌を一にして成長しており，現在の長引く不景気の下，新旧会社の入れ替わりがあり，事業環境は大きく変化していることに触れ，少子高齢化の進行とともに，顧客のニーズが年金，医療，介護などの生前保障へ向かい，生命保険の機能として，社会保障の補完を超え，国家保障とともに国民の生活保障を支えるものであることが求められていると指摘された。保険会社はこのニーズに応えるべく，「生命保険の本質」を認識し努力するが，その根幹はアンダーライティングであり，保険医学会においては「保障提供機能のあり方」や「公正かつ健全な危険選択のあり方」の研究を通じて，会社経営支援，生保事業発展に寄与すること，さらには世帯加入率が9割にもおよぶ契約者の生命予後分析を通じて国民全体の健康向上への貢献が期待されると述べられた。

日本アクチュアリー会の林理事長は，1899年商法典の成立，日本アクチュアリー会の創立，1900年の保険業法成立，1901年の保険医学会創立に触れ，近代的保険制度は，20世紀を迎えた時期に法律的枠組みの整備と保険医学，保険数理という技術担当専門職団の創立を得て一世紀を超えて発展してきたと述べられた。また，生保協会の死亡率調査委員会を通じて，本会会員とアクチュアリー会との共同研究が，死亡率，災害・疾病率，昨今のニューリスク研究へと広がってきたことに触れ，ライフスタイルを医務査定に反映する問題，保険の根幹を揺るがす世界的問題である遺伝子検査の保険選択への導入などの今日的課題についての両会共同研究が求められていると述べられた。

最後に梅津副会長より来賓への謝辞が述べられ閉会が宣言された。

# 会長挨拶

日本保険医学会会長　薙　野　久　法

日本保険医学会創立百周年記念式典を開催するにあたりまして，一言ご挨拶を申しあげます。

本日はご多忙のところ，日本医学会会長　森　亘様，日本保険学会理事長　森宮　康様，生命保険協会専務理事　上田公一様，日本アクチュアリー会理事長　林　勲様ならびにご来賓，名誉会員のご臨席をいただき，真にささやかではございますが，記念式典を挙行できますことは，私ども会員としてまことに光栄であり，会員一同を代表して心からお礼申しあげる次第です。

日本保険医学会は，お手元の資料のごとく，1901年，明治34年，1月29日の日本保険医協会の発足をもって創立とみなされております。したがって，今年，100周年を迎えることになりました。

ところで，最近の保険医学会が置かれた状況は百周年を迎えるには都合のいい時代ではありません。生命保険事業をめぐる環境が，非常に厳しい状況にあることがその大きな理由です。そこで，百周年記念事業のお世話を担当した，私ども保険医学会執行部は，迎えた創立100周年の節目を，多くの先輩方のご活躍に思いを馳せるとともに，保険医学の原点を振り返り，これからの保険医学が進んでいく方向を考える機会と捉えるべく準備をすすめてまいりました。言い方を変えますれば，記念事業はできるだけ費用をかけずに，会員の実務に役に立つことをやろうということで取組んできました。

本日の記念式典以外の具体的な記念事業については，会員の皆さまにはすでにご案内のことですから，項目を述べるに止めますが，保険医学テキストの改訂，南江堂書店より保険医学のグローバルスタンダードとも言われているブラッケンリッジ氏の名著Medical Selection of Life Risksの翻訳出版，それに，ホームページの開設等を行いました。

さて，日本ではじめて科学的生命保険会社が創業したのは，これもお手元の資料をご参照いただきたいのですが，1881年，明治14年のことで，18世紀に生命保険会社が設立されたイギリスは別格としても，他の分野に同じく，西欧に大きく遅れてのこと

でした。今から120年前のことになります。それから僅か13年後，1894年，森宮先生の日本保険学会，18年後の1899年に，林理事長の日本アクチュアリー会，そして20年後，1901年に，私どもの日本保険医学会が創立されております。

生命保険事業そのものの草創期であるこのような早い時期に，東洋の果ての日本に，生命保険事業に深い関わりを持つ学術団体，専門職団体が誕生したことに関係者の大きな意気込みを感じるものです。

その後の，「日本保険医学会の歩み」を見てみますと，1918年，大正７年４月には日本医学会への加入が認められ，1936年，昭和11年に現在の日本保険医学会と改名し，1947年，昭和22年には日本医学会の第33分科会となり，現在にいたっております。また最近では，「日本学術会議」第７部会に登録され活動いたしております。

このように，当学会が１世紀にわたり活動を続けて来れましたのは，偏に諸先輩方の真摯な取組みの賜物であるとともに，本日ご臨席いただきました，日本医学会，日本保険学会，生命保険協会，日本アクチュアリー会ならびに各生命保険会社や関係諸官庁諸団体各位のご支援のお陰でありまして，この機会に，日頃のご厚情に対して，心よりお礼を申しあげるものです。

保険医学会は，いよいよ，第２世紀に向かって新たな進発をいたしました。その行く手は容易ではなく，数々の試練が待ち構えていることとは存じますが，これを乗り切って進むには，会員一人ひとり英知と情熱を結集する以外にないと存じます。そして，これからも真摯な学会活動を通じて生命保険事業の発展と，社会福祉の向上に一層の貢献をしたいと念願しております。

最後になりましたが，今後も，私どもの立場をご理解いただきまして，ご指導ご鞭撻を賜りますよう，この場をお借りしてお願い申しあげます。

以上をもちまして，私のご挨拶といたします。本日は本当にありがとうございました。

# 日本保険医学会の歩み

2001年5月15日現在

1867年　福沢諭吉「西洋旅案内」で生命保険を紹介

1880年　共済五百名社開業

1881年　科学的基礎に基づく生命保険会社創業

1889年　アメリカ生命保険医長協会創設

1890年　第1回日本医学会（日本医学会総会の前身といわれている）

1894年　**保険学会**創立

1895年　第1回国際アクチュアリー会議（ブリュッセル）

1897年　保険医協会設立（保険医有志の集まり）

1898年　生命保険会社談話会（後に**生命保険協会**）

1899年　**日本アクチュアリー会**創立，万国保険医協会会議（ブリュッセル）

**1901年1月29日**

日本保険医協会設立，保険医学の研究機関を目指して発足。**この時をもって日本保険医学会創立**とされる。会長　中浜東一郎（1916年，東京市医師会初代会長就任）　副会長　矢野恒太（1899年，日本アクチュアリー会を創設初代会長，1902年第一生命を創立）

1902年　第1回日本聯合医学会（**日本医学会総会**の始まりとされる），保険業法公布

1908年　日本保険医学協会と改名

1911年　日本三会社死亡生残表（明治，帝国，日本）

1916年　簡易生命保険事業開始

1918年　日本医学会への加入

1935年　第1回国際生命保険医学会議（ICLAM）開催（ロンドン）

1936年　日本保険医学会と改名

1947年　日本医学会　第33分科会と規定される

1952年　創立50周年記念式典

1956年　死亡率調査委員会（MA委員会）創設（日本における会社間共同欠陥研究）

1971年　生命保険面接士制度創設

1973年　創立70周年記念総会，会則改正により学会の開放を企図

1976年　共同研究班創設（東京女子医大等との共同研究始まる）

1977年　卒後研修（PGE）実施

1986年　第15回国際生命保険医学会議（ICLAM）開催（東京）

1991年　創立90周年記念式典，日本保険医学会認定医制度発足

2001年　百周年記念式典，第98回定時総会

# 来賓祝辞

日本医学会会長　森　　亘

ただいまご紹介いただきました森でございます。本日，このような晴れがましい記念式典にお招き下さり，ごあいさつ申し上げる機会をお与えいただいたことに，まずお礼を申し上げたいと存じます。

先ほどから伺っておりますとおり，本日のこの式典は日本保険医学会創立100周年とのことで，ここに日本医学会を代表して，心からお祝いの言葉を述べたいと存じます。まことにおめでとうございます。

先ほど会長のごあいさつの中にもありましたように，この学会は明治34年，西暦1901年に創立を見た，比較的長い歴史をもつ学会でございます。そして今日，このような繁栄を築き，活発な活動を行っていらっしゃる。恐らくその100年の間には，皆様方，あるいは皆様方の先輩の方々の大きなご努力，ご精進があったことと存じます。そのような今日までのご実績と申しますか，ご努力に対し，心から敬意を表する次第でございます。

私どもの日本医学会は，日本の医学・医療に関係した主な学会によって構成されておりますが，実はその創立は明治35年で，こちらの学会に比べて１年遅いことになっております。現在は95の分科会の集合体で，日本保険医学会は，これも先ほどごあいさつの中にありましたように，大正７年（1918年）に加盟されたという記録が残っております。何も，順位を云々するつもりはございませんが，15番目の加盟学会で，たいへん古くからのご参加を得ているところであり，日本医学会として最も長いおつきあいをいただいている学会の１つでございます。

これら95の分科会を拝見いたしますと，それぞれにいろいろな特色がございます。例えば会員の数にしても，小さなところは数百名程度の学会もあり，また大きなところでは４万名に近い会員を擁しておられる学会もございます。その中で，この日本保険医学会は，私が理解しております限りでは，会員数が1000名前後ということで，また再び順位をもち出しますと，おそらく小さい方から10位以内には入っている。多分，７～８番目に小さい学会であろうと存じます。

このように規模と申しますか，会員数としては，私どもの仲間内では小型の学会であられますが，私から拝見いたしますと，この日本保険医学会は真珠のように，きらっと光るものをお持ちの学会であるという，そのような印象を抱いております。それにはそれなりの，１つの理由がございまして，それは，拝見するところ日本保険医学会におかれましては創立以来，長年にわたって，疾病，生命の長期予後ということを主たる研究テーマとしてこられました。そして，人間の寿命とか，疾病に関する長

期予報，あるいは長期予後を対象に，手法としては統計とか，あるいは確率論など数学的な手段をお使いになって，大いに先駆的な仕事をしてこられた学会でいらっしゃいます。

今日，私どもの周囲では，統計的な手法を使うとか，あるいは確率論を応用するということは，医学の研究にとって当たり前のことでございますし，時には必要欠くべからざる事柄と印象づけられております。しかし顧みますと，100年以上も前から既にこのような観点，視点をお持ちになり，このような研究手段を縦横に駆使してこられた。それは学会としての敬服に値する姿勢であると感じられ，私ども日本医学会から拝見いたしますと，このような意味で大きな特徴をもっておられるのです。そして，こうした学風と申しますか，研究上の特色，ならびにその結果として得られた成果に対して，私ども一同，敬意を表する次第でございます。

具体的なテーマについて今日までのお仕事ぶりを拝見いたしますと，当初から，いわゆる国民病として重要視されておりました結核に関連していろいろな仕事をなさったことは，ある意味では当然でございました。その後は高血圧を初め糖尿病その他，今日で申す生活習慣病に主たる焦点を当て，それらにつき主として疫学的の調査・研究をしてこられた。そこで極めて大きな業績を挙げてこられたものと理解いたしております。

今日，日本のみならず世界で，医学・医療と社会の間には，いろいろな問題が醸し出されております。特に日本の場合には，人口の急速な高齢化が起こり，疾病構造がそれに伴って変りつつある。それから，国民側からの医療に対するニーズの多様化なども含め，いろいろな社会的変化がございました。このような変動はさらに，現在も進みつつあります。他方，医学・医療そのものの内容でも，遺伝子検査とか，臓器移植などの例を挙げるまでもなく，極めて急速かつ大きな進歩がございます。このような社会における一般情勢の変貌と医学・医療が内に抱えているいろいろな変化が両々相まって，そこには素晴らしいことも当然あるわけではございますが，他方，倫理面も含めて大きな問題が投げかけられていることも事実でございます。

このような時に当り，日本保険医学会におかれましては，どうか今後とも，保険医学的な見地から，山積する課題についての解決を一歩，二歩，着実にお進めいただくことを私どもは心から期待申し上げているところでございます。これからも我が国の医学と医療の発展，あるいは向上に皆様方のたゆまぬご研さん，ご努力を傾注され，積み重ねていかれることを心からお願い申し上げるとともに，会員の皆様方のご健勝と日本保険医学会そのもののますますのご発展を祈念いたしまして，日本医学会からのお祝いの言葉とさせていただきます。どうも失礼いたしました。

日本保険学会理事長　森　宮　　康

日本保険医学会，創立100周年，おめでとうございます。ただいまご紹介にあずかりました森宮です。日本保険学会を代表いたしまして，心からお祝い申し上げます。一世紀という長い歴史に培われた日本保険医学会の伝統の重みを感じております。

日本保険医学会の歩みの中で会長の薙野先生が私どもの学会の創設時に触れてくださいましたが，ご承知の通り，日本保険学会は，粟津・志田・玉木３先生により1894年，保険学会として誕生し，1940（昭和15）年に日本保険学会となりましたが，創設時から100有余年を数えております。日本アクチュアリー会も一昨年（1999年），100周年のお祝いをなされました。保険関連の組織として共に一世紀の歴史を担っており，経済社会・金融環境等の激変のなかで社会的な意義を強く意識せずにはいられません。

とりわけ，保険はリスクに対する様々な研究領域と関係を有しております。要のひとつとなりますのはライフリスクに関係する保険医学といえます。しかも保険経営の面からは，人の生命の動態を統計的に数量化する作業が不可欠であり，アクチュアリアル・サイエンスとの接点が不可欠になります。そうしたなか，近年の医学上の発展とともにあらたな課題も浮かび上がってきており，保険という総合科学的な領域における共同研究が不可欠となってきております。

ちなみに，本日ご出席の先生方もご承知と存じますが，昨年，日本保険学会大会におきまして「遺伝子診断と保険事業」と題するシンポジウムを開催し，好評を博しました。この時，日本保険医学会会長の薙野先生にご協力いただき，小林三世治先生（現会長）にシンポジウムの座長をお願いいたしました。その折，日本アクチュアリー会（西部正勝理事長・田中淳三副理事長・当時）にもご報告者のことで多大なるご協力を賜りました。

こうした側面に言及させていただいたのは，保険が総合科学的な特徴を有しており，経済・経営的，さらに保険法学的なアプローチだけでなく，保険医学的・保険数理的なアプローチの共同作業の場を持ちたいと念願していたからです。先ほどのシンポジウムはまさに共同作業の出発点になったという気がします。その意味で，日本保険医学会ならびに日本アクチュアリー会の皆様に心から厚く御礼申し上げます。

さきほどの日本医学会会長の森亘先生が言及されましたが，生活習慣との関係でライフリスクは様々な側面を提示してきています。一見医学的な問題とされることも，保険経営的にアプローチする必要が出てきております。これから重要な課題と考えられますひとつは，例えば，突然襲うPTSD（心的外傷後ストレス障害）の保険経営上の（保険設計，既契約者へのサーヴィス）対応問題，さらに高齢社会における介護と

保険問題，その延長に関係するオランダで認められた「死の選択」とリビングベネフィットといった側面等も保険の世界で多面的に考察しなければならないと思います。こうした保険に関します社会環境の変化の中で，皆様方の日本保険医学会と日本アクチュアリー会（林勲理事長）と私どもの日本保険学会との共同作業の機会をさらに拡大させていきたいと願っております。

本日はお祝いとともにお願いをさせていただきますが，今後とも，ライフリスクに挑戦されますとともに，私どもの日本保険学会にもご協力，ご支援賜りますことをお願いしつつ，先生方の日本保険医学会のますますのご発展と先生方のご活躍を祈念し，私の挨拶とさせていただきます。100周年，心からお祝い申し上げます。

生命保険協会会長　宇　野　郁　夫
（生命保険協会専務理事　上田　公一　代読）

日本保険医学会の，創立100周年記念式典の開催にあたりまして，心よりお祝いを申し上げます。

貴会におかれては，明治34年の創設以来，実に一世紀に及ぶ長い歴史の中で，「生命の長期予後」および「医学的危険選択」などの課題について研究活動を続けられ，わが国の生命保険事業の発展を支えてこられました。

振り返ってみますと，わが国の生命保険事業は，概ね日本経済と軌を一にして成長を続け，この数年は，まさに変革の時期を迎えております。

長引く景気低迷の中，新契約高が伸び悩み，資産運用が困難を極めるとともに，金融ビッグバンの進展に伴い，残念ながら幾つかの生命保険会社が経営に行き詰まり，一方で，多くの新しい生命保険会社が誕生するなど，事業を取巻く環境は大きく変化しております。

また，顧客ニーズの観点からは，少子・高齢化が一層進行する中で，生命保険に求められる機能も大きく変化しております。遺族のための死亡保障に加え，ご本人のための年金・医療・介護に対する保障など，生前給付のニーズがますます高まり，社会保障制度の補完を超えた保障提供が求められつつあります。21世紀の自己責任，自助努力社会において，生命保険は，国家の社会保障とともに，国民の生活保障を支える重要なインフラであると言えます。

このような時代であるからこそ，我々は，ご契約者に長期にわたって保障を提供するという「生命保険の本質」を改めて認識し，全力でこれに取組む必要があると考えております。

そのような事業の根幹となるのが，アンダーライティング機能であり，その中核となる医的選択であると考えております。

貴会におかれては，今後とも，「保障提供機能のあり方」や「公正かつ健全な危険選択のあり方」の研究を通じて，生命保険各社の経営へのご支援と，生命保険事業の発展へのご尽力を賜りますようお願い申し上げます。さらには，世帯加入率が9割にも及ぶご契約者の生命予後の分析を通じて，国民全体の健康向上にも貢献されることを，切に願ってやみません。

最後となりましたが，貴会のますますのご発展と，会員各位の一層のご活躍を祈念いたしまして，お祝いの言葉とさせていただきます。

日本アクチュアリー会理事長　林　　勲

日本アクチュアリー会の林でございます。本日は，日本保険医学会の創立100周年記念式典にお招き頂き，一言お祝いの言葉を申し上げる機会を得ましたことを，大変光栄に存ずる次第でございます。

常日頃，日本アクチュアリー会の諸活動につきましては，研修の場における，ご指導，また調査・研究における，ご協力等々，大変お世話になっております。高い場所からではございますが，厚く御礼申し上げます。

さて，日本保険医学会は，先程からご紹介ありますとおり，明治34年，つまり1901年に日本保険医協会として，設立されたとのことでございます。まさに過ぎました20世紀の始まりの時期でございます。さらに，年表を仔細に見ますと，直前の1899年には，わが国の商法典が成立しておりますし，同年には，日本アクチュアリー会が設立されました。またその翌年1900年には，保険業法が成立しております。

このように20世紀を迎えるに当たり，わが国の近代的保険制度を巡りまして，保険契約法，保険監督法という法律的な枠組みの成立，また，保険医学，保険数理という技術面を担当する専門職団体の設立といった，今日に続く，百年を超える，生命保険業界の発展の礎が築かれたわけでございます。

また外国に目を転じましても，日本保険医学会の設立の時期は，米国の1889年，英国の1893年，ドイツの1910年と，比較しても，遜色のないものであります。爾来わが国の保険制度の輝かしい発展に果して来られました役割は，多大なものでありまして，これに貢献されて来られました，会員の皆様方のご努力に深く敬意を表するものでございます。

保険医学会とアクチュアリー会との共同研究は，生命保険協力における死亡率調査委員会の場でなされて来ました。研究の対象は，保険リスクとしての死亡率に始まり，災害・疾病率，さらに昨今のいわゆるニューリスクの分析へと広がりを持って来ました。

保険商品の開発におきましては，給付内容の選定に，両会合同での検討チームも設立されまして，多様化する利用者ニーズに十分対応してきました。

一方では，近年医務査定における，ライフスタイルを反映する問題，国際的にも，議論を呼び起こしております遺伝子検査の保険選択への導入の是非など，まさに21世紀の生命保険業務を，根底から揺り動かすような課題もあり，両会共同での取り組みが求められているところでございます。

さて，アクチュアリー会も，一昨年，100周年を期しまして，21世紀のアクチュアリー業務のビジョンを設定いたしました。そこでは，生命保険の国際化の進展に伴い，これまで以上に他の専門職団体，また大学等の研究機関との強い結びつきを求めております。保険医学会の皆様におかれましても，従来にも増して，アクチュアリー会と一致協力の場を持って頂きますことを，この場を借りまして，お願い申し上げます。

それでは，最後になりましたが，100周年を迎えられ，まさに21世紀のとば口に，立たれておられます日本保険医学会の今後の益々のご発展を祈念いたしまして，私の祝辞とさせて頂きます。本日は，有り難うございました。

# 100周年記念式典　閉会の辞

日本保険医学会副会長　梅　津　哲　二

本日，ご来賓の方々にはご多忙の中，この100周年記念式典にご臨席いただき，またあたたかいお言葉を賜り，厚く御礼申し上げます。

今日より次の100年に向け，新たに日本保険医学会が日々躍進していきますよう心からお祈りしまして閉会の辞といたします。

本当にありがとうございました。

# 第三編　隨　　想

# 第三編　随　　想

## 半世紀の関わり

平　尾　正　治
（昭和56年～59年会長）

### 1．総会初参加

敗戦のソロモン群島から帰還し，母校の医局に戻ったものの，無理がたたって私は病いに倒れた。闘病生活は4年半。臨床医をあきらめた私は，昭和29年（1954年）に第一生命に入社し，翌年の日本保険医学会総会にはじめて参加した。

この時の宿題報告は金井潔氏(三井)が担当したが，その内容に疑問を感じたので，次の総会に関連出題を願い出ると却下された。金井氏には学会表彰が行われるので，その前の批判は好ましくないというのである。幸い，一色嗣武氏（朝日）のとりなしで，金井氏受賞の後に演題のないまま分析内容の発表を許され，改めて金井氏と同一資料を用いて，昭和32年(1957年)度総会の宿題報告を，私が担当することになった。

### 2．日本医学会総会

昭和34年（1959年）4月，日本医学会総会の「高血圧」シンポジウムで，谷島辰男氏（朝日）が，「境界域高血圧の予後」と題して，保険医学会のために万丈の気を吐いた。その直後に次総会プログラムが発表され，「高血圧の疫学」の演者として5名が予定された。

私は早速応募の名乗りをあげたが，翌月の評議員会で鳥井静夫氏（日本）も参加を申し出た。同一学会から2名の演者を出すことは許されない。困った山崎会長(明治)が，開催地大阪に本社をもつ日本生命に花をもたせてくれと頼むので，私はあっさりと身を引いた。そして，次の東京での総会参加を期待したが学問の流れは変って，「高血圧」は生理と病理が中心となり，疫学の出る幕はなくなった。

### 3．幹事就任

昭和34年（1959年）5月，山崎健雄氏（明治）は会長に就任すると，私を研究幹事

に指名された。他の幹事はすべて各社の評議員だった。他学会の役員を勤める大学同級生と，情報交換を続けていた関係もあって，生命保険会社社医親睦会の域を出ない保険医学会の在り方は，私にはなじめなかった。

そこで，この機会に学会の近代化を図ろうと，私は次々に改革案を提出した。まず日本医学会の分科会である当学会を，生命保険協会の各種委員会とはっきり区別し，幹事会，及び評議員会の議事録を作成した。そして，会計を独立し，他との混同を避けるよう求めた。

次に経費節減のために春，秋の研究会の後の懇親会を廃止し，定例のビール工場見学を取り止めた。しかし，学会に不似合な厚生幹事の廃止は，他の全幹事の反対で実現しなかった。なお，記念総会での各社永年勤続社医の表彰についても，学会に関係なしとして了解を求めた。

これらの改革は山﨑会長には認められたが，評議員の間では不評を買ったのであろう。昭和36年（1961年），谷島辰男氏は会長就任に当って，評議員岩田鎭氏（富国）と同席の上で私に向って，幹事不適格につき再任はしないと宣告された。

評議員でない私は以後学会とは直接の関わりはなくなった。しかし，会社の社医を指導して毎年研究論文を発表し，11年間にわたって生命保険文化研究所表彰を連続受賞した。

## 4．国際交流

昭和38年（1963年）11月，谷島辰男氏から前エクイタブル社医長アンガーライダー氏来日の機会に，同氏を囲む集りに誘いを受けたが，私にとってはこれが国際舞台に近づく第一歩だった。

昭和39年（1964年）５月，私はスイスで開催のICLAMに向う途中で，ニューヨークに立ち寄った。そして，そこでさきのアンガーライダー氏をはじめ，オーバーランダー氏（プルデンシャル），エントマーカー氏（メトロポリタン）らALIMDA（現AAIM）幹部を訪ねて，種々ご教示をいただいた。

それから半年後の同年11月に，アンガーライダー氏から書状が届いた。それには私のALIMDA入会申込書が同封され，アンガーライダー，オーバーランダー両氏が，すでに推せんの署名を終えていた。私は夢かとばかりにこれを押し頂いた。アンガーライダー氏からはさらに総会出席には必ず妻を同伴するようにとの指示が寄せられた。

パサディナの会場に着くと，推せん人が超大物だったので，私は多くの会員から丁重なもてなしを受けた。私はこの栄誉をお裾分けしたいと，エントマーカー氏と連名で，日本保険医学会を代表する館野豊（安田），鳥井静夫（日本）の両氏をALIMDA会員に推せんしたのである。

## 5．まぼろしの演者

ICLAMスイス大会は，同行した三原通氏（明治）の入院騒ぎで散々なめにあった。しかし，看病のために残留する私に対して，スイス再保険㈱はいろいろと便宜をはかり，おかげで同社医長で，ICLAM事務局長のタナー氏との結び付きは確固たるものとなった。

帰国後２か月を経て，私はタナー氏から信書を受取った。それは次回テルアビブ大会の高血圧セッションに，グブナー座長（アメリカ・エクイタブル）のもとで，演者を引き受けよとの依頼だった。しかし，当時の第一生命の事情は，私に再度のICLAM参加を許さなかった。万事窮した私が辞退すると，折返し日本から然るべき候補者の推せんを求められ，私は鳥井静夫氏（日本）が最適任と申し出た。

## 6．再び幹事就任

昭和41年（1966年），原　滋氏（日産）は会長就任に際して，私に研究幹事引き受けを打診された。５年ぶりの役員指名である。私はかつて日本医学会評議員会で耳にした当学会への批判，「一般演題すら出さぬ者が会長に就任する団体を，学会と呼べるのか」を伝えて，会長講演引受けを求めた。原会長は他学会からの批判を払拭するために承諾し，当学会としては初の会長講演実施の運びとなった。

昭和42年（1967年），吉田忠氏（明治）が会長に就任すると，私は引続き研究幹事に指名された。この度は前回の幹事就任時以来の懸案だった，当学会にふさわしくない名称の厚生幹事をようやく廃止することが出来た。ところで，順風満帆と思われた私の行く手に，やがて大きな災いが立ちふさがったのである。

## 7．暗闇のなかの燭光

第一生命大井本社の完成によって，医務部の同地への移転が発表されると，本社勤務の査定医が次々に退職を申し出て，実務に支障を来たす恐れが出てきた。私は医務部担当専務取締役に呼ばれて，「社業優先，学会役員を辞任せよ」と命じられた。こと此処に至って，昭和42年（1967年）10月，私は研究幹事を放棄し，学会に多大の迷惑をかけることになった。

昭和47年（1972年），ICLAMメキシコ大会の開催が決まると，タナー事務局長は私に，「水質汚染」の演者として日本代表の推せんを求めてきた。私が国立公衆衛生院の重松逸造氏を推せんすると，一も二もなくこれを取り上げてくれた。

重松氏を日本代表として送るに際して，その研究発表を支援するために，生命保険協会死亡率調査委員会医務側幹事団が当てられることになり，私はその団長としてメキシコ入りをすることになった。

このメキシコ大会につづいて，ALIMDA総会がニューヨークで開かれ，私は

ALIMDA幹部の方々と再会することが出来た。タナー氏とも再び顔を合せたがその折私は彼から，日本保険医学会での私の立場について尋ねられた。私は第一生命の現状を話し，本格的活動に戻るためにはもう少々時間がかかろうと伝えた。

その途中で私は彼が何のために，この話題に触れたのか判るような気がした。そして，私の胸には久しく眠っていた世界の桧舞台への夢が再び甦った。幸い，その間に第一生命では医務部担当専務取締役が交替して，暗闇のなかにようやく陽のさし始めるのが見えてきた。昭和56年(1981年) 2月，私が保険医学会への復帰を願い出ると，新専務取締役の理解ある計らいによって，私は評議員として学会活動に加わることが可能となった。

## 8．会長就任

私は学会に復帰するからには，いずれ会長を引き受けて，世界の桧舞台への足がかりにしたいと考えた。しかし，如何に社命とは言いながら，不義理をして大きな迷惑をかけたので，根強い反対も覚悟しなければならない。従って，無理をしないで実績を積み上げるつもりだった。けれども，いざ蓋をあけてみると，大方の支援を得て，私はいきなり会長に推されたのである。

監事3期の務めはあるものの，実質的には学会活動から離れること13年。大きな不始末をしでかした私を，学会はあっさりと許してくれた。有難いことである。会長の任期は2年であるが，恩返しの意味を含めて私はこれに専念し，前例のない4年の任期を全うした。そして，その間に学術会議第7部日本医学会分科会としての体制を整えた。その上で「世界のなかの日本の保険医学」と，「法体系と保険医学」と題する2回の会長講演を行って，私に寄せられた多くの期待にこたえたつもりである。

## 9．国際会議引受け

昭和56年（1981年）6月，日本保険医学会にとっては，幕末の黒船来航にも匹敵する重大事件のぼっ発が，ミュンヘン再保険㈱のフォン・ターデン氏によって伝えられた。同氏は会長に就任したばかりの私に向って，非公式であるがと断りながらも，1985年のICLAMを東京で引き受ける意志はないかと打診されたのである。

そして，それから間もなくタナー事務局長から，ベルギーでの次期国際委員会，及び常任理事会への公式の出席招請状が到着した。私はいずれ国際会議引受けの正式呼びかけがあるものと考え，当学会として予め検討することを決定し，検討委員会を発足させた。

ところがいざ検討に入ると否定的な意見が大半を占めた。タナー事務局長から第2弾の引受け依頼の公式文書が届いたのはその直後のことだった。国際本部との文書のやりとり，当方の計画変更等の処理の後に，生命保険理事会からの経費支援を得て，最終的に1986年のICLAMの日本開催引受けを決定したのである。

## 10. ICLAM東京大会

いよいよICLAMがやってくる。私は検討委員会を準備委員会，そして，さらに組織委員会に改組して準備の万全を期した。はじめは鳥井静夫氏を組織委員長に推して責任を負っていただき，自らは東京大会を意のままに演出したいと，組織本部長を買って出た。しかし，鳥井委員長退任という思いもかけぬ事態に遭遇し，そのあとを受けて私は重い責任を負うことになった。

宮内庁，東宮御所を訪れて皇太子（現天皇），同妃（現皇后）両殿下のご臨席を内定し，外務省で台湾，及び南アフリカの入国査証問題を解決して，昭和61年(1986年)10月12日の開会式に臨んだ。幸い，安藤博章組織本部長(日本)以下の役員，同夫人，ならびにその他関係者全員の協力を得て，東京大会は他に例を見ないほどの大成功をおさめることが出来た。

## 11. 橋渡し

日本保険医学会は，現在世界最高の水準にあるといっても過言ではない。しかし，それは我々の努力だけで得られたわけではなく，ICLAM，及びALIMDAなどの支援があってのことである。ところで，ICLAMとALIMDAは全く別個というよりも，むしろある意味では対立を思わせる存在で，それまでにICLAMが米国で開催されたことは一度もなかった。

私はお世話になった恩返しの意味で，先輩にあたる世界の２大保険医学会の間の橋渡しをして，よりよい和解関係をはかりたいと考えた。鳥井静夫，安藤博章両氏に働きかけ川瀬（日本），西尾（第一）両社長の協力のもとに，東京大会第３日の夜，東京会館に於いて２社主催の招宴を催した。そして，ICLAM，及びALIMDAの幹部夫妻を招き，懇親の一夕をもうけたのである。

私は当日その席の余興として一世一代の大サービスを果した。和服を着用して小唄振りの地方(じかた)をつとめ，美妓を舞わせた。その上で，ICLAM，及びALIMDA幹部ご夫妻の間を巡って，お互いの懇親宥和をとりもった。幸い，この試みは成功して，やがて平成７年（1995年）には米国の首都ワシントンに於いて，ICLAM米国大会の開催が実現することになった。

## 12. おわりに

日本保険医学会との半世紀に近い関わりのなかで，２社招宴を含めたICLAM東京大会の成功は，私にとって最も楽しく，懐しい思い出である。昭和57年（1982年）に私はICLAM国際本部常任理事（ビューローメンバー）に選任され，平成元年（1989年）には名誉常任理事として，終身の栄誉を与えられた。これらはすべて長年にわたって私を支援し，ご協力をいただいた日本保険医学会会員諸氏のおかげで，私は心からの感謝を捧げる。

# “Gute Alte Zeit”

日　置　　博
（昭和58年～59年副会長）

思い出というものは，少しヴェールをかぶせた方が美しい。――初恋の思い出がそうであるように。記憶力のさだかでない73歳の私にとっては10数年前の保険医学会のことは，幾重にもヴェールをかぶった霧の中のことでしかない。

ドイツ語をご存知の方は，私がなぜ定冠詞Dieをはぶいたか……お察し願いたい。

Die Gute Alte Zeitとすれば，あの時……あの頃とはっきり限定されてしまう。私の記憶はそれ程，定かではない。私が保険医学会に関係していたあの頃は良かった。そして今でも懐しい――そんな気持でGute Alte Zeitとしたわけです。

私は昭和33年住友生命に入社以来，フィールド――つまり診査一筋――18年を過しました。本社診査課：高松支社：釧路支社：熊本支社：京都支社：給与に満足したわけではありませんが，毎月の締切りには夜の11時すぎまで診査に走り廻っていました。ずい分ひどい目にもあった記憶もあるのですが，営業員やお客様との出合いを結構楽しんでいたのでしょう。それとも診査を終えたあとの一杯を楽しんでいたのでしょう。

そんなある日，前任者平位先生（医務部長）からお呼びがあり本社に伺いますと，“君にもそろそろ本社に入ってもらわねばならんがよろしいな！”とのお話，“何事もおおせのままに，ただし私はまだ若輩ですし社歴にしても私よりふるい人が沢山おられます。それで良ろしいのでしょうか”――“その事については，私と担当役員の副社長から話しはしてある，どなたも異存はない様だ，とのお話“そこ迄話しを通していただいているなら，お断りするのは失礼にあたります。若輩ではありますがやってみます”そして全国70余人のうち最年少の私が医務部長に就任することになりました。

となりますと当然協会の医務委員会にも保険医学会の評議員会にも出席しなければなりません。当時の医務委員会，学会の評議員会の顔ぶれを思い出してみますと，鳥井先生（日生），平尾先生（第一），三原先生（明治），大竹先生（朝日），小西先生（フコク），中黒先生（東邦），館野先生（安田），水戸先生・原川先生（三井）そのほかお顔は沢山浮んできます。どなたも，床柱を背にしてピッタリおさまる風格と貫録をお持ちの先生方でした。

順序として，協会の医務委員会，学会の評議員になるにはそれぞれの下部委員会の委員，あるいは保険医学会総会などでの論文発表などを通じてそれなりの認知といいますか，知名度が必要なのですが私の場合入社以来一年と少し査定のデスクに座り，その間何をしたかといいますと事務査定者の養成と教育，眼光紙背に徹するとはいいますが何もないものは誰が見ても何もないのであって，申込書と報状をてらし合わせ何もないものは医者が見る必要もないと事務査定範囲を大幅に拡大，その結果，日置先生は現場に帰ってくれ，……外組（ガイソ）ともめている熊本支社に行ってくれとのこと，社命とあれば止むなし，新井社長（現名誉会長）からうやうやしく辞令を頂だいしまたまたフィールドで診査にあけくれる日々となりました。

当時の熊本支社は外組の強い支社であり，その外組のなかでも中央執行委員会のうるさ方が熊本支社外組委員長であり歴代支社長はほとほと手を焼いているという曰くつきの支社であり社医も熊本支社では永続きはしないとのことでした。本社としても外組には頭を悩ませている時期であり社医不在支社対策は当面の課題ではありました。そこで——かどうかは知りませんが白羽の矢は私に当ったようです。“診査は夜か日曜にしてくれや，昼間は忙しいからな——（実はゴルフで）——”それが大好評，「今度の社医先生は夜でも日曜でも動いてくれる」外組の委員長ともすっかり意気投合，そうこうしているうち，ある保健所長と知り合い，口説きに口説いて採用に成功，熊本支社に２人の社医は必要はないし，どうしましょうかと当時の医務部長に相談したところ，半年もしないうちに引き上るのも都合が悪いから，あと半年新しい社医の指導ということでのんびりやっといてくれとのこと，おかげで30だったゴルフのハンディは一年間で13にまで上達，そのまま京都支社に転勤となりました。木屋町，先斗町で７年間楽しくやっている時本社医務部長ということになってしまったわけです。そして12年間医務部長——７年間は取締役医務部長，61歳で住友生命は定年退職，その後は健保組合の健康管理室長ということで健康管理システムを根本的に作り直し，平成11年に全ての役職をはなれることになりました。医務部長就任時66名だった社医の増員に東奔西走——数年のうちに110名全支社に社医配置を完了しました。勿論採用ミスもあり不適格者もあったわけですが何とか円満に退社していただきました。その頃の事でしょうか“人たらしのヘキ”という異名（イミョウ）もいただきましたが，その頃採用した若手社医が今や住生医務を背負っているのを見ると，良かった良かったと胸をなでおろしている次第です。また検定調査士……今は面接士の拡大にも努め……私は協会の検定調査士専門委員会の委員長も兼ねていました。……診査経費の大幅な削減にも努力しました。選択効果と選択経費とのバランスはいつも頭の中にありました。当初は看護婦経験者を中心に採用していたのですが，日本医師会のクレームがあり神田の日本医師会に出向き，今後，現職の看護婦は勿論，看護婦経験者も採用しないという事で和解——後日検討しますと，選択効果は看護婦経験者が最も悪く，最も良ろしいのは元内勤のグループだと判明，各社ともその方向に切り変えた様でし

た。なまじっかの医学知識よりも会社への忠誠心が大切なのだと知りました。

なんのかんのと言いながらあの頃の医務委員会，春秋の各社医長会は大変楽しいものでした。春は東京でのゴルフと銀座浅草での宴会，秋は京都での祇園先斗町，木屋町での清遊豊作の年は山程の松茸，そして木屋町界隈の散策，……あの頃は生保の全盛時代，各社とも毎年，二ケタ進展，財政も余裕があったのでしょうね，……まさにGute Alte Zeit！

私がすべての公職を辞した頃から，世の中は一変したのでしょうね。不景気—hard timesの風が吹き荒れ生保各社も，保険やら，貯蓄やら投信やら，いろいろ組み合わせた商品を売っている様です。危険選択なんて，どうでも良ろしいのでしょうね。万人は一人のために一人は万人のために……万が一にそなえているのが生保の使命です。そこにこそ生保の使命があり，危険選択の使命もそこにあります。現在の様な商品を売っている限り危険選択なんて不要であり，各社とも医務部を解体して，社医を野に放つべきではないでしょうか。

随想ということで，勝手な事を記しました。社医不要論ではありません。販売協力の一翼をになうのか——それも立派なことです——営業員さんの医学的教育をになうのか，それぞれ皆様がたで考えて下さい。良き時代はすぎ去ろうとしています。

# 保険会社に30年在籍して

安　藤　博　章
（昭和60年～62年会長）

臨床医になるべく内科の大学院で臨床と研究に従事していましたが，研究に一応の目処がついた30歳のとき，人間ドックと生命保険をドッキングさせたら，被保険者も保険会社もメリットがあり，臨床医の新しい行き方ではないかと考え生命保険業界に進みました。“それは夢のような話だ”という入社面接者の言葉が正しかったことを，入社後間もなく実感しました。“改めるに憚ること勿れ”と思い，直ぐに退社して別の道に進もうと考えて親友に相談した所，“いろいろ思案して選んだ筈だからもう少し我慢をしろ”という忠告を受けました。その後30年，紆余曲折がありましたが，人生の大部分を保険会社で過ごすことになりました。最後は会社が経営する人間ドックの理事長を務めることになりましたが，兼務に人材派遣会社や日生球場の社長をするとは，人生どうなるか分からぬものと思います。私が保険会社に在籍した30年は，保険医学や危険選択の分野も，日本の多くの所と同じように大きな変革期にあったと思います。私の経験を交えて，これらに関係する事を記してみます。手元に資料がないので多少違ってる点もあるかと思いますが，予めお断りしておきます。

私が保険会社に入社したのは昭和35年（1960年）のことです。ごく簡単にそれまでの保険医学経緯を見ます。生命保険は創設期から長い間すべて有診査でした。保有契約は極めて少なく，大数の法則を根拠とする危険選択は非常に慎重であったことは想像に難くありません。日本生命の社史をみますと，社長や役員と一緒に診査医が写っている大きな写真が掲載されています。会社組織が小規模で，危険選択が重視されていたことが分かります。死に至る病と恐れられていた結核も一見健康人と見えるので，医師の意見が尊重されていたことは明らかです。

20世紀に入り数字査定法が開発され，欧州では標準下体保険が行われていました。大正に入りミュンヘン再保の医長エムデンが来日し，標準下体をすすめています。しかし日本は，独自の資料を作成するべく国の協力を得て昭和７年に“弱体保険資料調査報告書”を作成しました。それを基礎に標準下体が作られ，昭和10年台のはじめには発売されています。しかし，当時の状況から推察してそれほど多くの契約があったとは考えられません。第２次世界大戦中，医師が極端に不足していましたので，終戦

少し前に無診査保険が開発されました。同じころ体力検査の資料を診査に替えることが認められています。いわゆる代用診査です。

このような状態でしたが，標準下体が再び日の目を見たのは，日本生命では終戦のどん底からようやく落ち着きを取り戻した昭和28年のことでした。この制度の復活に“鈴木　馨　先生”が果たされた役割は極めて大きかったと聞いています。まず当時の役員を説いて，医務部に医事研究課を作り，その中に数字査定係を置いて，いわゆる数字査定法を行いました。これは標準下体のためというよりは，異常所見のない被保険者の査定を合理化するという理由で，課の設置を説得したようです。境界域の異常所見のあるものをどう処理するのか，書物に書かれている数字査定法をそのまま用いると，条件体が多くなり実際的ではありません。そこで鈴木先生は“主欠陥主義”というアイデアを出して合理的に処理されました。先生は，晩年は日本生命の文化研究所に在籍され，危険選択概論を出されるような学者でしたが，同時にすごいアイデアマンで，これらの査定法のほか，団体診査の開発や研究的査定法などを実用化されました。（ある役員から「若いとき支社でマニュアルを参照して現地で一定限度の保険金まで標準体査定をしていたことがある」と聞いたことがありますが。）私が査定課に在籍中，文献がごく僅かしかなく，どのように考え処理すればよいか分からないとき，先生にお伺いすると直ちに回答してくださいました。ただ困ったのは，よく横文字の文献を見せられたり，数式で説明されたりすること，それに将来必ず民間でも疾病保険が発売されるから研究しないかと再三誘われたりすることです。自分は学問的な研究には向かないと思い，数字や文献を調べる仕事は御免蒙りたいと断り続けました。ちょうどその頃「東京で保険医学会の仕事をして来い」と東京への転勤が決まり，先生の好意を無にすることなく済むとホッとしたことを思い出します。

その後名古屋近郊で支社医長を経て，医事研究課長として本店に勤務することになったとき，“疾病保険の基礎的研究”というテーマが待っていました。間もなく疾病保険が発売されることになり，鈴木先生の先見の明に感心したものでした。また皮肉なことに医事研究課を合理的に収束することが，課長に与えられた１つの大きなテーマでした。当時医事研究課の存在理由の大きな柱であった数字査定をする係が，危険選択の実務を行う契約選択部に移管されており，課には統計係と調査係があるだけでした。統計係は数字査定に使用された膨大な資料が保管されており，それらはほとんどコンピュータ化されていました。調査係は各種の医学に関する調査を行っていましたが，それらは山谷のある数字査定実務の谷の時間に行っていましたから，調査のためだけに係を設けることは採算が合わないと考えられていました。しかし私にとって医事研究課長を務めた５年間は今から考えると実に贅沢な期間でした。正確ではないとはいえ毎年100万件を超える契約時の有診査データ（保有契約なら1,000万件近い）があり，それらの時間的経過による死亡発生状況が分かる資料と豊富な時間がありました。それらを用いて幾つかの論文を日本保険医学会に発表しました。当時保

険会社が抱える大きな問題の１つに，医師の不足があり，特に保険金の高額化による診査医の不足は深刻でした。そのため各社ともデスク医が少なく，発表される論文の数も限られたものでした。そのような状況でしたが，豊富な資料を使用できましたので，毎年のように演題を提出していました。多いときには４題出した年度があったことを記憶しています。その中で“糖尿陽性者の予後”という演題が日本医師会雑誌にも掲載されました。それを目に止めたのか製薬会社が講演を依頼して来ました。会場は東京のホテルでしたが，聴衆は開業医だろうと思っていたのに，糖尿病学会でよく見かける大学の教授や研究者の顔があり，一瞬エッと思いました。講演後のパーティで教授や研究者たちから「糖尿病の研究をしているが，このような観点から，糖尿陽性者の予後を聞いたのは初めてで興味があった」と評価してもらい，“保険医学のような予後を調査している研究機関は外にない”とこれまでの研究に自信をもつことができました。医事研究課長になるまで入社後10年ほど経っていましたが，迂闊にも“危険保険料は危険発生率に等しい”ということを知らず，それを悟ったとき目から鱗が落ちるような思いがしました。そのことが分かって危険選択がよく理解できるようになりました。そこで検定調査士（面接士）の教科書を作成するとき，私の担当部分の最初に，そのことを書いたことを思い出します。

医事研究課の次に契約選択課に移りました。ここは社長に代わって契約の可否を決定する部門です。私の考えが会社の成績ひいては営業職員の収入に直接影響を及ぼします。そこで理論的な合理性だけでなく，実際的な側面を考慮して結論を出すように心掛けました。例えば危険選択を危険保険料ではなくて，営業保険料の枠で考えることにしました。医的情報だけでなく，被保険者の職業，収入，健康管理状況，保険の種類や保険期間などその他の情報も参考にすることにしました。詳細は省略しますが，１例を挙げますと，住宅保険では死差益を出すことより，保険契約ができなければ家が建てられないことを配慮して，危険度がかなり高くても可能な限り契約を可としました。また事務のコンピュータ化と疾病保険発売に伴うモラルリスク対策も大きな課題でした。あたらしい職場に着任早々，30名の増員を受け入れ，コンピュータ化に取り組みました。職員が連日夜遅くまで奮闘していたこと，途中でシステム構築が破綻しそうになって心を痛めたこともありました。無事完成したときはホッとしました。次にモラルリスクについてですが，支払いの事由が，それまで被保険者の死亡という客観的事実でしたが，入院給付金では医師の主観的要素が入り，また給付金が，生存している被保険者の利益に直接かかわりますから，予定発生率を大幅に超過することになりました。入院１日に対して十数万円以上というケースも稀ではありませんでした。このような情勢の中で殺人のような犯罪も発生し，社会問題となりました。危険選択の責任者の一人であった私は，生命保険に関係した犯罪が起こっていないか，毎日朝刊を見るのが怖いような思いでした。その中で印象に残っているのは“替え玉殺人事件”と呼ばれたもので，新聞記事を賑わせていました。後に単行本として

発行されましたが，その中には私の名前も出ています。会社としてもいろいろ対策を立てましたが，その一翼を担いました。これらが奏功したのか，モラルリスクの発生も次第に下火になりましたが，時には暴力団の事務所に呼び出されたこともありました。

社医の不足はますますひどくなり，医務部長をしているとき最も重要な仕事の１つが医師の導入でした。入社希望者に面接したとき，喉から手が出るほど採用したかったのですが，何となくおかしい気がして見合わせました。後日他の会社で採用され，それが問題を起こし新聞種になりました。彼は偽医者でした。医務部の職務には，嘱託医に関係することがあります。毎年100万件を超す診査を円滑に処理するためには，嘱託医の協力が欠かせません。診査料の支払い，短期（早期）死亡などのデータによる嘱託医の管理などですが，それまで嘱託医一人ひとり，毎月台帳に記載していました。実に人手のかかる仕事です。担当課の職員に「コンピュータ化して入力さえすれば，後はボタン一つで処理できる」と言ってこの問題に取り組ませました。しかし，１年経ってもシステム構築は進みません。そこで，これはと目を付けた他の課の女子職員にやらせることを考え，必死で人事課と折衝し，既に配属が決まっていた彼女を強引に引き抜きました。彼女を中心に課員がまとまって作業し，翌年には実施にこぎつけることができました。その結果，これまでの職務の処理や情報管理が円滑にできたほか，嘱託医一人ひとりの診査成績が判明するようになりました。「条件体の少ない嘱託医は診査がよい加減で，死亡率が高く，条件体の多い場合は低い死亡率であろう。」と考えていたのに，それとは全く逆のケースなど，いろいろな情報を得ることができました。その結果，私は「優秀な嘱託医は，直感的に健康か否かを的確に判断し，診査はそれを裏付ける作業である。直感的な判断ができず，時間をかけて慎重な診査をする嘱託医は，異常を見つけることに熱心で，そのため血圧が上昇したり，正常範囲の尿所見を異常と報告するのではないか。診査を契約するためにするのか，欠陥を見いだすためにするのかの違い。」と考えています。１つの課題を仕上げるには，職員の量よりも質，時には腕力が必要，また新しいツールによって新しい発見があると印象に残る仕事でした。社医不足は深刻で，私自身も医務部長の外，契約選択部長，本店医長を兼務したことがあります。極めて多忙だったので，一時保険医学会には直接かかわることができませんでした。しかし，再び関係するようになり，これまでの欠陥研究が死亡率調査が中心でしたが，疾病保険が発売されるようになり，「入院発生率も調査する必要がある」と考えていました。塚本先生（明治生命）と相談して国鉄（当時）の資料を元に，“共同研究”の制度を発足させるように努力したことを思い出します。やがて会長に選出され，また医務委員長も拝命することになりました。忙しい時は重なるもので，そのような時に国際生命保険医学会議が日本で開催されることになりました。先輩たちが長年の悲願としていることは承知していましたが，実務を引き受けるようになることは明らかでした。また実務を支える社医

が足りなくて成功が危ぶまれましたので，日本での開催には反対でした。しかし，会長に選任された以上“国際生命保険医学会議東京大会を成功させよう”を日本保険医学会の１つの大きなテーマにとりあげました。そのころから次第に若い優秀な医師が入社するようになり，それこそ各社が一丸となって取り組んだことが，この会議が成功裏に終了した大きな理由だと考えています。今になれば本当によかったと思いますが，当時は随分苦労しました。もう１つのテーマに，保険医学の専門医制度がありました。当時まだまだ先のことかと思っておりましたが，私が退任してから間もなくこの制度が実現したことをよろこんでいます。

60歳で会社を退任することになりましたが，その後名古屋の人間ドックで理事長を８年間努めることになりました。入社時の思いが全く別の形で実現することになりました。その間，会社では東京やその他の大都市でも人間ドックの施設を作ることを計画し，後１歩のところまで進みました。しかし現地医師会の抵抗にあって実現しませんでした。私の家は京都府にあります。毎日の名古屋勤務は大変だろうから，といって大阪に兼務の会社を用意してくれました。そこでそれまで時々書き溜めていた原稿に書き足して，本の発刊を試みました。時間は有り余るくらいありましたし，資料も相当な量に達していました。ところがさてとなると欲しい資料も現役のときとは違ってなかなか集まらず，忙しい後輩に迷惑をかけることもできず，筆が進みません。満足できるようなものが出来ないなら発行するのをやめようと考え，出向会社を退任するとき断念しました。今こうして過去の事を振り返っていると残念な気がしないではありません。完璧なものを期待せずに書けばよかったという思いもあります。

与えられた紙数も尽きました。これで擱筆しますが，死差益は契約後５年ほどでなくなると考えられます。営業利益が出ない構造が当分続くと思いますが，これからはますます死差益が期待されるでしょう。皆様方のご活躍をお祈りします。

# 私の体験的「体格・血圧論」
## —保険医学会創立100周年に思う—

塚　本　　宏
（昭和63年～平成元年会長）

日本保険医学会創立100周年の今年は，私個人にとって古希の年に当たります。といっても，昔流の数え年でのことです。現今の高齢社会のさなかとはいえ，紛れもない「老人」の一人になっています。

幸い，身体の方はまずまず元気で，今は毎日，社会保険審査会というところでお役所勤務をしています。ときどき，健康保険の「診療報酬審査会」と間違えられるくらいで，大方の会員の皆さんには馴染みがないと思いますが，一言でいうと，健康保険や厚生年金保険被保険者の「不服事件」を裁く準司法の裁判官的なお役目を務めております。保険業界を含む金融業にお勤めの方からの不服はほとんど見かけませんが，実に気の毒な方が多いにもかかわらず，制度の仕組みや法律（根拠条文などと言います）が複雑で，容易には救済してあげられず，結構，ストレスフルな毎日を過ごしています。

やはり「保険」には違いないので，被保険者と保険者（主として社会保険庁です）の間に立って，公平性とか逆選択とか，皆さんの同じ考え方で，事件の裁きをしております。

実は，４年半前の1996年12月までこのような仕事に就くとは，夢にも思っていなかったのです。全くの偶然としか言いようがありません。良くも悪くも，1960年２月に明治生命に入社（この日から当学会の会員のはずです）以来今日まで，一貫して，保険の仕事をしてきましたので，インターンの１年だけ内科臨床の真似事をしただけで，まず一生，白衣を着ないままの，少数派，マイノリティの医者を通したことになりそうです。

生保業界が10数年前には「ザ・セイホ」などと囃されていた頃，医学部のある同級生から「お前はいいところへ行ったなあ」と言われました。私が生命保険会社に就職したとき，「何でそんなところへ行くんや」と言ったその人だったのですが，もちろん，ご当人はすっかり忘れているのですから，私自身が偶然に驚き，人間の「運」の不思議さを感じています。

さて，明治生命では，山口支社，九州診査室で約４年間の診査医のあと，本社勤務で定年までおりましたが，新契約査定，医事調査研究，管理業務など社医として一通

りの仕事――これが一色嗣武の教科書にあった社医業務のすべてでした――を経験させていただきました。なかでも，医事調査研究の時代が一番長く，当時の職制で，係長，副長，課長，次長と事務職と同じようなサラリーマンの階段を一段ずつプロモートさせてもらったのでした。

この間，保険医学会はもちろん，生命保険協会の死亡率調査委員会，あとで医務委員会など大勢の会員の皆さんとお付き合いができ，先輩の諸先生からはいろいろ貴重でかつ懇切なご指導をいただきましたし，同年代の会員とは会社の垣根を越えてお互いに切磋琢磨して，今から思えば随分勝手なことをしながらも，大変充実した日々を送ることができました。忘れてならないのは学会の事務局を担当していただいた生保協会の部課長，事務職の方々にも大変お世話になりました。全く運がよかったとしか言いようがありません。大勢で一人一人のお名前はあげられませんが感謝の気持ちで一杯です。

長かっただけに思い出も沢山あるのですが，私なりの体験的な，つまりは私流の短絡的な保険医学論をご披露することにしましょう。

保険医学研究の方法論的な基礎は，何と言っても疫学，なかでも大数処理を基盤にした統計疫学であることには，どなたも異論はないでしょう。わが国では，20世紀の後半になってようやく疫学が独立した学問として認知されたのではないかと，やや僻んでみているのですが，文句なく統計疫学の先達は，120年前からの保険会社の先輩たちだったのです。

わが国の保険医学論文第１号は，印東玄得の「被保険人体格統計表」（1885年）です。実は原著（学士会会報）を見たことがなく「明治生命五十年史」からの孫引きなのですが，この論文は身体計測値の年齢別分布統計表を主体としたもので，記述疫学のお手本そのものでした。

私は，1985年に，その年の宿題講演（「保険医学からみた体格の諸問題」）を担当させていただきました。印東と同じく明治生命の被保険者を対象にした疫学的な研究です。お引き受けする際には思ってもみなかったのですが，調べてびっくり，偶然にも，何と印東論文からちょうど100年目の発表だったのです。もちろん，分布統計を始め，古典的な統計手法を駆使したものですが，やはり100年間の学問的進歩は伊達ではなく，メインテーマの体格別死亡率ではちょっぴり先輩を凌駕することができたのではないかと，独りで悦に入ったことでした。

同時に，メトロポリタン生命の「理想体重」と同じ考え方を持ち込んで最低死亡率に基づく「明治生命体重表」（「長生き体重表」という名前を付けてくださったのは，菱沼従尹・元アクチュアリー会理事長でした）も作成し，一般国民の肥満問題に一石を投じ，その後の「日本肥満学会基準」策定の際の考え方にも影響を与えることができ，こんなに嬉しいことはありません。これまた，運がよかったの一言に尽きるでしょう。

ただ，アメリカの循環器疫学では，以前から「メトロポリタン相対体重」による体格分類が大手をふってまかり通っていること，また，アメリカのBMI基準のゴールドスタンダードが「体格・血圧研究」の体重別死亡率成績であることなどをみると，官民格差が厳然とある国とそうでない国とのプラグマティズムの落差を意識するのは私だけでしょうか。

体重別の横断的な血糖値，血圧値などの異常値出現率と縦断的な死亡率との間にパラレルな関係がないという乖離現象について，私はいまだに明快な説明がついていないと思っていますが，コンピューターを利用したより高度な解析手法が進歩している今日，ぜひ元気なうちに答えが見つかってほしいものと期待するところ大です。

もう一つの大きなテーマが血圧です。

「血圧は1ミリ高いとその分だけ病的である」とは，サー・ピッカリングの名言です。これは，アメリカの生命保険会社の血圧研究（「会社間共同研究」ですが）の成果から引き出した彼の結論です。このことはもちろん，わが国の成績も同様ですが，私は高血圧者の追跡調査により，同じレベルの高血圧でも，これを体格別に分類して死亡率を観察すると，肥満した群の方が死亡率が低いという成績を明らかにすることができました。まさに「常識のうそ」的な結果が出たのですが，肥満が高血圧発症のリスクファクターであるから，高血圧に肥満が合併していると過重評点つけたリスク評価をすべきという常識を覆したのです。この研究は札幌の公衆衛生学会でも発表したのですが，朝日新聞が記事にしてくれました。また，今でこそ臨床現場でも，収縮期に対して拡張期血圧を重視する風潮はなくなったと思いますが，古典的な手法と初期の多変量解析法を使って，収縮期血圧の意義を明らかにすることもできました。これら一連の高血圧研究を，私の学位論文として纏めることができたことも嬉しい思い出です。

明治生命の戦前の大先輩，高田他家雄は，明治から大正にかけての経験生命表の死因統計解析を行った際，今後の経験死亡率には血圧測定の効果が歴然と出ることを将来予測しています。見事に彼の予測が的中して戦後の経験死亡率の死因構造は，国民死亡率に比較して高血圧関連の死因が明らかに低く，死差益造出に大きく貢献しているのですが，私は死因別寄与度を使ってそれを証明することに成功しました。循環器疫学の泰斗，シカゴ学派のスタムラーをして，（アメリカ）生命保険会社は血圧計のおかげで経済帝国を築くことができたと言わしめたのも首肯できる結果でした。

このような血圧研究を纏めて，アメリカ建国200年祭に当たる1976年，アメリカ生命保険医長協会ALIMDA（現在のAAIMの前身です）のワシントン総会で発表できました。これまた，高田ができなかったこと（それは戦争のせいですが）を，兎に角やったという自己満足だけではなかったと思っています。

冒頭に，「老人です」と宣言しておいてよかったのですが，「昔は良かった」というのが老人の常套句だそうです。どうやら，そのとおりの「運」に恵まれたと自分流に

信じている男の昔話になってしまったようです。

もちろん，現役の皆さんの医学知識はもちろん，語学力やコンピューター力も，私とは雲泥の差があります。その持てる力量をフル発揮できないで腕を拱いている皆さんの姿が目に浮かび，右肩上がりの高度成長期には研究的な仕事も許され何でもできたでしょうよ，という声も聞こえてくるようです。

しかし，運は，独りでにやって来ません。何のための保険医学かの原点に帰って新たな発想を掻きたて皆さん一人一人の「運」を捕まえてください。私もほんの少しの努力と忍耐はしてきたのですから。

差し当たって，お金が要らない，パソコン，紙，鉛筆でできるシンガーの編み出した「非・生命保険死亡率研究」やメタアナリシス手法を使う文献研究などから始めてはいかがなものでしょうか。

21世紀と同時にスタートした保険医学会の新世紀が，皆さんのご活躍でますます発展することを心からお祈りして止みません。

# 90 周 年 寸 描

岡　本　　浩
（平成２年～４年会長）

第２次大戦を境に戦前の45年と戦後の45年を回顧した創立90周年から激動の10年を経てなお且つ本学会の中心命題ともいうべき生命の予後に関する研究が連綿とつづいている様子を拝察することが出来ご同慶の至りである。

90周年記念総会は新宿の朝日生命本社ホールにおいて日本医師会長や厚生省健康政策局長など外部から賓客を招いて開催された。歴代会長の列席のもと日本医学会に早くから所属している本学会にとって記念すべき総会となった。90周年事業の一つとして，森鴎外と同期でジョン・マンジロウの長男でもある中浜東一朗初代会長の日記が塚本前会長のご努力により刊行される運びとなった事は感にたえない。

この頃，往時の欠陥研究に加えて疾病の予後研究も進行していた関係上，会長講演として疾病の予後について最近の知見を披露することとした。その中から肝疾患を例にとって回顧してみると，死亡指数が高い順に肝硬変・慢性肝炎・急性肝炎の３つのほぼ平行な曲線を描いたのは良いとして，例数が少ない肝癌などについては統計学的な有意差が認められるまで保留しておくべきだったと思う。当時はＣ型・Ｂ型などに分れていなかった肝炎も慢性肝炎の近傍に位置すると推察するが如何であろうか。

また次年度の会長講演として入院日数を指標に取り上げ死亡状況を多角的に見ることとしたが，初めての試みであったことから給付金や保険金のシステムとミスマッチが起きないよう注意を払った。後日，タバコの危険度を調査するためにアクチュアリーと協議した際，彼等は既存プログラムへの影響を極度に恐れた事を思うと優秀なプログラムマネジャーに出会えた幸運に感謝したものである。出力されたデータに自信を持ったのは予め挿入して置いた内部標準が予想どおりの値を示したからであった。その概要は間もなく厚生の指標にも掲載されることとなった。今年の総会で卵巣嚢腫の予後は子宮筋腫より不良との発表があったようであるが，入院日数の短いものでは差をみないのではなかろうか。

いま一つ会長講演の候補として血圧に関する研究成果を考えていた。かつて日本随一の規模を誇った国鉄（JR）健康管理センターとの共同研究を機にまとめた血圧値と脳発作死亡率に関するもので，最新医学にも取り上げられ将来性のあるモデルであると思っていたが，経験に固執するマルコフ過程と趣を異にするため割愛することし

た。

90周年事業の一つに100周年同様，保険医学用語集の改定があった。周到な文言で構成されているとはいえ，時宜をえた改定は今後も必要であろう。国際化・緊縮予算・100周年積立など初めての難題に当面した90周年は，順風から逆風への対応を迫られた時期でもあった。

筆を置くにあたり豊かな能力の持主である先生方のご多幸を切望して止まない。

# 過去・現在・未来

横　森　周　信
（平成５年会長）

日本保険医学会の小林会長から，創立100周年記念会誌に前会長として何か書けという御手紙を頂戴した。確かに私は平成５年５月から，たった１年間ではあるが，第27代目の会長を勤めさせていただいた。しかし平成10年いっぱいで富国生命医長を退職して以来，医学部時代の友人が開設した老人介護施設付属の診療所を手伝ったりなどして，保険医学とはほとんど無縁の日常を過ごしてきた。だから最近の保険医学の進歩および保険医学会の現況については，まるで不勉強である。これではいけない。

当節は結婚式のスピーチだって，ちゃんとビデオに録画されてしまうのだから，昔のようなその場限りのお追従やアドリブでは済まない。一応御両人の生い立ちから結婚のいきさつくらいの事前調査が必要である。まして随想とはいえ権威ある学会誌の記念号に掲載されるとあっては，それなりの勉強をしなおすのが，たとえ付け焼き刃といわれても，礼儀というものであろう。

そう思って，協会の学会事務局担当の小岩原さんに電話して最近の学会事情をうかがい，学会誌や保険医学会ニュースを送っていただいた。小岩原さんは私が学会長だった頃も事務を担当していらしたが，その後他の課に配転され，この５月からまた学会事務局にもどったのだという。久しぶりでも気楽に話が通じて嬉しかった。

さて届いた資料に目を通し，また自分が会長だった頃の古い文献を引っぱり出して読み直していると，いろいろ複雑な思いが頭の中を徘徊して考えがとまらぬまま数日を過ごしてしまい，今でもきちんと整理できていない。だからこの一文は文字通りの随想である。勘弁していただきたい。

まず順序として，古い話からはじめる。

私が会長になった平成５年春は，日本はいわゆるバブル崩壊後の長い不況のトンネルに入っていた。このトンネルがどれほど長いのか，当時は誰も正確には予測できなかった。

これより前，昭和63年から平成元年にかけての１年間，私は富国生命の契約部長を務めた。医師の契約部長は異例のことであるが，当時はまだバブルの絶頂期で，平成元年12月には平均株価は史上最高の38,915円を記録するというバカ景気であったから，契約部長は座ってるだけでもすむというのが実情だったのかもしれない。なにし

ろ結果的には私でも大過なく務まったのだから。

しかし当時の富国生命の古屋社長は，私が毎月の契約状況の報告に上がるたびに，当時ブームだった貯蓄型の一時払養老保険の契約件数を見て“こんな責準（責任準備金）のカタマリばかり集めてどうする気だ”とはなはだ不機嫌であった。そしてこれも当時生保業界を風靡していた変額保険についても“保険は長期のものだ。もし利率が下がった時はどうする。そんなリスクをお客に負担させるような商品は俺は絶対に認めない”と，頑として主張を貫き通した。そして“こういう時期にこそ，不良契約がまぎれこむのを注意しなければならん。選択はビシビシきびしくやるように”と繰り返して言われた。契約部長時代の一年間に古屋社長から教えられた生命保険の基本は，その後の私の保険医学についての考え方にも大きな影響を及ぼしたと思う。

その後，私は医務部に復帰し，保険医学会では岡本会長のもとで３年間監事を勤めたのちに会長に選出されたが，その当時は前に述べたようにバブルはしぼんで平均株価は２万円を割り，生保業界の業績も低下の一途で，新契約高，保険料収入とも前年度比が，各社とも軒並みマイナスになってきた。この不況が単に長い景気サイクルの中の一局面に過ぎないのか，それとも目前に迫った保険業法の改正に伴う，規制緩和・自由競争時代の到来と併せて，生命保険が史上初めて迎える歴史的な転機の始まりであるのか，二つの考え方があったようであるが，当時の富国生命の小林社長は機会あるたびに“この不況は21世紀になってもしばらくは回復しないだろう。だから利差は当分みこめず，死差と費差だけが頼りだ。医務部もがんばってくれ”と言われた。つまり経費をかけずに選択効果をあげろ，それが崩れればどうなるかわからないということである。生来のんきな私でも，ただならぬ状態であることがわかった。

こうした周囲の情勢を反映して，私の会長就任当時に書いたり話したりした記事を読むと，基本的に甚だペシミスティックである。それは当時の私の心情の表れではあるが，今読み直してみても，エイズなどの二三の点を除いては，ほとんど現在の心境にオーバーラップする。ということは，現在の世情も８年前と本質的にほとんど変わっていないということである。

次に新しく送っていただいた資料を読んでみる。ふつう学問の世界では，第一線を引退してから３年間も勉強を怠っていると，もう最新の話題についてゆけなくなっている自分を発見して周章狼狽するものであるが，平成12年の日本保険医学会誌と13年の第98回定時総会の抄録・図表集に目を通した限りでは，私の関係していた当時の内容と，演題のテーマも手法もほとんど変わっていない。なにかホッとするような反面，いらだたしいような気もする。この３年間はそれほど天下泰平だったのかと，いぶかしく思う。

そう思いながら日本保険医学会ニュース第97号（平成12年11月）を開いてみると，ここにはハッキリと変化があったことが示されている。学会の会員数である。昭和12年８月１日現在で研究会員，賛助会員，海外会員，名誉会員まで合わせて847人であ

る。私が会長だった頃までは，毎年わずかながら増加を続け，一時は1000人の大台を上回っていた。その頃から見ると，約200人近くの減少である。もっともこれは1年前の数字であるから，今年はいくらかの変動はあるだろうが，昨年の表の中に名前が入っている会社の中で，その後に問題となったところもいくつかあるから，新加入の外資系企業を加えても，減少はすれ増加は期待できなかろう。

会員数の減少は，学会の活力が衰えることである。これは実は私の会長時代から，長期展望としては当然予期されていたことであった。この不況が続けば，生命保険事業はきわめて苦しい状態に追い込まれるだろう。そして生保会社の援助に全面的に依存している保険医学会もジリ貧状態になってゆくだろう。それなら，いっそのこと今のうちに戦線縮小して，日本医学会所属の他の学会とおなじようにオープンな個人会員組織の研究団体として永続を計るほうが，生保会社にとっても学会にとってもよいことなのではあるまいか，というのが私が会長時代に提唱していた「会則改正」の基本理念だった。私は現行会則の制定に当たられた館野（安田），大竹（明治），平尾（第一）の諸先輩会長の方々にお会いし，私の考えを述べて“会則は改訂の時期にきている”という点で一致した御意見を戴き，会則委員会を組織して，叩き台となるべき改正案を作成した。しかし評議員会では“現在まだ会則改訂の必要はない”として却下され，私は次期会長と交替した。

そして年月は過ぎ，保険医学会は無事に長らえて100周年を迎えた。まずはおめでたい限りである。顧みて当時の私は，いささかパラノイッシュだったのかもしれないとも思う。しかし一転して現実の世情を見ると，大衆は小泉内閣の「改革」人気に沸き立っているものの，平均株価はバブル崩壊以後の最安値（7月31日11,579円27銭）を記録し，景気の先行き不安は依然として解消されそうもない。そして保険医学会の会員数はじりじりと減少を続けている。私の「悲観的」予測を覆してくれるものは何もない。

悪夢は依然として終わっていない。半覚醒状態でベッドの上で輾転反側しているような状態である。しかも自分には何もできない。スティーヴン・キングの終末ホラーと同じである。

「どんな長い夜にも朝はくる」という。退院した老医師としては，ただ「どんな難病にも寛解はある」と信じて，予後良好を祈るだけである。　　（2001．8．1）

# 100年の1部分の感慨

北　島　武　志
（平成6年会長）

100周年　お目出度う御座います。しかし，かなり複雑な気持ちを込めて言わざるを得ないのが少し残念でもあります。小生が生命保険の業界に飛び込んで，約20年ですが，その当時に今日のような状況を予想していた人はどれくらい居たでしょうか？

栄枯盛衰は世の習いとはいえ，なんとも心苦しいものがあります。本来，生命保険は，長期展望の下に運営されていくものの筈ですから，一概に悲観してしまう必要もないと考えて，我々・医務の守備範囲で出来るだけ努力していくしかない状態と言えるでしょう。長期を考えて，地道に務めていく事が肝要でしょう。この考えに立って，医務として懸念を発言していくべきでしょう。現今，論議されている「逆鞘云々」にしても，必ずしも「運用」の部門のみの責任ばかりでなく，長期視点から考えれば，最初の新商品開発の段階からの関係部門全ての責任でもあるからです。

まあ，辛い話はこれくらいにして，最近感じていることなどを少し記して，小生の義務を終わらせていただきたいと思います。小生が会長を引き受けさせられましたのは，わずか1年間であり，いろいろの事情の然らしむる所であったのですが，それはさておき自分として出来る限りの事をさせていただきました。当時から，国際化対応と，若年社医の育成等を呼び掛けました。前者については，後述のようにその渦中に入って来たとも言えるでしょうし，後者については，近年の学会総会の参加メンバーを見ても，隔世の感があります。それぞれつけているバッジは異なっても，医師として，生命保険に協力しているのは共通なのですから，同じような悩みとか疑問があるのは当然であり，これらを研究会とか学会の場を利用して，意見交換や討議，更に相談相手となりあうというのが大切でしょう。あまりにも，狭い範囲の利害に拘ってやっていける時代ではないとも思っています。例えば，我々も，病院臨床時代を考えて見れば明らかで，大学や病院・教室は異なっても，どれほど多くの人たちに教えられ，導かれて来たか計り知れません。このような点から，今後の生命保険医学会に関して，いくつかの無責任な提案（？）と想像をさせて頂くのも年寄社医の厚かましさとしてお許し下さい。

## 1．各社間の意見交換をもっと。

生保の医師として，それぞれの問題解決に向かって，協力して話し合う事。仮に「社外秘」とでも言うようなものが有るのなら上手に処理したらよいので，殆どの部分は，そんなものではなく，お互いに，相談した方がプラスが大きいように思われますが如何。我々は，臨床医時代にやっていた方法です。A社の社医研修会に，B社の社医が講師となる事がなぜ出来ないのでしょうかね。このような交流が今後ルーチンとなっていくことも効果があるものと思います。

## 2．内外学会での発表をもっと多く。

近年の当学会の演題数は，必ずしも充実したものとは言い難いようです。もっと気軽に演題を出せるようにしたいものです。確かに生命保険医学ですから，非常に大きい例数を統計的に処理した意見が大切なのは理解出来ますが，そのような生命保険医学の本道である統計演題とは別に，少数例であっても，抜き取り検査的な研究であっても，警鐘を鳴らすような意見もある筈で，臨床学会の「症例報告」的なものでもいいのではないかとも考えます。そもそも，大数統計でないと物が言えないと拘っていれば，数の揃った時には，会社の損失も大数になっている危険も有り得るとも言えるでしょう。

## 3．生保元受会社の医務発表をもっと。

今回，シドニーでの「ICLAM」に出席させていただいた感想からですが，非常に再保会社からの発表が多くなったような感を受けました。これは，再保険会社医師の努力の然らしむる所と敬意を表したいですが，再保険・元受とは，生命保険医学としては，同じですが，その態度に微妙な相違があるのも事実でしょうし，元受会社社医の方が数も多いので，もっと元受会社からの演題も増加せねば必ずしも「バランスのとれた学会」とは言い難いように思われました。難しい事かも知れませんが，元受会社医が，もっと気軽に演題を出せるようにしていく必要があるように思いますがね。

## 4．もっと開かれた学会にする必要は？

外国での学会に参加すると感じるのですが，ロビーその他で，参加医師に対して，少なくない数の「非医師参加者（レイアンダーライター？）」が目立ち，しかも女性が少なくないのですが，彼女（或いは，彼）等が，実に普通に，参加医師に話し掛けてきたり，発表について，質問や論議を求めてくるという事が少なくなく，外国語での応対ですので，小生のような外国語音痴にはしんどい事ですが，非常に気持ちがよく，話し甲斐もあるものです。特に，アジアの国々からの参加者で，レイアンダーライターの参加が多いのはシンガポール・中国その他で，今後，どの国が生保で伸びて

くるかも想像できます。シドニーの学会でもそうでした。いろいろ難しい事もあるでしょうが，我が学会総会などにもレイアンダーライターの参加や演題発表も，将来可能となればとも思っています。現在でも，非公式に少数の人達が聴講しているようですが，これをもっと広げては。

## 5．生命保険の「グローバル化」に対処

日本の生保は，ドメスティックで十分という考えは，「インターナショナル」の世界では，日本の生保の特殊性とかは何とか主張出来ても，「グローバル」となれば，情けない泣き言に過ぎなくなるのは明らかです。近隣の人口の多い国々に進出したり，保険販売をしたりという事は，すぐには予定に無いとしても，巨大な新興マーケットに関する研究は怠るべきではないでしょう。この点に関しては，日本各社は，10年以上は遅れてしまっているように感じます。折角，有利な場所・言語を持っているのにと残念です。新興アジア市場からは，世界で最も遠い国・会社になってしまったようです。成田空港がアジアのハブ空港とは誰も考えないのは常識で，韓国・仁川，シンガポール・チャンギ等の空港の方が機能でも地理でも成田以上というのは当たり前です。アジアの中心は，これらというのが，もはや常識で，不自由な成田空港でも，日本はアジアの中心だからと胡坐をかいている内に，各国常識は，サッサと変化してしまっているわけで，気付いていないのは日本人だけかも知れません。これと同じ事，即ち，生保の「成田空港現象」が，近い将来，発生してくる事は，残念ながら明らかと思われますので，生保の医務担当部門も，「グローバル対策」を十分研究しておく必要が有るでしょう。日本はスケールが大などと言っても，国際的に，その意志を発表する言葉・態度を持たないとどうしようも無いと思われます。少なくとも，アジア各国の生保人は，医師以外の人達でも，自国語以外の言語で，外国人と渡り合える人達が殆どですので，将来の彼我のネゴシエーションの勝負は明瞭と言わねばなりませんし，我々はその時のために十分準備しておくべきでしょう。又，仮に，ドメスティックに日本での販売に留めても，保険に入った人は，いくらでも外国へ行くので，すでに現在でも，支払いや給付の部門では，少数ながら既に，「グローバル時代」に突入しています。そのような商品を既に沢山販売してしまっているのが日本の生保会社なのですから。

## 6．学会運営の改革？

これは，非常に難しい問題でしょうが，考えようによっては，最も肝心な事でしょう。即ち，会費負担についてですが，出来れば，個人負担に切り替えるのが，まっとうではないかと，時々考えます。例え，一時的に会員数が減っても，会場がボロになってもいいように思うのですが如何。元会長の言うべき事ではないかも知れませんが，自分の意見として発表していくには，これしか無いように思います。何も，反会

社言動を取ろうと言うのではなく，業界全体の事を考えて，又，医師としての責任と誇りを持って発言するのには当然の事のように思いますがね。

各会社の事情や得失を考慮せねばならないのは，会社員として当然ですが，あまりにも会社員化したあまり，スペシャリストとして発言すべき事（必ず言うようにせよと言うのではない。決定するのは会社というのは明らか。）まで，辛口意見は嫌われて損と考えて，あまり発言しないというのは困った事と言わざるを得ないでしょう。

## 7．長期的視点という原点

最初にも，申しましたように，「栄枯盛衰は世の習い」，或いは「一栄一落は　これ春秋」とも言われますが，現在のような，生保（日本の）に対する逆風は，未来永劫には続かないはずで，その意味からも，我々は，好調の時以上に力を貯えておく必要があるでしょう。長期視点という，生保の特質を忘れずに，生保の入り口から出口に至るまで，スペシャリストの医師として頑張っていきましょう。

戦後50年余り，いくつかの産業が，頂上を極め，又それ故に，没落していきましたし，再興したものもありますが，短期間で再興出来たものは皆無に近いと思われますので，我が生保業界も，簡単には行かないでしょうが「春の来ない冬は無い」わけですからね。それにしても，どの産業の盛衰を見ても，我々の臨床（癌センター）でよく観察したように，あまりドンドン安易に増殖していくと，真ん中から，「ツェントラル　ネクローゼ（中心壊死）」に陥る事があるという現象と誠に類似しているのに驚かされます。

寒い冬には，本を読んで力を貯めておく事が第一です。お互いに協力・相談が今まで以上に大切な時期になったと考えざるを得ません。

## 8．おわりに

以上，人の迷惑を考えずに，偉そうな事を書き連ねて申し訳ありませんでした。いつも一言多すぎて，何回も失敗してきた小生の病気のようなものですので，年寄の繰り言と笑い飛ばしてくだされば幸せです。それにしても，将来，気が付いたら，学会全体が裸の王様というようにはなりたくないものですが。

まあ，「老兵は死なず　ただ消えていくのみ」という言葉が実感されるこの頃です。

# 日本保険医学会100周年を迎えて

濱　口　知　昭
（平成７年～９年会長）

まずは学会100周年を迎えられたことに対し衷心よりお祝い申し上げます。また，未だ姿形もなく社会も混沌とした頃に，学会の産声をあげさせ，立派に育て上げてこられた先輩諸氏には筆舌に尽くし難い敬意と謝意を表したく存じます。

私が会長の任にあたらせていただきましたのは平成７年，８年，９年の３ヵ年でした。

丁度経済的にはバブル経済の崩壊後で世の中が沈みがちであり，社会的には阪神淡路大震災をはじめ，オウムのサリン事件，金融界の不祥事，住専の処理問題，米軍基地問題，高速原子炉「もんじゅ」の事故と暗い事件の続いた時期でした。保険業界も50年振りに新保険業法が改正施行され，正に維新ともいうべき幕開けになったのもこの頃でした。

表現が適切かどうかはご容赦頂くとして，従来の護送船団方式から群雄割拠方式（弱肉強食方式とは言い過ぎか，むしろ国際スタンダードに準拠した方式か）への変化，敢えて歴史的に表現すれば徳川時代から戦国時代への逆突入，或いは維新の再来かと思われた時期でした。金融ビッグバン，規制緩和の下，新たな枠組みの中，大変革の波が押し寄せようとしていました。自己責任，自助努力のキーワードでも象徴される時でもありました。会員の皆様方にはその捕らえ方の差異で憂慮から期待まで，心を大きく揺り動かされたのではないかと拝察されました。

このような環境下，保険医学会の将来を鑑みる中，その礎，運営は，正にその誕生の原点にあったと鮮明に記憶いたしております。それは，時代の転換を包含しつつ，保険医学に根ざした観点からの生命保険の健全性指標を社会に示していくこと，またそれを通して国民の健康増進更には生活に貢献していくことが礎であり，国際化，高齢化，規制緩和，医学医療の高度化へ順調に対応していくことが対応ベクトルと運営致して参りました。又，会員各位にとって学会は社が異なっても協調し切磋琢磨，自己研鑽でき得る場，延いては“鎮守の森”としたいと強く願っていた次第です。

その意味では，学会の発表も「多様化する商品と保険医学」「超高齢化社会と介護

問題」「先端医療と保険医学」「遺伝子検査と保険医学」「医療データ通信および電子カルテ」「悪性新生物と保険医学」など枚挙にいとまありませんが，時宜を得た内容にさせていただいたと我田引水的に評価させて頂いております。私事で恐縮ですが，会長講演も「社医の役割―その将来像―」「保険医学におけるパラダイムの変化」「日本保険医学会の更なる発展に向けて」と私なりに学会への提言，考察を加えさせていただきました。

いずれにしろ，学会運営にあたっては，根底に100周年への更なる飛躍を祈念し，精進してきたと顧りかえっています。私が会長の任を勤めさせていただけたのも会員，幹事の皆様方の一肩ならぬお陰とこの場を拝借して厚くお礼申し上げます。

日本経済もまだまだ厳しい包丁風の吹く状況と思われますが，こんな時こそ私たち一人一人が目標をしっかり持ち精一杯生きていくことが大切ではないでしょうか。

私はこんな時２つの言葉が浮かんで参ります。その一つは世阿弥の風姿花伝の言葉，
『當芸において，家の大事，一代一子の相伝となす。たとい，一子たりとも不器量の者には相伝せず。家，家にあらず。次ぐをもて家とす。人，人にあらず，知るをもて人とす。』
２つ目は一休禅師が師の華叟より道号を賜った時に詠んだ詠（うた），
『有漏路より無漏路に帰る一休み　雨降らば降れ風吹かば吹け』　一休

どの道も険しい。とはいえ，人生どうせ生から死への少しの間，雨が降ろうが風が吹こうが精一杯生きてみようかということかと私なりに解釈して生活している今日です。

日本保険医学会の会員の皆様方も益々ご健勝で，学会も益々ご発展されることを祈念して稿を閉じたいと存じます。

# 日本保険医学会の発展を祈る

梅　津　哲　二
（平成10年～12年副会長）

私は昭和61年６月に大同生命に勤務することになりました。入社前に大学の図書館でたまたま保険医学会の会誌をみたのがこの学会との最初の関わりでしょうか。日本保険医学会の存在には少し驚かされましたが，たまたまみました内容が診査に負荷心電図を行おうというもので，こちらのほうが驚きでした。

最初の本格的な関わりは，富国生命の横森先生が幹事をされていました広報委員会でした。昭和62年から２年間委員をしましたが，委員が書評を書くということで本を探して読むのは大変でした。次に平成３年から３年間会誌幹事を勤めております。最初の年の平成３年度は90周年の年であり，通常の会誌の内容に加えて論文総目録と創立90周年記念式典の内容を掲載しました。しかしながら，90周年記念号であることを表紙等に付けるのを忘れてしまいました。今になってですがお詫び申し上げます。

平成10年には思いもしませんでした副会長に選任されてしまいました。３年後には100周年が迫っておりこれは大変な時期に当たってしまったと不安でした。しかしながら，薙野会長，大峰監事はじめ各幹事，委員それに協会の方々のご尽力で立派な記念総会が開催できたと喜んでおります。お礼申し上げます。私自身は，100周年記念準備委員会あるいは組織委員会の運営をしただけでした。残りの事業も小林会長を先頭に素晴らしい成果になると確信をしております。

思いめぐらしてみますに，バブル経済とバブル経済の崩壊のもとに生命保険業界に損害保険子会社による会社がたくさん設立されたり，絶対に起こらないと思われていた経営破綻する会社がでたり，外資系の会社が多くなったり激動の時代であり，まだ持続しているようです。我々の職場はのんびりして安定したものとはほど遠いような状態になっています。加えて10年前には，会社のなかで多くの医師が重要な地位を占めておられました。そのような時代とは異なり保険医学会の運営もますます困難性を増しております。

さて，一般に医学の研究についてみますと競って自分たちの成果を発表し，それらが追試を受けたりしつつ展開されていきます。またその過程で新たな発見へと繋がっていくというものです。

私はもともと学会というのは嫌いでした。意味もない研究や研究のための研究に満

ちたものと思っていました。ましてや動物実験では猫いじめ以外のなにものでもないと考えていました。しかし，その考えはどうも間違っていたようです。それらの意味のないような研究でも少しずつではありますが進歩をもたらし，少なくとも重要な研究の下支えとして貢献しています。研究しようとする地盤が必要なのです。何もないところには何も生まれない。会員の皆さんも研究心を失わないようにしていただきたいと願います。

我々は，企業に属しています。企業の持つ貴重なデータを無償で公表するというのは，普通では考えられないことです。せっかく保険医学会で発表しようとしても会社の理解が得られず断念してしまうこともあるでしょう。

VHSビデオの開発でビクターは本来なら会社の秘密情報の筈のデータを公開し，それをもとに他の会社がそれぞれの得意な面で発展させ世界標準となりました。また，コンピューターのLINUXという基本ソフトも，その内容を公開し世界中で研究開発ができるようにしその地位を確立していっています。両者共もともと素晴らしい内容であったのですが公開して多くの人の手で開発するというのはより大きな成果を生むようです。

保険医学会も同様であってほしいものです。会社の貴重なデータをもとに発表があり，その発表からさらに発展してすばらしい成果を得，結局は会社に大きな成果となって戻っていく。そういう循環が続いていけば保険医学会の存在もより重要なものと認識され，発展していくことでしょう。

# 第四編　論文目録

# 第四編　論文目録

## 論　文　索　引

**原　著**

| 題　目 | 巻　号 | 年 | 氏　名 |
|---|---|---|---|
| 診査医と保険代理者 | 2　3 | 明治36年 | 山口　陳兵 |
| 米国に於ける新死亡経験 | 3　5 | 37 | 松崎故一郎 |
| 診査医の態度を論ず | 3　5 | 37 | 左　胸　生 |
| 明治生命保険会社診査医心得 | 3　7 | 37 | |
| 健康体と肺結核患者との胸廓の形状 | 3　8 | 37 | 三井武三郎 |
| ゴータ生命保険相互会社に於ける自殺統計 | 4　10 | 38 | 石岡繁太郎 |
| 妊娠婦人の契約可否 | 5　4 | 39 | 遠藤外三郎 |
| 職業と結核死亡とに就て | 5　4 | 39 | 大島　櫟 |
| 食道癌の臨床的統計 | 6　1 | 40 | 赤松是三郎 |
| 衡器なく体重測定に就て | 6　2 | 40 | 長谷川要吉 |
| 肺結核の生命保険に於ける関係に就て | 7　2 | 41 | 鈴木孝之助 |
| 体重と身長との関係 | 8　3 | 42 | 鈴木孝之助 |
| 脱腸契約に就て | 8　3 | 42 | 遠藤外三郎 |
| 死亡統計病類別に就て | 8　4 | 42 | 遠藤外三郎 |
| 胃癌経過の臨床的観察 | 8　5 | 42 | 後藤　瞭平 |
| 工場法に就て | 9　1 | 43 | 中浜東一郎 |
| 選抜体格の死亡率併日本人死亡表の一部に就て | 9　1 | 43 | 大山稲三郎 |
| 生命保険と呼吸器病 | 9　3 | 43 | 小泉　正義 |
| 朝夕に於ける身長の差異に就て | 9　3 | 43 | 広沢　良雄 |
| 死亡年令と病名との関係 | 9　3 | 43 | 大山稲三郎 |
| 女子胸囲の測定法に就て | 9　4 | 43 | 三井武三郎 |
| 無診査制度の将来 | 10　5 | 44 | 原島　茂 |
| 診査に出会する臓位転錯に就て | 10　5 | 44 | 三井武三郎 |
| 出生当時の死力について | 11　4 | 大正元年 | 松崎故一郎 |
| 未成年者体格の発育に就て管見 | 11　6 | 元 | 三井武三郎 |
| 男女性別の発生原因に関する統計的研究 | 12　2 | 2 | 原島　茂 |
| 未成年者発育の個性的観察 | 12　6 | 2 | 大山稲三郎 |
| 脳溢血に就きて | 13　3 | 3 | 諫山　直 |
| 酒に就て | 13　4 | 3 | 秋山　妙治 |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|
| 男性仮性半陰陽に就て | 13　4 | 大正３年 | 出水　仁吾 |
| 蛋白尿と健康状態の関係(I) | 13　4 | 3 | 竹内　雅休 |
| 結核病の経過年数 | 13　5 | 3 | 大山稲三郎 |
| 本邦生命保険会社の結核死亡率併結核早期診断上に於ける視診に就て | 13　6 | 3 | 大山稲三郎 |
| 診査医の立場 | 13　6 | 3 | 三井武三郎 |
| 蛋白尿と健康状態との関係(II) | 14　3 | 4 | 竹内　雅休 |
| 保険診査と蛋白及糖尿　附ペントズリーに就て | 14　5 | 4 | 丹治　善造 |
| 大正３年度本邦生命保険の統計に就て<br>附婦人の契約に就て所感を述ぶ | 14　6 | 4 | 大山稲三郎 |
| 再び早期死亡に就て | 16　1 | 6 | 中村健三郎<br>妹尾　堅太 |
| 保険的平均体格 | 16　2 | 6 | 柴山　文太<br>小泉　正義<br>青木半三郎 |
| 脳溢血死亡者の遺伝及体質に就て | 16　4 | 6 | 妹尾　堅太 |
| 保険診査上に於ける脈搏の検査に就て | 16　5 | 6 | 白石福三郎 |
| 早期死亡と死亡者の戸主又は夫の保険契約の有無 | 17　2 | 7 | 丹治　善造 |
| 邦人の命数に就て | 17　2 | 7 | 鈴木　敏一 |
| 診査効力と死因 | 17　3 | 7 | 田中吉左衛門 |
| 「タサブルイ」と生命保険 | 18　1 | 8 | 田中吉左衛門 |
| 生命保険契約に於ける糖尿病の価値に就て | 18　3 | 8 | 丹治　善造 |
| 流行性感冒の統計的観察 | 18　6 | 9 | 高田他家雄 |
| 流行性感冒の原因に就て | 19　2 | 9 | 佐多　愛彦 |
| 被保人の血歴に就て | 20　2 | 10 | 石岡繁太郎 |
| 15歳未満被保険人体格に関する統計的観察 | 21　3 | 11 | 板沢　政治 |
| 流感は果して多く強壮者を犯すか | 21　6 | 11 | 丹治　善造 |
| 疾病死亡率に及ぼす撰択の影響に就て | 22　1 | 12 | 高田他家雄 |
| 携帯用検尿試薬(I) | 22　1 | 12 | 田中吉左衛門 |
| 肺結核に関する統計的観察及研究 | 22　2 | 12 | 板沢　政治 |
| 地震と衛生 | 22　4 | 12 | 中浜東一郎 |
| 保険診査上より見たる大串博士の体格及栄養判定標準表に就て | 22　5 | 12 | 丹治　善造 |
| 生命保険と女子(I) | 22　5 | 12 | 中村健三郎 |
| 生命保険と女子(II) | 23　1 | 13 | 中村健三郎 |
| 生命保険と女子(III) | 23　2 | 13 | 中村健三郎 |
| 生命保険と女子(IV) | 23　3 | 13 | 中村健三郎 |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|
| 結核特に肺結核に就て | 23　2 | 大正13年 | 前田　春雄 |
| 男子に於ける被保険体の２，３死亡疾患に対する統計的観察 | 23　3 | 13 | 大貫　弘平 |
| 現行診査制度を論じ其の善後策に及ぶ | 23　6 | 13 | 佐久間　勝 |
| 癌の早期診断に就て | 24　1 | 14 | 前田　春雄 |
| 梅毒　　附　脊髄癆及麻痺狂 | 24　4 | 14 | 前田　春雄 |
| 正鵠を失はざる結核病予防の実施を要す | 25　4 | 15 | 中浜東一郎 |
| 糖及蛋白の検出法について | 26　2 | 昭和２年 | 板沢　政治 |
| 女子契約に就て | 26　3 | 2 | 増田　雷助 |
| 血圧と体質，特に脈圧と体質との関係に就て | 26　4 | 2 | 丹治　善造 |
| 慢性腎炎に就て | 26　5 | 2 | 前田　春雄 |
| Ｘ社契約者福祉増進施設に関する歴史的考察 | 26　5 | 2 | Ｔ　・　Ｋ |
| 血圧亢進症の予後に関する研究 | 27　1 | 2 | 高田他家雄 |
| 台湾人結核死亡に関する小統計的観察(Ⅰ) | 27　3 | 3 | 波多野義行 |
| 弱体者保険と医的診査の関係に就て | 27　3 | 3 | 篠原　昌治 |
| 紫外線及び之を透過する窓「ガラス」に就て | 27　3 | 3 | 中浜東一郎 |
| 死亡数比較統計表（事業報告所載）の合計算出法の疑義 | 27　4 | 3 | 大串菊太郎 |
| 現行我国普通生命保険約款に於ける自殺の条項に就て | 28　1 | 4 | 丹治　善造 |
| 死亡数比較統計表（事業報告所載）の合計算出法の疑義 | 28　1 | 4 | 山根　真蔵 |
| 台湾人結核死亡に関する小統計的観察(Ⅱ) | 28　2 | 4 | 波多野義行 |
| 高令者の健康調査（第１回） | 28　3 | 4 | 渡部　　定　他 |
| 保険金額に因て分類せる死因別死亡率の研究 | 28　5 | 4 | 高田他家雄 |
| 再び梅毒に就て | 28　5 | 4 | 前田　春雄 |
| 保健と経済よりみたるラジオ体操 | 28　5 | 4 | 簡易保険局 |
| 社会的条件と結核 | 29　1 | 5 | 深町　穂積 |
| 全身的血圧低下症特に結核症に対する鑑別診断上の意義 | 29　2 | 5 | 中浜東一郎 |
| 契約関係不良なる被保険者の早期死亡 | 29　2 | 5 | 渡辺　　定 |
| 死因分類別に就て | 29　2 | 5 | 中条　鋭一 |
| 糖尿の統計的観察 | 29　4 | 5 | 大田　敬三 |
| 婦人保険体の分娩と寿命の関係に就て | 29　5 | 5 | 沢田　嘉吉 |
| 筋肉運動性疲労体の診査に就て　特に血行器及泌尿器に関して | 29　6 | 5 | 本間　正雄 |
| 脳溢血死亡者の一般的考察 | 29　6 | 5 | 三上　治夫 |
| 炙痕と保険診査 | 29　6 | 5 | 馬淵　秀逸 |
| 癌腫発生に関する２，３の要約に就て | 30　1 | 6 | 井坂　　英 |
| 高令者の血族の寿命 | 30　2 | 6 | 渡辺　　定　他 |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|
| 日本人の比胸囲に就て | 30　3 | 昭和6年 | 大山稲三郎 |
| 診査後3年以内の死因観察 | 30　2 | 6 | 三井武三郎 |
| 保険診査に於ける血圧測定方法知見補遺 | 30　2 | 6 | 原田謙太郎 |
| 蛋白尿の予後に関する知見補遺 | 30　4 | 6 | 中条　鋭一　他 |
| 尿中還元物質の増減と季節との関係 | 30　4 | 6 | 早坂得奈治　他 |
| 統計的に観察したる診査報状の真相 | 30　5 | 6 | 沢田　嘉吉 |
| 被保険者体格所見 | 30　5 | 6 | 渡辺　　定 |
| 脳溢血死亡者の統計的研究 | 30　6 | 6 | 高田他家雄 |
| 再び生産年令に於ける日本人の標準体格に就て | 31　1 | 7 | 大山稲三郎 |
| 保険診査上に於ける黄疸に就て | 31　1 | 7 | 志場光太郎 |
| 所謂標準体格の直線「グラフ」について | 31　2 | 7 | 坂口　豊治 |
| 診査後3年未満の早期死亡に就て | 31　2 | 7 | 高田他家雄 |
| 保険医学上より見たる日本人の体格 | 31　3 | 7 | 原田謙太郎 |
| 生命保険より見たる浜口前首相の死因 | 31　4 | 7 | 丹治　善造 |
| 体格判定標準に就て | 31　5 | 7 | 中條　鋭一 |
| 再び診査報状の内容に就て | 31　5 | 7 | 沢田　嘉吉 |
| 外襲による心臓疾患に就て | 31　6 | 7 | 前田　春雄 |
| 血液及尿の還元物質と外気温との関係に就て | 31　6 | 7 | 早坂得奈治　他 |
| 本邦成人の腹囲及頸囲の測差に就て | 31　6 | 7 | 溝淵　岩夫 |
| 肺結核の早期診断について | 32　1 | 8 | 水野　沢斎 |
| 肺結核に就ての考察 | 32　2 | 8 | 前田　春雄 |
| 生命保険に於ける自殺 | 32　3 | 8 | 原田謙太郎 |
| 医務制度に関する諸問題に就て | 32　4 | 8 | 沢田　嘉吉 |
| 健康相談時の診断と死亡診断書の病名との比較による死因に関する研究 | 32　5 | 8 | 一色　嗣武 |
| 主要疾患の罹病期間，季節別死亡数及年令別死亡数に関する考察 | 32　6 | 8 | 高田他家雄 |
| 弱体保険に就て | 33　1 | 9 | 渡辺　　定 |
| 弱体保険に就て | 33　2 | 9 | 渡辺　　定 |
| 商工省日本経験生命表に関する２３の考察 | 33　2 | 9 | 高田他家雄 |
| 血行器障碍の予後 | 33　3 | 9 | 平松　濤平 |
| 疾病の相関性に就て | 33　3 | 9 | 前田　春雄 |
| 健康者検温の意義に就て | 33　4 | 9 | 中條　鋭一 |
| 急性心臓麻痺及び其他数種の疾病に関する統計的観察 | 33　4 | 9 | 原田謙太郎 |
| ２，３疾病の結核に対する影響に就て | 33　5 | 9 | 前田　春雄 |
| 青壮年期に於ける肺結核死の統計的考察 | 33　5 | 9 | 戸田　安衛 |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|
| 長寿者の研究 | 33　6 | 昭和9年 | 高田他家雄 |
| 医師の死亡診断書交付義務に就て | 33　6 | 9 | 福田嘉一郎 |
| 診査と診療との異なる諸点 | 34　1 | 10 | 川口　輝志 |
| 已往病歴の時効に就て | 34　2 | 10 | 沢田　嘉吉 |
| 皮膚恢復度計（Restitutionsmesser）を以てする診断法に就て | 34　2 | 10 | 影山　　直 |
| 女性生殖器の生理的週期性変化と血圧との関係に就て | 34　2 | 10 | 柴田　　勝　他 |
| 米国生命保険会社に於ける血圧の取扱に就て | 34　3 | 10 | 一色　嗣武 |
| 早坂式両側血圧同時測定法による左右上膊血圧の比較研究(I) | 34　3 | 10 | 柴田　　勝 |
| 老人性肺結核と保険診査 | 34　4 | 10 | 影山　　直 |
| 入浴に依る血行器の影響殊に血圧及び脈搏の動揺に就て | 34　4 | 10 | 矢沢　士郎　他 |
| 血圧と体格との関係 | 34　5 | 10 | 原田謙太郎 |
| 相関関係に就て | 34　5 | 10 | 菅野　　清 |
| 女性生殖器の週期的変化に因る体温，脈搏の変動に就て | 34　5 | 10 | 北脇　乾明 |
| 血圧脈搏及び体温に及ぼす「アルコール」の影響 | 34　6 | 10 | 北脇　乾明　他 |
| 室温の血圧脈搏体温に及ぼす影響に就て | 35　1 | 11 | 加藤貞一郎　他 |
| 血圧脈搏及び体温に及ぼす「アルコール」の影響　第3報　飲酒後長時間観察 | 35　1 | 11 | 加藤貞一郎　他 |
| 血圧脈搏及び体温に及ぼす「アルコール」の影響　第4報　宴会翌日に於ける血圧及脈搏に就て | 35　1 | 11 | 加藤貞一郎　他 |
| 「ホルモン」と血圧との関係に就て(I)　女性生殖「ホルモン」と血圧との関係 | 35　1 | 11 | 加藤貞一郎 |
| 入浴に依る血行器殊に血圧及び脈搏の影響に就て，第2報　出浴後長時間観察せる成績 | 35　1 | 11 | 矢沢　士郎 |
| 多産婦人と余命 | 35　1 | 11 | 中島　　献 |
| 聴診法及触診法による血圧価の比較研究 | 35　2 | 11 | 矢沢　士郎 |
| 生命保険医学上より見たる肺結核死亡の統計的観察 | 35　2 | 11 | 黒沢　四郎 |
| 摂食の血圧脈搏及体温に及ぼす影響に就て　第1報　魚肉貝類を主要副食物とせる食餌を摂取せる場合 | 35　3 | 11 | 北脇　乾明 |
| 摂食の血圧脈搏及体温に及ぼす影響に就て　第2報　鳥獣肉を主要副食物とせる食餌を摂取せる場合 | 35　3 | 11 | 北脇　乾明 |
| 糖尿及び蛋白尿と季節との関係 | 35　3 | 11 | 近内　忠行　他 |
| 被保険者撰択上体格を如何に取扱うべきか | 35　4 | 11 | 近沢　政治 |
| 第2期炎翳に就いて | 35　4 | 11 | 佐野　潤郷 |
| 炭鉱従業者の外傷死亡について | 35　5 | 11 | 田中　真平 |
| 性別血圧常価と体格との関係 | 35　5 | 11 | 原田謙太郎 |
| 生命保険医学上より見たる肺結核死亡の統計的観察 | 35　5 | 11 | 黒沢　四郎 |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|
| 運動競技に就いて | 35　5 | 昭和11年 | 前田　春雄 |
| 両側血圧同時測定法による左右上膊血圧の比較研究(Ⅱ) | 35　6 | 11 | 柴田　　勝 |
| 最近26年間に於ける若年者の体格と肺結核死亡の変遷に就て | 35　6 | 11 | 黒沢　四郎 |
| 基礎代謝及心臓機能に及ぼす室温の影響に就て | 35　6 | 11 | 加藤貞一郎 |
| 癌腫死亡の統計的観察（其一，其二） | 35　6 | 11 | 黒沢　四郎 |
| 紅茶及緑茶の血行器に及ぼす影響に就て | 35　6 | 11 | 矢沢　士郎 |
| 心臓機能に及ぼす女性生殖ホルモンの影響に就て | 35　6 | 11 | 加藤貞一郎 |
| 泌尿器機能に及ぼすアルコールの影響 | 35　6 | 11 | 早坂得奈治　他 |
| 両側血圧測定法による左右上膊血圧の比較研究(Ⅲ) | 35　6 | 11 | 柴田　　勝 |
| 肺毛髪線出現率に及ぼす曝射時間及びレントゲン管照準部位移動の影響に就て | 36　1 | 12 | 佐野　潤郷　他 |
| 本邦人の糖尿に就いての統計的観察 | 36　1 | 12 | 中島　　献　他 |
| 動的体格検査の研究　其一　剣道鍛錬時の運動性蛋白尿に就いて | 36　2 | 12 | 米原　忠徳 |
| 珈琲及「ココア」の血行器に及ぼす影響 | 36　2 | 12 | 矢沢　士郎 |
| 発病前より観察するを得たる上縦隔嚢肋膜炎の一例に就いて | 36　2 | 12 | 佐野　潤郷 |
| 両側血圧同時測定法に依る左右上膊血圧の比較研究(Ⅳ)　拳握の血圧に及ぼす影響に就いて | 36　2 | 12 | 柴田　　勝 |
| 両側血圧同時測定法に依る左右上膊血圧の比較研究(Ⅴ)　上肢の拳上及下垂による血圧の変動に就て | 36　2 | 12 | 柴田　　勝 |
| 両側血圧同時測定法に依る左右上膊血圧の比較研究(Ⅵ)　上肢血流遮断の血圧に及ぼす影響に就て | 36　2 | 12 | 柴田　　勝 |
| 健康日本人の血圧 | 36　3 | 12 | 中島　　献　他 |
| 両側血圧同時測定法に依る左右上膊血圧の比較研究(Ⅶ)　手部温浴及冷浴の血圧に及ぼす影響に就て | 36　3 | 12 | 柴田　　勝 |
| 両側血圧同時測定法に依る左右上膊血圧の比較研究(Ⅷ)　一側上肢運動疲労の血圧に及ぼす影響に就て | 36　3 | 12 | 柴田　　勝 |
| 遊走腎に就て | 36　4 | 12 | 矢沢　士郎 |
| 「ホルモン」と血圧との関係に就て(Ⅱ)<br>心臓「ホルモン」と血圧との関係 | 36　4 | 12 | 加藤貞一郎 |
| 「ホルモン」と血圧との関係に就て(Ⅲ)<br>副甲状腺「ホルモン」と血圧との関係 | 36　4 | 12 | 加藤貞一郎 |
| 尿異常（特に糖尿）に関する統計的観察 | 36　4 | 12 | 石岡繁太郎 |
| 簡易にして鋭敏且正確なる黄疸尿の検出法 | 36　4 | 12 | 岡村　宏雄 |
| ペテルセン，ルンドベルグ氏等式に由て計算せる肥満体羸痩体結核血歴及肋膜炎既往症の死亡率について | 36　5 | 12 | 高田他家雄 |
| レ線にて非活動性石灰化竈の将来をトし得るや | 36　5 | 12 | 佐野　潤郷 |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|
| 理学的所見なき肺炎病竈のレ線学的研究 | 36　5 | 昭和12年 | 佐野　潤郷 |
| 肥満体の死亡率に就て | 36　6 | 12 | 渡辺　　定 |
| レントゲン検査並に赤血球沈降試験の保険診査上に於ける応用価値 | 37　1 | 12 | 箱崎　孝平 |
| 被保人の血圧に就いて（続報） | 37　2 | 13 | 石岡繁太郎 |
| アルコール性飲料の影響に就て | 37　2 | 13 | 前田　春雄 |
| 麻痺性体質に関する一知見 | 37　2 | 13 | 影山　　直 |
| 腎臓炎死亡の統計的観察(I)　腎臓炎死亡と環境との関係 | 37　2 | 13 | 黒沢　四郎 |
| 腎臓炎死亡の統計的観察(II)　腎臓炎死亡の体質に関する研究 | 37　3 | 13 | 黒沢　四郎 |
| 体温と季節との関係に就いての統計的観察 | 37　3 | 13 | 北脇　乾明 |
| 脳溢血死亡の統計的観察(I)　脳溢血死亡と環境との関係 | 37　3 | 13 | 黒沢　四郎 |
| 脳溢血死亡の統計的視察(II)　脳溢血死亡の体質に関する研究 | 37　5 | 13 | 黒沢　四郎 |
| 聴診間隙の保険診査上に於ける意義並に呼吸性血圧動揺との鑑別 | 37　4 | 13 | 田中　親龍 |
| 体況活力の変調に関する診査学的研究(I)　体質発生及変動並に血液性状変化に就て | 37　4 | 13 | 箱崎　孝平 |
| 発育時児童の体況に就て(I)　普通中学生及有職中学生の体況に就ての比較的研究 | 37　4 | 13 | 青木　信道 |
| 小児肺毛髪線の出現率に就て | 37　4 | 13 | 佐野　潤郷 |
| 血圧の死因に及ぼす影響に就て | 37　5 | 13 | 板沢　政治 |
| 体況活力の変調に関する診査学的研究(II)　細胞及体液変調並に酸素作用より誘導したる特有性尿呈色反応について | 37　5 | 13 | 箱崎　孝平 |
| 結核死亡率より観たる腎的並逆撰択の効率に対する批判 | 37　6 | 13 | 田中　親龍 |
| 血圧の統計的観察 | 38　1 | 14 | 一色　嗣武 |
| 脳溢血及結核の血族歴を有する者の血圧並体格の研究 | 38　1 | 14 | 井手　顕之 |
| 体況活力の変調に関する診査学的研究(III)　ツベルクリン皮膚塗擦反応及局所免疫機転につき | 38　2 | 14 | 箱崎　孝平 |
| 日本男子の環境と体格とに関する統計的研究(III)　壮年男子に於ける職業と体格の関係 | 38　2 | 14 | 黒沢　四郎 |
| 本邦に於ける主要死因を除去し得たりと仮定したる場合の平均余命の延長 | 38　2 | 14 | 谷口　芳徳 |
| 台湾に於ける内地人と本島人との体格的及血圧の比較観察 | 38　2 | 14 | 北脇　乾明　他 |
| 主要疾患による死亡を完全に除去し得たと仮定したる場合の生存率 | 38　3 | 14 | 谷口　芳徳 |
| 肺門淋巴線結核のレ線学的診断性について | 38　3 | 14 | 佐野　潤郷 |
| 日本男子の環境と体格とに関する研究(IV)　未成年男子に於ける職業と体格の関係 | 38　4 | 14 | 黒沢　四郎 |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|
| 我国国勢調査上よりみたる日本国居住者の職業と死亡の関係 | 38　4 | 昭和14年 | 佐分鉦太郎 |
| 血族歴に早逝者及癌を有する者の血圧並体格の研究 | 38　5 | 14 | 穴沢　順一 |
| 結核よりみた体質 | 38　5 | 14 | 前田　春雄 |
| 社医と嘱託医との死亡比較 | 38　6 | 14 | 原　　次男 |
| 唾液ミロン反応の診査的意義及尿ミロン反応との比較応用並其呈色本態の化学的分解 | 38　6 | 14 | 箱崎　孝平 |
| 保険診査に於ける微量蛋白尿及アルブモーゼ尿につき | 39　1 | 14 | 影山　　直 |
| 本邦に於ける重要10死因による平均余命の短縮（続報） | 39　1 | 15 | 谷口　芳徳 |
| 日本人の脳溢血死亡 | 39　2 | 15 | 渡辺　　定 |
| レ線像よりみたる結核と体質 | 39　3 | 15 | 日吉　次郎　他 |
| 結核の流行性に就て | 39　3 | 15 | 前田　春雄 |
| 身長－（胸囲＋腹囲）＝K に就いて | 39　3 | 15 | 大久保正一 |
| 胃潰瘍及十二指腸潰瘍の統計的保険医学的研究 | 39　4 | 15 | 高田他家雄 |
| 台湾本島人の体格に関する保険医学的研究(I) | 39　4 | 15 | 秋元　　稔 |
| レ線像よりみた結核と血圧 | 39　5 | 15 | 佐野　潤郷　他 |
| 梅毒血液反応と血圧との関係並に同反応の各病系に於ける出現度について | 39　5 | 15 | 箱崎　孝平 |
| 台湾本島人の体格に関する保険医学的研究(II) | 39　5 | 15 | 秋元　　稔 |
| 不良歯牙について(I) | 39　6 | 15 | 堀　　省三 |
| 台湾人及台湾在住内地人の血圧 | 39　3 | 15 | 一色　嗣武 |
| 比体重と血圧との関係 | 40　1 | 15 | 神田　浩一 |
| 既往歴とそのレ線像 | 40　2 | 16 | 佐野　潤郷 |
| ヘンス法尿検糖量とCS氏比色血糖量との比較並に其診査的意義 | 40　3 | 16 | 箱崎　孝平　他 |
| 不良歯牙に就て(II) | 40　3 | 16 | 堀　　省三 |
| 日本人男子の体況に関する都鄙別統計的観察 | 40　4 | 16 | 日吉　次郎 |
| 職業別分類に就て | 40　5～6 | 16 | 日吉　次郎　他 |
| 悪性絨毛上皮腫 | 40　5～6 | 16 | 下堀　興治 |
| 台湾人の血圧に関する研究 | 41　1 | 17 | 一色　嗣武 |
| 糖尿及蛋白尿と季節との関係(II) | 41　2 | 17 | 原田謙太郎　他 |
| 被保険者死亡率より観たる診査医別診査成績の一考察 | 41　3 | 17 | 中条　鋭一 |
| 台湾人の身長及 身長－（胸囲＋腹囲）＝K に就て | 41　4 | 17 | 一色　嗣武　他 |
| 限界体の運命に関する研究(I) | 41　5 | 17 | 秋元　　稔　他 |
| 脳出血及梅毒性疾患の相関関係に就て | 41　6 | 17 | 宮沢真佐男　他 |
| 癲癇の生命保険医学上に於ける意義 | 41　6 | 17 | 草刈　春逸 |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|
| 特殊出産率の統計的観察 | 42　1 | 昭和17年 | 原田謙太郎 |
| 大阪市を中心とする高血圧症の統計的観察 | 42　1 | 18 | 山口　牧男 |
| 妊婦の契約に就て(I) | 42　2 | 18 | 岡　　為輔 |
| 被保険者身長とケトレー法則 | 42　3 | 18 | 大久保正一 |
| 日本人の血圧に関する統計的研究 | 42　3 | 18 | 日吉　次郎 |
| 台湾在住者の血圧に関する観察 | 42　4～5 | 18 | 三谷　章次　他 |
| 健康者の性質と血沈速度との関係に就いて | 42　6 | 18 | 富永　哲夫 |
| 高血圧者及低血圧者の験況に関する研究 | 43　1 | 19 | 高田他家雄 |
| 健康成人男子に於ける低血圧の統計的観察 | 43　1 | 19 | 中尾　政喜 |
| 海女漁夫及其家族の血圧の小統計的観察 | 43　1 | 19 | 中川　正重 |
| 日本人の体格に関する研究 | 44　1 | 21 | 帝国生命医務部統計部 |
| 卒中死亡の原因に関する研究 | 44　1 | 21 | 高田他家雄　他 |
| 卒中の統計的観察 | 45　1 | 22 | 高田他家雄　他 |
| 娼妓の死亡に就て | 45　1 | 22 | 岡　　為輔 |
| 我国に於ける生命保険医学の発達に就て | 45　2 | 22 | 高田他家雄 |
| 血圧に関る研究補遺 | 45　2 | 22 | 恒川　俊一 |
| 断続性呼吸音に関する一観察 | 45　2 | 22 | 小池　博美 |
| 結核性疾患の既往症と血圧 | 46　1 | 23 | 小池　博美 |
| 卒中罹患者の体格 | 46　1 | 23 | 高田他家雄　他 |
| 最近の早期死亡に就て | 46　2 | 23 | 橋田　　襄 |
| 麻痺性痴呆に就て | 46　2 | 23 | 草刈　春逸 |
| 起立性蛋白尿に就て | 46　2 | 23 | 綱島　義人 |
| レ線像と打聴診所見 | 47　1 | 24 | 永井　春三 |
| 10年間隔に於ける死亡率の変遷 | 47　1 | 24 | 三上　治夫 |
| 最近の結核死亡率について | 47　1 | 24 | 伊藤　梅雄 |
| 昭和23年度の国民死亡 | 47　2 | 24 | 渡辺　　定 |
| 生体測定に関する諸問題について | 47　2 | 24 | 橋田　　襄 |
| 終戦後我社に於ける結核早期死亡について | 47　2 | 24 | 幸島　春夫 |
| 腎臓結核について | 47　2 | 22 | 原　　猪吉 |
| 最近数年間に於ける余の診査したる血圧について | 47　2 | 24 | 綱島　義人 |
| 癌化学療法の基礎的研究（吉田肉腫による研究） | 47　3 | 24 | 長田　達郎 |
| 聴診間隙に就ての統計的考察 | 47　3 | 22 | 菅野　美福 |
| 診査と胸部「レントゲン」写真について | 48　2 | 25 | 岡　　為輔　他 |
| 女子の診査に際し特異なる諸点について | 48　2 | 25 | 屋代　周二 |
| 吉田肉腫に対する異種血清の抑制効果 | 48　2 | 25 | 長田　達郎 |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|
| 吉田肉腫白鼠に対するaldehydesの治療実験 | 48　2 | 昭和25年 | 神野潤一郎 |
| 腕部貫通銃創並盲管銃創者の遠隔予後について | 48　3 | 26 | 岡　　為輔　他 |
| 主要疾患の罹病期間に関する最近の調査研究 | 49　1～2 | 26 | 細谷　重雄 |
| 死亡診断書の直接死因に就いて | 49　1～2 | 26 | 三上　治夫 |
| 妊娠の早期診断・殊に排精法による妊娠反応について | 49　1～2 | 26 | 大畠　　清 |
| 当社被保険者災害死及び法定伝染病死について | 49　1～2 | 26 | 入江　　允 |
| 日本人血圧に関する統計的研究 | 49　1～2 | 26 | 金井　　潔 |
| 妊娠婦人の診査に際して特異なる諸点について | 49　1～2 | 26 | 屋代　周二 |
| 医的選択の効果の限界について | 49　1～2 | 26 | 室坂　弥一 |
| 肺結核征伐への道標 | 49　1～2 | 26 | 室坂　弥一 |
| 我社の実際死亡率について | 49　3 | 26 | 上田　為雄　他 |
| 生命保険診査状況控帳よりみたる戦後東北地方における高血圧について | 49　3 | 26 | 沼沢　　保 |
| 結核同居による再診並びに契約取消の予後調査について | 50　1 | 27 | 鈴木　　馨 |
| 脳卒中死亡率戦後の傾向 | 50　1 | 27 | 一色　嗣武 |
| 戦後数年間の血圧の動きについて | 50　1 | 27 | 榊原　　渉 |
| 生命保険診査における紫斑計使用の意義（血圧と紫斑計についての報告） | 50　1 | 27 | 三上　治夫 |
| 嘱託医指導について | 50　1 | 27 | 上野　元男 |
| 日本人血圧の統計的研究（抄録） | 50　1 | 27 | 金井　　潔 |
| 家族性エオジノフィリーの一例 | 50　1 | 27 | 蓬田　正二 |
| 無診査生命保険における「災害」の解釈について | 50　2 | 27 | 林　　千葉 |
| 被保険者死亡の死因別観察 | 50　2 | 27 | 稲田　　淳　他 |
| 最近の本邦人胃及び十二指腸潰瘍の統計的保険医学的観察 | 50　2 | 27 | 蓬田　正二 |
| 高令者契約の統計的観察 | 50　2 | 27 | 綱島　義人 |
| 主要疾患の季節別死亡数統計に関する考察 | 50　3 | 27 | 細谷　重雄 |
| 日本人の年令別死亡率 | 51　1 | 28 | 渡辺　　定 |
| 我国に於ける創傷伝染病死の統計的観察 | 51　1 | 28 | 林　　千葉 |
| 健康人血圧の季節的変動について | 51　2 | 28 | 三科　洵一　他 |
| 健康者に於ける血圧値の動揺について（予報） | 51　2 | 28 | 酒井　英之　他 |
| 指数方式による新しい肺結核レ線診定分類の設定について（レ線診定研究　第１報） | 51　2 | 28 | 貴家　貞而 |
| 我国に於ける小児災害死の統計的観察 | 51　2 | 28 | 林　　千葉 |
| 高額契約の死亡に関する報告 | 51　2 | 28 | 八木沢光孝 |
| 高令者の血圧 | 51　3 | 28 | 三上　治夫 |
| ボーダーラインリスクについて（予報） | 51　3 | 28 | 谷島　辰男　他 |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|
| 短期死亡からみた生保契約の逆選択について（抄録） | 51　3 | 昭和28年 | 上野　元男　他 |
| 死亡表最近の話題 | 51　3 | 28 | 守田　常直 |
| 北陸三県に於ける保生状態について（講演抄録） | 51　3 | 28 | 室坂　弥一 |
| 関東甲信越地方に於ける再診謝絶体の内容分析について | 51　4 | 28 | 大谷　英男 |
| 胸部「レントゲン」写真像とその実体について | 51　4 | 28 | 岡　　為輔 |
| 戦後に於ける糖尿病の頻度 | 51　4 | 28 | 蓬田　正二　他 |
| ニーランデル氏反応による尿糖定性検査成績判定について | 51　4 | 28 | 安井光太郎 |
| 最近の短期死亡中癌腫の様相について | 52　2 | 29 | 鳥井　静夫　他 |
| 山陰，山陽両地区に於ける２，３計測値の比較 | 52　2 | 29 | 石崎　武盛 |
| 酒類常用者と血圧 | 52　2 | 29 | 吉岡　　誠 |
| 戦後における生命保険申込者の体格並びに血圧測定値の動向について | 52　3 | 29 | 鈴木　　馨 |
| ペニシリン・アレルギーの一経験 | 52　3 | 29 | 武田　義雄 |
| 老年者に実施せる二段階試験 | 52　3 | 29 | 吉田　　忠 |
| 肺結核指数値のランキング設定とその応用（レ線診定研究第２報） | 52　4 | 29 | 貴家　貞而 |
| 脳卒中死亡率の近年の地位 | 52　4 | 29 | 一色　嗣武 |
| 死亡に現われた再診謝絶カードについて | 53　1 | 30 | 平松左右一 |
| 米国に於ける最近の医師及び歯科医師の寿命について | 53　1 | 30 | 村上　　弥 |
| 日本人血圧に関する統計的研究 | 53　2 | 30 | 金井　　潔 |
| 尿ウロビリノーゲンの陽性率とその意義 | 53　2 | 30 | 佐藤　次男　他 |
| 糖尿病と高血圧症の合併頻度について | 53　2 | 30 | 福島　正二 |
| ボーダーラインリスクについて（第２報） | 53　3 | 30 | 谷島　辰男　他 |
| 日本人血圧に関する統計的研究 | 53　3 | 30 | 金井　　潔 |
| 社医再診率の管理図 | 53　3 | 30 | 鳥井　静夫 |
| 酒に関する実験病理学的研究（第１報　非経口投与による組織反応） | 53　3 | 30 | 岸　　哲夫 |
| 地方別に見た高令者の血圧 | 53　3 | 30 | 三上　治夫 |
| 高額契約の死亡に関する報告（特に早期死亡について） | 53　3 | 30 | 八木沢光孝 |
| レ線検査の選択効果（レ線診定研究　第３報） | 53　4 | 30 | 貴家　貞而　他 |
| ２，３のポータブルＸ線装置の性能の比較検討（レ線診定研究　第４報） | 53　4 | 30 | 貴家　貞而　他 |
| 負荷時Ｘ線管々電圧の簡易なる算出法について（レ線診定研究　第５報） | 53　4 | 30 | 貴家　貞而 |
| 心尖搏動の位置について（その測定法と価値） | 53　4 | 30 | 櫨山　盛政 |
| 最近の保険契約申込者の胸部「レ」線写真所見について | 53　4 | 30 | 金丸　武夫 |
| 日本人血圧に関する統計的研究（続）相関分布表 | 53　4 | 30 | 金井　　潔 |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|
| 悪性腫瘍の血液像について | 54　1 | 昭和31年 | 竹谷　喜平 |
| 携帯用装置による胸部X線写真撮影について | 54　1 | 31 | 岡　　為輔 |
| 日本人の体格の統計的観察 | 54　2 | 31 | 稲田　　淳　他 |
| 日本人の血圧の統計的観察について | 54　2 | 31 | 大谷　英男 |
| 血圧の統計的研究（第1報） | 54　2 | 31 | 一色　嗣武　他 |
| 心電図集団検診について | 54　3 | 31 | 山本　亮毅　他 |
| 老人心電図集団検診所見 | 54　3 | 31 | 鳥井　静夫　他 |
| 老人心電図の遠隔予後調査（予報） | 54　3 | 31 | 鳥井　静夫　他 |
| 健康学童166例の心電図統計的観察 | 54　3 | 31 | 鳥井　静夫　他 |
| 血圧と心電図所見 | 54　3 | 31 | 佐藤　　勲　他 |
| 被保険者の死亡率と国民死亡率との比較 | 54　3 | 31 | 渋谷　次郎 |
| 岩手県東和地方に於ける鈎虫症例について | 54　3 | 31 | 林　　富栄 |
| 島根県に於ける再診謝絶状況について | 54　4 | 31 | 藤井　　栄 |
| 中間血圧の統計的観察 | 54　4 | 31 | 平尾　正治 |
| 高血圧危険の逓増性について | 54　4 | 31 | 吉川　武夫 |
| 社医診査と嘱託医診査との比較　第1報　血圧について | 54　4 | 31 | 金井　　潔 |
| 胸部レ線診査に現われた結核の病型及び病勢 | 55　1 | 32 | 谷島　辰男 |
| 生命保険診査に於ける心電計の応用について | 55　1 | 32 | 三原　　通 |
| 生存解除の予後について | 55　1 | 32 | 大谷　英男　他 |
| 心尖搏動の位置について（第2報）測定法とその価値 | 55　1 | 32 | 櫨山　盛政 |
| X線などの診査応用について医界へ望む | 55　1 | 32 | 国際連合科学委員会 |
| 日本人の血圧の統計的研究 | 55　2 | 32 | 平尾　正治 |
| 中間血圧より見たる脳溢血死亡者の一考察 | 55　2 | 32 | 三上　治夫 |
| ボーダーラインリスクについて（第3報） | 55　2 | 32 | 谷島　辰男　他 |
| 老人心電図の遠隔予後調査（心電図研究　第6報） | 55　2 | 32 | 上野　元男　他 |
| 循環器スクリーニングテストにおける調律異常について（心電図研究　第7報） | 55　2 | 32 | 上野　元男　他 |
| QT時間に関する研究（第1報） | 55　2 | 32 | 谷島　辰男　他 |
| 腹囲の保険医学的研究 | 55　3 | 32 | 友成　淑夫 |
| 肺結核にて再診となりたるものの予後調査（第1報） | 55　3 | 32 | 金丸　武夫 |
| 本邦人遠距離撮影像の心臓横径と体格 | 55　3 | 32 | 吉利　正彦 |
| 無診査保険の死亡について（主として年令制限問題に関する考察） | 55　3 | 32 | 磯村　　豊　他 |
| 片親卒中死における子の血圧について | 55　3 | 32 | 岩崎　茂敏 |
| 体格と血圧に関する統計的観察 | 55　4 | 32 | 吉川　武夫 |
| 心臓弁膜症に於ける心電図について | 55　4 | 32 | 水戸　良七 |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|
| 近年わが社に於ける初年度選択効果について―特に社医・嘱託医の比較― | 55　4 | 昭和32年 | 鳥井　静夫 |
| 最近の脳卒中死亡の傾向について | 55　4 | 32 | 一色　嗣武　他 |
| レ線検査例の死亡について（レ線診定研究　第6報） | 56　1 | 33 | 貴家　貞而 |
| 高血圧による再診謝絶体について（特に初診時及び再診時血圧値の比較） | 56　1 | 33 | 山崎　健雄 |
| 当社における高血圧再診体予後調査について | 56　2 | 33 | 山本　亮毅　他 |
| 本邦人遠距離撮影像の心臓横径と年令・血圧 | 56　2 | 33 | 吉利　正彦 |
| 標準下体再保険契約の死亡内容について | 56　2 | 33 | 八木沢光孝 |
| 肺結核にて再診となりたるものの予後調査 | 56　3 | 33 | 金丸　武夫 |
| 体格と血圧に関する統計的研究 | 56　3 | 33 | 平尾　正治　他 |
| 心尖搏動の位置について　測定とその価値（第3～4報） | 56　3 | 33 | 櫨山　盛政 |
| 脳卒中死亡率の季節的変動について | 56　3 | 33 | 一色　嗣武　他 |
| 血圧の統計的研究（第2報） | 56　4 | 33 | 一色　嗣武　他 |
| 高血圧の発生年令に関する考察 | 56　4 | 33 | 谷島　辰男　他 |
| 生命保険診査における心電計の応用について（第3報トランジスター心電計の構造及性能） | 56　4 | 33 | 三原　　通 |
| 危険選択上実施せる心電図検査成績について | 56　4 | 33 | 佐藤　　勲　他 |
| 定期検診における40才超の心電図検査成績について | 56　4 | 33 | 上野　元男　他 |
| レ線心臓諸径に関する二，三の知見（QT時間に関する研究　第2報） | 56　4 | 33 | 渋谷　次郎　他 |
| 生命保険診査時における尿「ウロビリノーゲン」反応について | 57　1 | 34 | 丸山満州雄　他 |
| 女子契約には女子基準表を適用すべきではないか | 57　1 | 34 | 鳥井　静夫　他 |
| わが社の廃疾調査について | 57　1 | 34 | 吉田　　忠 |
| 国際死因による欠陥分類について（欠陥の基礎的研究　第1報） | 57　1 | 34 | 貴家　貞而 |
| 40才以上本社内勤職員の心電図検査成績 | 57　1 | 34 | 三原　　通 |
| レ線検査環境の実態と手技上の問題点（レ線診定研究　第7報） | 57　1 | 34 | 貴家　貞而 |
| 嘱託医指導の効果について | 57　2 | 34 | 上野　元男　他 |
| 頸囲に関する統計的研究（第1報） | 57　2 | 34 | 六人部彦四郎　他 |
| 本邦人遠距離撮影像の心臓横径・大動脈弓径と体格・年令・血圧 | 57　2 | 34 | 吉利　正彦 |
| 養老院における心電図検査成績（第1報） | 57　2 | 34 | 佐藤　　勲　他 |
| 日本人の血圧の統計的研究補遺・血圧楕円について | 57　2 | 34 | 吉利　正彦　他 |
| 全結核死亡の平均余命に及ぼす影響について | 57　2 | 34 | 八木沢光孝　他 |
| 中年後の体重変化（中年後の体格と健康の研究　第2報） | 57　2 | 34 | 友成　淑夫 |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|
| 体格と血圧に関する統計的研究(II)—身長と血圧との関係— | 57　2 | 昭和34年 | 菅谷　三郎　他 |
| 境界域高血圧 | 57　3 | 34 | 谷島　辰男 |
| 健康老年者の心血管系に関する臨床観察 | 57　3 | 34 | 佐々　千之 |
| 病態階層impairment-states間の遷移確率transtition-probabilityを利用する長期生命予後の推測について | 57　3 | 34 | 鈴木　馨 |
| 高血圧の死亡率について | 57　4 | 34 | 鳥井　静夫　他 |
| 高血圧の死因について | 57　4 | 34 | 三科　洵一　他 |
| 降圧剤の尿中検出方法について　第1報　Hexamethonium Compoundの呈色反応 | 57　4 | 34 | 三原　通 |
| 内科より観たる老年病 | 57　4 | 34 | 関　増爾 |
| 模型による血圧測定の研究 | 58　1 | 35 | 早川　宏 |
| 中間血圧を指標とした高血圧の予後（欠陥の基礎的研究　第2報） | 58　1 | 35 | 貴家　貞而 |
| 動脈硬化と眼底所見 | 58　1 | 35 | 樋渡　正五 |
| 飲料水と飲食物中の珪酸の過剰摂取と本邦人の高血圧症との関係 | 58　1 | 35 | 三沢　敬義 |
| 簡易血糖検査の検討について | 58　2 | 35 | 佐藤　勲 |
| 養老院における心電図検査成績（第2報） | 58　2 | 35 | 佐藤　勲　他 |
| 比頸囲に関する統計的研究（第2報） | 58　2 | 35 | 水戸　義一　他 |
| 中年後の体格と長生き（中年後の体格と健康の研究　第3報） | 58　2 | 35 | 友成　淑夫 |
| 新体格基準と体格分類 | 58　2 | 35 | 福井　忠雄　他 |
| 我国の気候区と脳卒中死亡率について | 58　2 | 35 | 一色　嗣武　他 |
| 腎機能検査の保険診査への意義 | 58　2 | 35 | 佐藤　勲 |
| 標準下体保険契約についての考察 | 58　3 | 35 | 三科　洵一　他 |
| 逓減性危険の選択効果について | 58　3 | 35 | 鳥井　静夫 |
| 健康男子20才代と40才以上の心電図の正常範囲について | 58　3 | 35 | 池田　一義 |
| 脈搏値の問題—Coca博士の説を中心として— | 58　3 | 35 | 奈良　勝典 |
| 医的選択とその予後（第1報） | 58　4 | 35 | 岸　哲雄 |
| 初診時血圧と再診時血圧との差 | 58　4 | 35 | 大竹　喜彦 |
| 日本人の血圧について | 58　4 | 35 | 熊沢　兵二 |
| 高血圧の眼底検査について | 58　4 | 35 | 三上　秀一 |
| 頻脈に関する研究（第1報）—平常活動時における頻脈者の心電図検査成績について— | 58　4 | 35 | 岩崎　宏 |
| QT時間に関する研究（第3報） | 58　4 | 35 | 渋谷　次郎 |
| 我国における生命再保険の現状について | 59　1～2 | 36 | 八木沢光孝 |
| 告知欄からみた社医診査と嘱託医診査との比較 | 59　1～2 | 36 | 今宮俊一郎 |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|
| 生命保険診査による血圧値について（特に社医及び嘱託医別による統計的研究） | 59　1～2 | 昭和36年 | 橋田　　襄 |
| タバコタールによる発癌実験 | 59　1～2 | 36 | 岸　　哲雄 |
| 呼吸器系の結核の予後調査 | 59　3 | 36 | 谷島　辰男 |
| 胃，十二指腸潰瘍の予後調査 | 59　3 | 36 | 谷島　辰男 |
| 自殺について | 59　3 | 36 | 佐々　千之 |
| 中間血圧よりみた高血圧欠陥体の観察 | 59　3 | 36 | 川上　秀一 |
| 唾液のPH，Aschner眼球圧迫，血圧との組合せによる個体の差（第1報） | 59　3 | 36 | 伊藤正次郎 |
| QT時間に関する研究（第4報） | 59　3 | 36 | 渋谷　次郎 |
| 高温作業における心電図並びに血圧の変化について | 59　3 | 36 | 佐藤　　勲 |
| 悪性腫瘍における貧血と貧血の簡易検査法の検討 | 59　4 | 36 | 川口　和夫 |
| 生保医的選択面におけるX線診断の価値　第1報　胸部（肺・肋膜）X線写真所見 | 59　4 | 36 | 原川　信次 |
| 心尖搏動の位置について（第5～7報） | 59　4 | 36 | 櫨山　盛政 |
| 死亡にあらわれた再診謝絶カードについて | 59　4 | 36 | 平松左右一　他 |
| 職業別経験死亡統計 | 59　4 | 36 | 水溜　延武　他 |
| 血圧階級別長期予後推定の一方法 | 59　4 | 36 | 鳥井　静夫　他 |
| 尿の研究（第2報）糖尿についての一考察 | 60 | 37 | 金井　　潔　他 |
| 診査における尿「ウロビリノーゲン」「ビリルビン」反応の意義 | 60 | 37 | 関田秀二郎　他 |
| STUDIES ON THE POSITION OF THE APEX BEAT (No. 8　CONCLUDED) | 60 | 37 | 櫨山　盛政 |
| X線間接撮影と心胸廓係数値の変動 | 60 | 37 | 佐藤　　弘 |
| 生保医的選択面におけるX線診断の価値（第2報）心胸廓係数について | 60 | 37 | 金井　　潔　他 |
| 体格別死亡率について | 60 | 37 | 鳥井　静夫　他 |
| 体格の研究（第2報）日米体格基準線の比較と体格指数 | 60 | 37 | 舘野　　真　他 |
| 女子の胸囲測定法について | 60 | 37 | 岡田　久輝　他 |
| 心電図査定基準の考え方について（第1報） | 60 | 37 | 佐藤　　勲 |
| 高温作業における心電図並びに血圧の変化について（第2報） | 60 | 37 | 佐藤　　勲 |
| 唾液PH，Aschner，血圧（皮膚絞画症，味覚）の組合せによる個体の差（第2報）味覚差による基本的個体差 | 60 | 37 | 伊藤正次郎 |
| 脈拍値と血圧値 | 60 | 37 | 奈良　勝典 |
| 更年期前後の婦人血圧値についての検討 | 60 | 37 | 八尾　十三 |
| 日本人の血圧の統計的研究補遺　低血圧について | 60 | 37 | 平尾　正治　他 |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|
| 体格と血圧の年令的推移に関する研究（第３部）某農村の年次的集団検診の結果の検討 | 60 | 昭和37年 | 関田秀二郎　他 |
| 人類遺伝と体質 | 60　1 | 37 | 大里　俊吾 |
| 頻脈に関する研究（第２報）脈拍数と心胸廓係数について | 60　1 | 37 | 岩崎　　宏　他 |
| 体格と血圧の年令的推移に関する研究（第１部）体格の年令的推移について | 60　1 | 37 | 藤井　　栄　他 |
| （第２部）血圧の年令的推移と高血圧の発現 | 60　1 | 37 | 藤井　　栄　他 |
| 被保険者体格の研究 | 60　1 | 37 | 舘野　　真 |
| 40才以上の本社内勤職員の心電図検査成績 | 60　1 | 37 | 田上　知則　他 |
| 初診時血圧と再診時血圧との差（続報） | 60　1 | 37 | 大竹　喜彦 |
| 生命保険における心電図検査について | 60 | 37 | 吉田　　忠 |
| 脈搏異常の心電図検査 | 60 | 37 | 北原　　潜　他 |
| 高血圧と心電図検査 | 60 | 37 | 大竹　喜彦 |
| 胸部Ｘ線検査の高令者選択効果について | 60 | 37 | 金丸　武夫 |
| 保険診査における血糖検査について | 60 | 37 | 松田　武一　他 |
| 保険診査における眼底検査の経験（第１報）診査時の血圧所見と眼底所見との相関関係について | 60 | 37 | 佐藤　義一 |
| 保険診査における皮膚毛細血管像について（第１～２報） | 60 | 37 | 小原　　護 |
| Parri氏呈色反応に関する２，３の検討 | 60 | 37 | 川口　和夫 |
| 尿中葡萄糖，蛋白同時検出試薬ウリスティクスに関する研究 | 60 | 37 | 奥村　　修 |
| 尿の研究（第１報）保険診査時尿のクロール値について | 60 | 37 | 金井　　潔　他 |
| 東北地方における血圧の統計的研究（青森・秋田両県内における血圧の検討） | 60 | 37 | 福士　正典 |
| 循環器再診の現状 | 60 | 37 | 舘野　　豊 |
| 最近の悪性新生物早期死亡についての検討（第２報）　特に死亡調査よりの観察 | 60 | 37 | 竹内　端弥　他 |
| 生存調査で発見された体況上の欠陥について | 60 | 37 | 岩崎　茂敏 |
| 胃・十二指腸潰瘍予後調査 | 60 | 37 | 水溜　延武　他 |
| 謝絶体の予後調査 | 60 | 37 | 岸　　哲雄 |
| 高血圧症の生命予後 | 61 | 38 | 鳥井　静夫 |
| 味覚差による個体差と発症傾向（第３報） | 61 | 38 | 佐藤正次郎 |
| 保険診査における眼底検査の経験（第２報）　診査対象の体格と網膜細動脈硬化との関係について | 61 | 38 | 佐藤　義人 |
| Studies on the position of the apex best (addendum) | 61 | 38 | 櫨山　盛政 |
| 内臓転位症並びにその家族の調査成績について | 61 | 38 | 佐藤　　勲　他 |
| 心電図査定基準の考え方について（第２報） | 61 | 38 | 佐藤　　勲 |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|
| 告知の信憑性に関する検討（第１報）告反による解除例の病類別観察 | 61 | 昭和38年 | 鳥井　静夫　他 |
| 胃・十二指腸疾患の告知の信頼性について | 61 | 38 | 田上　知則　他 |
| 短期死亡の面からみた嘱託医の診査成績について | 61 | 38 | 吉川　武夫　他 |
| 尿の研究（第３報）生命保険申込者の尿中クロール濃度について | 61 | 38 | 金井　　潔　他 |
| 尿糖検査について２，３の検討 | 61 | 38 | 川口　和夫 |
| 危険選択上の血清コレステロール検査について<br>（第１報）血清総コレステロール微量定量法について | 61 | 38 | 松田　武一　他 |
| （第２報）血清総コレステロールの簡易検査法について | 61 | 38 | 松田　武一　他 |
| 生保医的選択面におけるＸ線診断の価値<br>（第３報）心臓廓係数について（続報） | 61 | 38 | 原川　信次　他 |
| （第４報）Ｘ線間接撮影による心臓廓係数について | 61 | 38 | 金井　　潔　他 |
| 大阪地区胸部Ｘ線撮影受診者の心胸比の検討 | 61 | 38 | 長未　大典　他 |
| 胸部Ｘ線像（遠距離）における心横径標準値に関する研究 | 61 | 38 | 岸　　哲雄　他 |
| 災害死の統計 | 61 | 38 | 田中　成美　他 |
| 体格の年令別変化に関する統計的観察 | 61 | 38 | 金井　　潔　他 |
| 体格についての臨床的観察 | 61 | 38 | 八尾　十三 |
| 冠動脈疾患の予後に関する最近の動向 | 61 | 38 | 佐々　千之 |
| 癌の予後に関する最近の動向 | 61 | 38 | 竹内　端弥 |
| 標準下体保険研究における１，２の知見<br>(A)　標準体隣接血圧欠陥群の特徴 | 61 | 38 | 水溜　延武　他 |
| (B)　欠陥体の契約現況と謝絶体研究の重要性 | 61 | 38 | 水溜　延武　他 |
| 開業医（嘱託医）の血圧計について | 61 | 38 | 菊地静太郎 |
| 生命保険申込者の尿中クロール濃度について（第３報） | 62 | 39 | 金井　　潔　他 |
| 歴年令と生理的年令指数 | 62 | 39 | 八尾　十三 |
| 保険診査上注意すべき皮膚症状について | 62 | 39 | 佐藤　　勲 |
| 診査医の適正診査の判定について | 62 | 39 | 橋田　　襄 |
| 結核に対する胸部Ｘ線の選択効果 | 62 | 39 | 陸田　　博　他 |
| 生存調査で発見された体況上の欠陥について（続報）<br>（主として無診査契約について） | 62 | 39 | 岩崎　茂敏 |
| 本社標準下体保険契約の遷移状況の観察 | 62 | 39 | 尼子　隆士 |
| わが社の身体障害調査について | 62 | 39 | 小原　　護 |
| 自殺について | 62 | 39 | 友成　淑夫　他 |
| 高額標準体再保険の死亡状況 | 62 | 39 | 山田　　郁 |
| ボーダーラインリスクについて | 62 | 39 | 木下　和之　他 |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|
| 保険診査における眼底検査の経験（第３報）（異常尿の眼底所見について） | 62 | 昭和39年 | 佐藤　義人 |
| 血圧降下剤の尿中よりの検出に関する研究（第２報） | 62 | 39 | 奥村　　修 |
| 契約後15年経過せる現存被保険者の契約時中間血圧について | 62 | 39 | 三上　治夫　他 |
| 高血圧症の生命予後補遺（最低血圧のCriteria） | 62 | 39 | 鳥井　静夫 |
| 皮電計による心臓検診について | 62 | 39 | 田中　成美　他 |
| 心音異常と心電図所見 | 62 | 39 | 大竹　喜彦 |
| 生保医的選択面におけるＸ線診断の価値（第５報）Ｘ線間接撮影による心胸廓係数について | 62 | 39 | 金井　　潔　他 |
| Ｘ線像による心肥大の判定について（ポータブル撮影を中心として） | 62 | 39 | 安藤　博章 |
| 小型Ｘ線装置（ポータブル）による胸部撮影条件の検討（付　散乱線量の測定） | 62 | 39 | 奥村　　修 |
| 胸部Ｘ線像（近距離）における心横径標準値に関する研究（付　大動脈横径に関する研究） | 62 | 39 | 奥村　　修　他 |
| 心臓血管外科手術の予後について（第１報） | 62 | 39 | 宮尾　淳平 |
| 尿中赤血球の簡易検出法（Hemastix）の検討 | 63 | 40 | 奥村　　修　他 |
| 生命保険申込者の尿中クロール濃度について（第４報） | 63 | 40 | 金井　　潔　他 |
| 尿異常（蛋白・糖）の再検について | 63 | 40 | 岩崎　茂敏 |
| わが社における最近６ヶ年間の標準下体契約の短期死亡について | 63 | 40 | 高橋　　静 |
| 標準下体欠陥の本社経験死亡について（特に死因との関連について） | 63 | 40 | 尼子　隆士　他 |
| 標準下体再保険契約の死亡状況（その１）死亡率について | 63 | 40 | 山田　　郁 |
| 標準下体再保険契約の死亡状況（その２）死因について | 63 | 40 | 川上　秀一 |
| 上膊囲と血圧値の関係について | 63 | 40 | 岸　　哲雄　他 |
| 血圧の初診値と再診値について | 63 | 40 | 岸　　哲雄　他 |
| 高血圧性眼底病変についての一考察 | 63 | 40 | 松田　武一　他 |
| 高血圧症の生命予後補遺（最高最低血圧値の相関とCriteria） | 63 | 40 | 鳥井　静夫 |
| 血圧降下剤の尿中よりの検出に関する研究（第３報） | 63 | 40 | 奥村　　修　他 |
| 筆跡の保険医学的研究 | 63 | 40 | 岡田　久輝　他 |
| 老年者の指紋（指紋と体質の関連―第１報―） | 63 | 40 | 友成　淑夫 |
| 高令者の循環器学的研究 | 63 | 40 | 佐藤　　勲　他 |
| 上腕囲についての２，３の検討 | 63 | 40 | 川口　和夫 |
| 心臓血管外科手術の予後について（第２報） | 63 | 40 | 宮尾　淳平 |
| 皮電計による検診（心臓・胃）について | 63 | 40 | 田中　成美　他 |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|
| ミネソタコードによる生命保険申込者の心電図分類について | 63 | 昭和40年 | 有沢　誠 |
| 医的選択上経験せる胸部X線写真読影時の難易点と撮影の検討 | 63 | 40 | 佐藤　弘 |
| 災害死の統計（続報1） | 63 | 40 | 中村　信彦　他 |
| わが社の災害事故による廃疾調査について | 63 | 40 | 三原　通　他 |
| 我社の経験による被保険者死亡の観察 | 63 | 40 | 奈良　勝典 |
| 肝疾患の予後に関する最近の動向 | 63 | 40 | 川上　秀一 |
| わが社の入院給付適用状況調査について | 63 | 40 | 三原　通　他 |
| 肥満体について1，2の問題 | 63 | 40 | 渋谷　次郎 |
| 通院人間ドックの循環器所見について<br>体格別の所見による | 64 | 41 | 館野　真 |
| 体格別とくに肥満体の心電図について | 64 | 41 | 有沢　誠 |
| 尿異常に関する研究 | 64 | 41 | 奥村　修　他 |
| 尿の蛋白・糖の簡易定量法 | 64 | 41 | 岸　哲雄 |
| 筆跡の保険医学的研究 | 64 | 41 | 佐々　千之　他 |
| 保険診査上発見された不整脈について | 64 | 41 | 佐藤　勲 |
| 心臓血管外科手術の予後について（第3報） | 64 | 41 | 宮尾　淳平 |
| 血圧について | 64 | 41 | 高橋　静 |
| 皮脂厚による体格評価について | 64 | 41 | 塚本　宏 |
| 契約取消例の検討 | 64 | 41 | 井上　秀男　他 |
| 首都圏に於ける有診査拒絶体の内容分析（高血圧を中心として） | 64 | 41 | 細谷　隆　他 |
| 文献調査による予後　(1)突発性脱疽 | 64 | 41 | 富樫　清徳 |
| 有名人の死亡について | 64 | 41 | 山田　郁 |
| 当社の最近10年間における短期死亡例についての考察 | 64 | 41 | 木下　和之　他 |
| 早期死亡についての統計的分析（昭和39年度） | 64 | 41 | 荒川　三郎　他 |
| 我社経験による若年令層の被保険者死亡について | 64 | 41 | 前田　弘 |
| わが社における社医診査と嘱託医診査について | 64 | 41 | 高橋　静 |
| 医務査定業務の機械化について | 64 | 41 | 今宮俊一郎 |
| 欠陥研究のための基礎表には何が適当か | 64 | 41 | 鳥井　静夫 |
| 選択効果についての考え方 | 64 | 41 | 鳥井　静夫　他 |
| ――宿題報告――<br>当社の申込者からみた肺結核の予後追跡について | 64 | 41 | 木村　勇夫 |
| 尿中サイアザイド系降圧剤についての2，3の検討 | 64 | 41 | 川口　和夫 |
| 薄層クロマトグラフィーによるレセルピン及びその誘導体デカセルピンの検出について | 64 | 41 | 川本　久　他 |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|
| 経口糖尿病薬の尿中検出について | 64 | 昭和41年 | 井出　通夫　他 |
| 赤外線テレビを用いた眼底写真機の試用について | 64 | 41 | 里上　秀一 |
| 無散瞳眼底撮影法について | 64 | 41 | 陸田　博 |
| 尿中サイアザイド系降圧剤の検出について | 65 | 42 | 吉本　昭二 |
| 尿中糖，蛋白簡易定量法 | 65 | 42 | 岸　哲雄 |
| Dextrostixによる血糖測定の検討と診査への導入 | 65 | 42 | 奥村　修　他 |
| 人間ドックの血糖検査成績，特に尿糖との関連に於いて | 65 | 42 | 舘野　真　他 |
| 血糖検査施行例の予後調査成績について | 65 | 42 | 川本　久　他 |
| 災害保障特約に規定する保険事故発生状況について | 65 | 42 | 坂梨　一美 |
| 生命保険被保険者の災害死亡の動向について | 65 | 42 | 松田　武一 |
| 傷害給付及び入院給付統計と災害受傷者の職業告知に関する検討 | 65 | 42 | 小原　護　他 |
| 青年の指紋と体格―指紋と体質との関連―（第２報） | 65 | 42 | 友成　淑夫　他 |
| 皮脂厚による体格評価について―団地主婦の皮脂厚―（第２報） | 65 | 42 | 塚本　宏　他 |
| 無散瞳による眼底撮影法の研究（第２報） | 65 | 42 | 斎藤　弘吉　他 |
| 眼底所見よりみた高血圧者の予後について | 65 | 42 | 川上　秀一 |
| 眼底写真による“眼底所見の判定基準とその分類方法”について | 65 | 42 | 川上　秀一 |
| 被保険者死亡に関する考察 | 65 | 42 | 館野　豊　他 |
| 欠陥と死因との関係について | 65 | 42 | 高橋　静 |
| 謝絶された生命保険申込者の生命予後 | 65 | 42 | 木村　勇夫 |
| 悪性新生物死亡についての考察と血液採取に対する意識調査 | 65 | 42 | 天城　昭　他 |
| 高額標準体再保険契約の死亡経験 | 65 | 42 | 山田　郁 |
| 早期胃癌と選択上の問題点について | 65 | 42 | 佐藤　勲　他 |
| 生存調査により契約解除された被保険者の予後調査 | 65 | 42 | 戸沼　武郎 |
| 診査復活契約の統計的考察 | 65 | 42 | 上妻　正敏　他 |
| 危険選択の観点からみた契約の復活について | 65 | 42 | 藤原　敬男　他 |
| 文献調査による予後(2)気管支喘息 | 65 | 42 | 富樫　清徳　他 |
| 皮電計検査について（第４報） | 65 | 42 | 向後　健　他 |
| 肺機能検査の診査への導入（第２報） | 65 | 42 | 福士　正典　他 |
| 心音図を保険選択に導入することについて | 65 | 42 | 安藤　博章 |
| Ｘ線重複撮影による胃部診断の診査への応用 | 65 | 42 | 佐藤　弘 |
| 超音波診断法の生命保険診査への導入（第１報　腎臓結石診断について） | 65 | 42 | 三原　通　他 |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|
| 筆跡の保険医学的研究（第３報） | 65 | 昭和42年 | 田中　成美　他 |
| 無診査保険限度についての一私見 | 65 | 42 | 加藤　邦男　他 |
| 診査効果の評価についての一考察――追加発表―― | 65 | 42 | 川上　秀一 |
| 当社の重複契約の診査について | 65 | 42 | 川崎　輝治　他 |
| 最近数年間における我社の嘱託医の診査成績について | 65 | 42 | 吉江幹之助 |
| 嘱託医の診査報状（診査書）の内容の検討成績について | 65 | 42 | 守住　憲明　他 |
| 嘱託医の信頼度把握のための現地における一検討方法について | 65 | 42 | 水溜　延武　他 |
| 嘱託医訪問の現況 | 65 | 42 | 浜崎　晃則　他 |
| 尿糖出現率と社会階層，体格（肥満度），血圧との関係に関する調査研究 | 66 | 43 | 吉本　昭二 |
| 尿中抗糖尿病薬の検出法に関する研究 | 66 | 43 | 奥村　修　他 |
| 尿蛋白の電気泳動による研究 | 66 | 43 | 岸　哲雄 |
| 人間ドックの消化器所見について―消化器系質問項目と胃精密検査結果― | 66 | 43 | 館野　真 |
| 人間ドック循環器所見について | 66 | 43 | 佐藤　勲 |
| 体格と血圧の年齢的推移に関する研究 | 66 | 43 | 田中　成美　他 |
| 片親脳卒中死の家族歴をもつ被保険人の血圧について | 66 | 43 | 岩崎　茂敏 |
| $V_1$誘導におけるrSr′型と検診所見との関連について | 66 | 43 | 浜崎　晃則　他 |
| 心臓手術後の保険可能性について | 66 | 43 | 宮尾　淳平　他 |
| 削減法についての一考察 | 66 | 43 | 安藤　博章 |
| 当社の最近10年間における短期死亡例についての考察（続報） | 66 | 43 | 木下　和之　他 |
| わが社における延期・謝絶体の予後調査について | 66 | 43 | 川崎　輝治 |
| 謝絶された生命保険申込者の生命予後（総括報）―特に高血圧欠陥体の死亡状況分析を中心として― | 66 | 43 | 木村　勇夫　他 |
| 災害特に自動車事故による死亡に関する分析（第１報） | 66 | 43 | 富樫　清徳　他 |
| 交通災害受傷事故に関する検討 | 66 | 43 | 小原　護　他 |
| 当社における廃疾請求事故の医学的検討 | 66 | 43 | 藤原　敬男　他 |
| 無散瞳眼底撮影法について（第３報）（保険診査における無散瞳眼底検査の検討） | 66 | 43 | 福士　正典　他 |
| 皮電計検査について（第５報） | 66 | 43 | 向後　健　他 |
| 心音図検査の検査への導入について（第１報）―生体情報の磁気テープへの記録の一方法― | 66 | 43 | 川本　久 |
| 心音計の保険診査への導入について | 66 | 43 | 菅谷　三郎　他 |
| 超音波による僧房弁膜疾患診断 | 66 | 43 | 比田勝一彦　他 |
| 胆石症に対する超音波診断の応用 | 66 | 43 | 改田　亮　他 |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|
| 生命保険診査受診者からのサイアザイド系降圧剤検出について | 67 | 昭和44年 | 向後　米造　他 |
| 尿中降圧剤，糖尿病薬検出の新しい術式 | 67 | 44 | 岸　　哲雄 |
| 血糖値の年齢的・時間的分布状況—人間ドックの血糖検査成績（第2報） | 67 | 44 | 舘野　　真 |
| 嘱託医診査の再診率について | 67 | 44 | 大竹　喜彦 |
| 生命保険における「産業・職業分類コード」のあり方について | 67 | 44 | 木村　勇夫 |
| 選択面からみた無診査保険の検討—特に削減条項について— | 67 | 44 | 水溜　延武　他 |
| 標準下体重契約群に観察された医的欠陥の遷移状況について | 67 | 44 | 水溜　延武　他 |
| 標準下体とその条件不承諾率について | 67 | 44 | 松本　昭夫 |
| 皮脂厚による体格評価について（第3報）—皮脂厚と血清脂質との相関を中心に— | 67 | 44 | 小島　雍子　他 |
| 所謂無害性心雑音に就いて（其の1） | 67 | 44 | 小林東洋雄 |
| 選択面より観た悪性新生物の統計 | 67 | 44 | 大井　武良　他 |
| 早期胃癌の予後について | 67 | 44 | 高橋　秀雄　他 |
| 乳幼児死亡の現況 | 67 | 44 | 館野　　豊　他 |
| 当社における最近の死亡成績と再診謝絶体の傾向について | 67 | 44 | 浜崎　晃則 |
| 高血圧再診・謝絶体の予後調査について—とくに血圧値以外の諸要因の検討— | 67 | 44 | 塚本　　宏　他 |
| 欠陥と不慮の事故の関連について（第1報） | 67 | 44 | 水溜　延武　他 |
| ある患者の心電図所見並びに負荷試験の方法について | 67 | 44 | 佐藤　　勲 |
| 心音図検査の診査への導入について（第2報）—生体情報の磁気テープへの記録の一方法— | 67 | 44 | 川本　　久　他 |
| 遮眼書字法とその保険医学的応用（第1報） | 67 | 44 | 井樋　雄一 |
| 筆跡の保険医学的研究（第4報） | 67 | 44 | 田中　成美 |
| 生命保険診査受診者からのサイアザイド系降圧剤検出について（第2報） | 68 | 45 | 吉本　昭二　他 |
| 保険診査における心電図負荷試験の方法 | 68 | 45 | 佐藤　　勲 |
| 一般保険診査以外の諸検査（特に心電図）による異常発見度について | 68 | 45 | 舘野　　真 |
| 神奈川県某町における高血圧の集団検診について(第1報) | 68 | 45 | 向後　米造　他 |
| 所謂無害性心雑音に就いて（其の2）—特に経時的消長の追跡調査— | 68 | 45 | 小林東洋雄 |
| 心音図検査の診査への導入について（第3報）—生体情報の磁気テープへの記録の一方法— | 68 | 45 | 川本　　久 |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|
| 保険診査への心音図導入に関する検討 | 68 | 昭和45年 | 坂本　圭一 |
| 保険診査と心音図検査について | 68 | 45 | 佐藤　　勲　他 |
| 当社に有診査で契約された高血圧欠陥の死亡状況について | 68 | 45 | 新井　正雄　他 |
| 胃・十二指腸潰瘍の予後について | 68 | 45 | 小塚　駿一 |
| 欠陥と不慮の事故の関連について（第２報） | 68 | 45 | 水溜　延武　他 |
| 標準下体再保険契約の死亡経験 | 68 | 45 | 山田　　郁　他 |
| 健康保険の受療率について | 68 | 45 | 奈良　勝典 |
| 生命保険申込者の体格について―とくに肥満の社会的背景を中心に― | 68 | 45 | 塚本　　宏　他 |
| 心音図を導入した心雑音欠陥体の査定 | 68 | 45 | 岩倉　英夫 |
| 筆跡の保険医学的研究（第５報） | 68 | 45 | 田中　成美 |
| 第８回修正ICD分類による不慮の事故認定基準についての私見 | 68 | 45 | 小原　　護 |
| 当社の診査報状にみる消化器系疾患について | 69 | 46 | 川崎　輝治　他 |
| 筆跡の保険医学的研究（第６報）（異同比率について） | 69 | 46 | 田中　成美 |
| 嘱託医指示訪問の分析 | 69 | 46 | 大木清之助　他 |
| 肺ガン・肺サルコイドージスの一症例について | 69 | 46 | 高橋　　静 |
| 死亡指数に関連せる二，三の私見 | 69 | 46 | 新井　敬三 |
| 危険選択の方法とその効果 | 69 | 46 | 安藤　博章 |
| 眼底所見の重症度判定に関する一考察―臨床的判定法からの脱皮― | 69 | 46 | 吉本　昭二　他 |
| 眼底検査と血圧・心電図所見 | 69 | 46 | 中島　良一　他 |
| 心電図負荷試験について（続き） | 69 | 46 | 佐藤　　勲 |
| 注意すべき心電図の一例について | 69 | 46 | 佐藤　　勲　他 |
| 保険診査にみられた心雑音について | 69 | 46 | 佐野　　勲　他 |
| 保険診査における指先容積脈波の応用（第１報） | 69 | 46 | 佐野　松雄 |
| 保険診査にみられた心電図所見と生命予後並びに心電図検査の有用性について | 69 | 46 | 安藤　博章　他 |
| 心および脈博異常の予後について | 69 | 46 | 勝田　昌俊 |
| 有・無診別死亡状況の比較 | 69 | 46 | 館野　　豊　他 |
| 生存調査の予後調査について（第１報） | 69 | 46 | 酒井　正七 |
| 災害事故統計補遺―職業別発生状況を中心に― | 69 | 46 | 塚本　　宏　他 |
| 保険診査で発見された大動脈瘤について | 70 | 47 | 佐藤　　勲　他 |
| 心筋梗塞をおこした一例について | 70 | 47 | 佐藤　　勲　他 |
| 注意すべき心電図の一例について | 70 | 47 | 佐藤　　勲　他 |
| 心電図負荷試験について（続き） | 70 | 47 | 佐藤　　勲 |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|
| 多変量解析の危険選択への応用 | 70 | 昭和47年 | 安藤　博章　他 |
| 標準体の長期生命予後 | 70 | 47 | 安藤　博章 |
| 眼底検査実施後の死亡例についての検討 | 70 | 47 | 陸田　　博　他 |
| 生命表の死亡率に関する一研究 | 70 | 47 | 新井　敬三 |
| 赤外カラーフィルムを応用した眼底写真 | 70 | 47 | 会場　清悦　他 |
| 尿中降圧剤検査結果について | 70 | 47 | 勝田　昌俊 |
| 保険診査における指先容積脈波の応用（第２報） | 70 | 47 | 佐野　松雄 |
| 高額診査におけるＸ線の選択効果 | 70 | 47 | 山本　勝郎　他 |
| 咀嚼と体格（中年後の体格と健康の研究　終報） | 70 | 47 | 友成　淑夫　他 |
| 標準下体契約査定法の一試案 | 71 | 48 | 山田　　郁 |
| 生命表の死亡率に関する一研究（続報） | 71 | 48 | 新井　敬三 |
| 癌患者の指紋（指紋と体質との連関　第３報） | 71 | 48 | 友成　淑夫 |
| 容積脈波の保険医学的考察 | 71 | 48 | 酒匂　三彦　他 |
| 急性心臓死について | 71 | 48 | 小原　　護 |
| 肺外科手術の予後―肺結核を中心として― | 71 | 48 | 浅井　末得　他 |
| 糖尿および蛋白尿の予後について | 71 | 48 | 川崎　道明　他 |
| 当社における廃疾請求契約の予後調査結果 | 71 | 48 | 三原　　通　他 |
| 職業別死亡統計<br>１．職業別有診査標準体死亡状況 | 72 | 49 | 安藤　博章　他 |
| ２．職業別有診査標準死因別死亡状況 | 72 | 49 | 安藤　博章　他 |
| 高血圧欠陥の死亡指数予測―重回帰分析の応用― | 72 | 49 | 塚本　　宏 |
| 高血圧の予後―特に高度高血圧について― | 72 | 49 | 太田　一夫　他 |
| 診査と集団検診の経験―特に糖尿陽性者について― | 72 | 49 | 前沢　　貢　他 |
| 神奈川県某町における高血圧の集団検診について（第２報） | 72 | 49 | 宮路　行雄　他 |
| 生命保険診査時家族性にみられた心電図の異常例について | 72 | 49 | 松山　菊雄　他 |
| 心電図に関する統計的観察（第１報）心電図からみた軸偏位，特に左軸偏位について | 72 | 49 | 竹内亥子雄　他 |
| 復活処理契約及び延長保険変更処理契約の死亡状況について | 72 | 49 | 渡辺　忠夫 |
| 欠陥研究の基礎表と死亡指数について | 72 | 49 | 上野　　武 |
| 無診査保険死亡率についての私見 | 72 | 49 | 佐野　松雄 |
| 早期死亡例における肝疾患について | 72 | 49 | 川崎　輝治　他 |
| 欠陥別死亡指数の推定に関する試み | 72 | 49 | 新井　敬三 |
| 診査医別にみた危険選択の効果 | 73 | 50 | 安藤　博章 |
| 死因からみた被保険者の死亡状況 | 73 | 50 | 安藤　博章 |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|
| いわゆる無診査契約の理論的限度について | 73 | 昭和50年 | 渡辺　宏延 |
| 国民死亡率の将来予測について―漸近回帰分析の応用― | 73 | 50 | 塚本　　宏 |
| 内部標準法による分子分析 | 73 | 50 | 岡本　　浩 |
| 農協共済経験生命表について―標準体死亡率に関する若干の検討― | 73 | 50 | 井上喜美雄　他 |
| 決定前生存調査に関する一考察―指示による生調について― | 73 | 50 | 宮尾　淳平　他 |
| 診査の集団検診の経験（その２）―特に胃疾患を中心として― | 73 | 50 | 前沢　　貢　他 |
| 心電図に関する統計的観察（第２報）―心拍数及び年齢よりみた邦人男性のPQ値― | 73 | 50 | 竹内亥子雄 |
| 愛知県における血圧の統計的研究 | 73 | 50 | 杉田　　啓 |
| 肥満体と尿酸値 | 73 | 50 | 広瀬　元久　他 |
| 生命予後研究における死亡率比，基礎表死亡率について | 73 | 50 | 安藤　博章 |
| 契約不成立となった軽度標準下体の生命予後 | 73 | 50 | 安藤　博章 |
| 開腹手術の発生状況とくにその頻度について | 73 | 50 | 有澤　　誠　他 |
| 経営者層の寿命調査について | 73 | 50 | 三原　　通　他 |
| 疾病の再発率と危険選択―臨床統計より― | 74 | 51 | 岡本　　浩 |
| 「いわゆる白ろう病」（振動病）と難聴 | 74 | 51 | 八木　幹忠　他 |
| 特定疾病入院特約の入院事故分析について | 74 | 51 | 井上喜美雄　他 |
| 心電図に関する統計的観察（第３報）―心拍数及び年齢よりみた邦人女性のPQ値― | 74 | 51 | 竹内亥子雄 |
| 眼底カメラ診断能の一つの試み―反転眼底写真について― | 74 | 51 | 井樋　雄一 |
| 診査と集団検診の経験（その３）―特に肝疾患を中心として― | 74 | 51 | 前沢　　貢　他 |
| 米国医師の死亡状況について | 74 | 51 | 中村　善保 |
| 職業間の死亡率格差と年次変化 | 74 | 51 | 塚本　　宏　他 |
| 胃・十二指腸の死亡状況給付発生状況よりみた一考察 | 74 | 51 | 尼子　隆士 |
| 当社における肝疾患による早期死亡例についての考察 | 74 | 51 | 佐々木芳二　他 |
| 近年のわが国の脳血管疾患死亡率の分析 | 74 | 51 | 斎藤　弘吉 |
| 危険選択に対する若干の考察 | 74 | 51 | 安藤　博章 |
| 告知出現率に関する一考察 | 75 | 52 | 館野　　豊　他 |
| 疾病保険の危険選択に関する若干の考察 | 75 | 52 | 若林　伸夫　他 |
| 世界各国の医療保障制度と私的健康保険 | 75 | 52 | 藤原　敬男 |
| 契約選択事務の機械化 | 75 | 52 | 安藤　博章 |
| 診査における血圧値の検定 | 75 | 52 | 岡本　　浩 |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|
| 診査と集団検診の経験（その４）—とくに虚血性心疾患を中心として— | 75 | 昭和52年 | 前沢　貢　他 |
| 標準下体再保険契約の死亡経験 | 75 | 52 | 山田　郁　他 |
| 心電図に関する統計的観察（第４報）—同一人の反復採取心電図の比較— | 75 | 52 | 竹内亥子雄 |
| 早期死亡の時系列分析—関門効果試論— | 75 | 52 | 佐野　松雄 |
| 検定調査士による健康調査の危険選択について | 75 | 52 | 松村　亮逸　他 |
| 無散瞳広角眼底カメラ使用経験 | 75 | 52 | 三原　通　他 |
| 糖尿病眼底検査の生命保険向き分類（試案） | 75 | 52 | 陸田　博 |
| 生命保険診査を目的とした聴診器の改良について | 75 | 52 | 斉藤　弘吉　他 |
| 診査と心エコー図法（UCG） | 75 | 52 | 高橋　寧　他 |
| 職業別災害入院率について | 75 | 52 | 堀　司郎　他 |
| 眼底カメラ診断能への一つの試み—体位変換時の眼底写真について— | 76 | 53 | 井樋　雄一　他 |
| 心電図に関する統計的観察“T waves”（第５報） | 76 | 53 | 竹内亥子雄 |
| 心電図ST分節の研究—名越らによる安静時心電図より運動負荷成績を推測する方法の一変法— | 76 | 53 | 上野　武　他 |
| 生物学的年齢の推定 | 76 | 53 | 吉川　博通　他 |
| 診査と集団検診の経験（その５）—とくに尿路疾患を中心として— | 76 | 53 | 前沢　貢　他 |
| 千葉県の一地区における破傷風と糖尿病について（第一報） | 76 | 53 | 藤代　国夫　他 |
| 体格と死亡率および血圧分布について | 76 | 53 | 高橋　静　他 |
| 最近10年間における当社の個別代用診査扱早期死亡について | 76 | 53 | 木下　和之　他 |
| 疾病保険のその後の問題点 | 76 | 53 | 宮永　忠夫　他 |
| 人工臓器・臓器移植の発達が生命保険事業に及ぼす影響 | 76 | 53 | 藤原　敬男 |
| 疾病入院率と体格との関係について | 76 | 53 | 塚本　宏　他 |
| 死差益に関係ある問題点について意志決定する時の一つの理論的アプローチ—特に生存調査率を中心に— | 76 | 53 | 安藤　博章 |
| 医学的危険選択と情報理論および決定理論 | 76 | 53 | 佐野　松雄 |
| 米国の医療制度と医療保障—私的健康保険の役割と将来— | 76 | 53 | 藤原　敬男 |
| 保険診査の危険選択メカニズムと効果の限界 | 77 | 54 | 安藤　博章 |
| ボーダーラインリスクと標準体における危険度別死亡状況 | 77 | 54 | 安藤　博章 |
| 往診時Ｐ波陰性と誤認された１例について | 77 | 54 | 岡本　政彦 |
| 疾病保険続報—標準下体の経験— | 77 | 54 | 川本　久　他 |
| Basic Programの死亡統計への応用（その１）区間推定など | 77 | 54 | 川本　久 |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|
| 心電図に関する統計的観察（第6報）生命保険加入希望者群と職域集団群にみられた心電図所見比較—特に正常心電図，伝導障害，心負担の頻度について— | 77 | 昭和54年 | 竹内亥子雄 |
| 血圧と体格（身長）について | 77 | 54 | 本間　廣 |
| 診査と集団検診の経験（その6）—とくに心身症，精神疾患を中心に— | 77 | 54 | 前澤　貢　他 |
| 標準下体保険の疾病入院率について | 77 | 54 | 塚本　宏　他 |
| 疾病保険リスクの特性について | 77 | 54 | 藤原　敬男 |
| 診査区分別死亡率について | 77 | 54 | 上野　武 |
| ワイブル（Weibull）分布よりながめた生命表の死亡率について | 77 | 54 | 新井　敬三 |
| 疾病による早期入院事故分析について | 77 | 54 | 井上喜美雄　他 |
| 国民死亡とその死因—'75年，西ドイツ・デンマーク・日本— | 77 | 54 | 藤原　敬男 |
| 保険診査時における手術痕について | 77 | 54 | 北村　辰郎　他 |
| 地方病院に於ける入院状況と疾病特約給付状況との比較観察について | 77 | 54 | 橋本　淑郎 |
| 嘱託医診査の再診率について | 77 | 54 | 吉江幹之助 |
| 死亡指数を基礎とした疾病指数の算出 | 77 | 54 | 岡本　浩 |
| 死因別死亡率の推移とその観察の手法について | 78 | 55 | 川本　久 |
| 当社の欠陥研究—標準下体4分の1世紀の経験— | 78 | 55 | 川本　久 |
| 先天異常の発生率と死亡率—わが国の現状と国際比較— | 78 | 55 | 小原　護　他 |
| Basic Program死亡統計への応用（その2）検定など | 78 | 55 | 川本　久 |
| 心電図に関する統計的観察（第7報）—Q-T及び心拍数からみたその補正値Q-Tc— | 78 | 55 | 竹内亥子雄 |
| 来社診査時における肝触診の実際 | 78 | 55 | 慶居豹一郎　他 |
| 集団検診の血圧値・眼底・心電図所見，10年間の推移 | 78 | 55 | 上野　武 |
| 血圧と体格（肥満）について | 78 | 55 | 本間　廣 |
| 当社における婦人特定疾病入院特約の経験について | 78 | 55 | 岩田　汎夫 |
| 職業からみた災害入院率と疾病入院率の関係について | 78 | 55 | 塚本　宏　他 |
| 悪性新生物患者の死亡率—高度欠陥体の新研究法— | 78 | 55 | 岡本　浩 |
| 欠陥と疾病発生率 | 78 | 55 | 岡本　浩 |
| 疾病保険の入院率について | 78 | 55 | 木下　和之　他 |
| 生命保険事業におけるモラルリスク | 78 | 55 | 藤原　敬男　他 |
| 明治生命保険会社100年の経験死亡 | 79 | 56 | 井野　達　他（明治生命） |
| 標準下体再保険契約の死亡経験 | 79 | 56 | 山田　郁　他（協栄生命） |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　名（所属） |
|---|---|---|---|
| 標準体再保険契約死亡経験 | 79 | 昭和56年 | 山田　　郁　他<br>（協栄生命） |
| 循環器疾患の予後 | 79 | 56 | 岡本　　浩　他<br>（三井生命） |
| 最近の手術給付，その実態と傾向 | 79 | 56 | 北村　辰郎<br>（住友生命） |
| 農協生命共済における災害事故の統計的研究 | 79 | 56 | 三好　久視　他<br>（全国共済農業協同組合連合会） |
| 尿糖陽性者の眼底所見について | 79 | 56 | 杉田　　啓　他<br>（第一生命） |
| 当社における眼底検査の実施状況 | 79 | 56 | 勝田　昌俊　他<br>（住友生命） |
| 心電図に関する統計的観察—P-Q，及び心拍60としたときのその補正値P-$Q_c$（第８報）— | 79 | 56 | 竹内亥子雄<br>（千代田生命） |
| 当社における心電図所見の死亡状況—特に左室肥大・STおよびT異常・軸変位左と高血圧・尿糖陽性について— | 79 | 56 | 内野　隆平<br>（住友生命） |
| 誤誘導心電図判読のためのマニュアル | 79 | 56 | 佐野　松雄<br>（朝日生命） |
| 数字査定法と主欠陥主義 | 79 | 56 | 安藤　博章<br>（日本生命） |
| 危険の分類と情報の収集 | 79 | 56 | 安藤　博章<br>（日本生命） |
| 診査と集団検診の経験（その７）—特に肝疾患多発家系を中心として— | 79 | 56 | 前澤　　貢　他<br>（東邦生命） |
| 身長・胸囲・腹囲よりみた体重推進についての一考察 | 79 | 56 | 栃原　廣之　他<br>（第一生命） |
| 血圧分布曲線について—序論— | 79 | 56 | 佐野　松雄<br>（朝日生命） |
| BASIC PROGRAMの死亡統計への応用（その３）—F分布データファイルの利用と補遺— | 79 | 56 | 川本　　久<br>（日本生命） |
| 死亡の特殊形態と生命保険—集団自殺・安楽死— | 79 | 56 | 藤原　敬男<br>（明治生命） |
| スウェーデンの医療保障制度と生命保険事業 | 79 | 56 | 藤原　敬男<br>（明治生命） |
| ボーダラインリスクの予後について | 80 | 57 | 吉江幹之助　他<br>（朝日生命） |
| 当社の金額別経験死亡率について | 80 | 57 | 井野　　達　他<br>（明治生命） |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　名（所属） |
|---|---|---|---|
| 農協生命共済における自殺死亡統計について | 80 | 昭和57年 | 三好　久視　他<br>（全国共済農業協同組合連合会） |
| 死亡率・死亡指数の「区間推定表」と「検定表」<br>Ⅰ「区間推定表」 | 80 | 57 | 川本　　久<br>（日本生命） |
| 内部標準としての悪性新生物 | 80 | 57 | 岡本　　浩<br>（三井生命） |
| 生命保険における障害給付 | 80 | 57 | 藤原　敬男<br>（明治生命） |
| 心電図に関する統計的観察（第９報）―前頭面QRS電気軸の経年変遷― | 80 | 57 | 竹内亥子雄<br>（千代田生命） |
| 眼底検査実施契約の死亡率について | 80 | 57 | 上野　　武　他<br>（第一生命） |
| 尿ウロビリノーゲン検査の診断的価値とその考察 | 80 | 57 | 吉川　博通　他<br>（住友生命総合健診システム） |
| 先天性心臓疾患の保険可能性 | 80 | 57 | 小原　　護　他<br>（明治生命） |
| 当社疾病保険標準下体入院発生について（第一報） | 81 | 58 | 安藤　博章　他<br>（日本生命） |
| 診査区分よりみた疾病・成人病特約の給付状況について | 81 | 58 | 田中　成美　他<br>（第一生命） |
| 明治生命の手術給付経験発生率について | 81 | 58 | 吉原　信良　他<br>（明治生命） |
| 超標準下体死亡率契約―出再の基礎資料として― | 81 | 58 | 岡本　　浩　他<br>（三井生命） |
| 保険金請求書（死亡診断書）にみる主要悪性新生物について | 81 | 58 | 北村　辰郎　他<br>（住友生命） |
| 診査と集団検診の経験（その８）―職域並びにドックにおける胃精検管理についての検討― | 81 | 58 | 前澤　　貢　他<br>（東邦生命） |
| 昭和56年度の嘱託医を中心とした報状内容の検討に関する考察 | 81 | 58 | 鈴木　満江　他<br>（第一生命） |
| 心電図に関する統計的観察（第10報）―胸部誘導，特に$V_1$ $V_5$に重点を指向して― | 81 | 58 | 竹内亥子雄<br>（千代田生命） |
| 書式から見た西ドイツ・イギリスの生命保険加入時の医学的危険選択 | 81 | 58 | 宗内　　弘　他<br>（明治生命） |
| 肢切断および脊髄損傷による肢体不自由者の各種予後 | 81 | 58 | 藤原　敬男<br>（明治生命） |
| 国民死亡に於ける死因構造の将来予測<br>(1)　最近７年間の国民死亡率および受療率の年次推移分析 | 81 | 58 | 神前　　格　他<br>（朝日生命） |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　名（所属） |
|---|---|---|---|
| 喫煙に関する保険医学的考察 | 82 | 昭和59年 | 盛田　正行<br>（日本生命） |
| 悪性新生物の職業別死亡率の検討 | 82 | 59 | 鈴木　一年　他<br>（明治生命） |
| 診査と集団検診の経験（その９）―胃検診における胃癌早期発見の試み（特に胃潰瘍瘢痕を中心として）― | 82 | 59 | 前澤　　貢　他<br>（東邦生命） |
| 心電図に関する統計的観察―心房粗細動（第11報）― | 82 | 59 | 竹内亥子雄<br>（千代田生命） |
| 腹部超音波検査について | 82 | 59 | 河野　　雄<br>（住友生命） |
| 心臓外科手術契約の検討 | 82 | 59 | 赤澤　敏光<br>（日本生命） |
| 糖尿・糖尿病欠陥の実験的査定について―その考え方を中心にして― | 82 | 59 | 中原　義行　他<br>（第一生命） |
| 当社の高度欠陥体の契約状況について | 82 | 59 | 新開　健司<br>（日本生命） |
| 回帰分析による死亡指数予測の検討 | 82 | 59 | 緒方　裕光　他<br>（協栄生命） |
| コンピュータの医務査定業務への応用について | 82 | 59 | 渡辺　　毅　他<br>（協栄生命） |
| 死亡指数曲線の特徴―高年齢者の選択効果― | 82 | 59 | 岡本　　浩　他<br>（三井生命） |
| わが国の高齢者の死亡率と死因 | 82 | 59 | 藤原　敬男<br>（明治生命） |
| 検定調査士扱の経験死亡について | 82 | 59 | 清水　　享　他<br>（安田生命） |
| わが社の検定調査士扱の死亡 | 82 | 59 | 丹羽　吉郎<br>（千代田生命） |
| 検定調査士の保険事故発生率 | 82 | 59 | 藤田　温彦<br>（明治生命） |
| 選任嘱託医の経験発生率と診査成績の比較検討 | 82 | 59 | 叶多　則之　他<br>（明治生命） |
| 欠陥発見率から見た報状内容の検討 | 82 | 59 | 田村　慶三　他<br>（第一生命） |
| 西ドイツに於ける医療保険の実情と我国健保改革の可否について | 82 | 59 | 立澤　　惇<br>（大同生命） |
| 最近の給付金請求書にみる帝王切開娩出術について | 82 | 59 | 日置　　博　他<br>（住友生命） |
| 当社における入院発生状況―職業を中心として― | 82 | 59 | 鈴木　守和　他<br>（朝日生命） |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　名（所属） |
|---|---|---|---|
| 当社の標準下体契約の疾病入院率について | 82 | 昭和59年 | 吉原　信良<br>（明治生命） |
| 当社疾病保険標準下体入院発生について（第二報） | 82 | 59 | 安藤　博章　他<br>（日本生命） |
| 検定調査の告知内容について | 83 | 60 | 佐久間幸一　他<br>（富国生命） |
| 検定調査士の選択効果について―死亡率と欠陥発現率の解析を通して | 83 | 60 | 田村　　誠　他<br>（明治生命） |
| 当社検定調査士扱いにおける告知義務違反について | 83 | 60 | 西殿　之彦　他<br>（三井生命） |
| 都道府県別の肝硬変死亡率とアルコール消費量の関連 | 83 | 60 | 三河　一夫　他<br>（大同生命） |
| 肝硬変死亡率（男子）の年次推移について | 83 | 60 | 豊川　秀治　他<br>（明治生命） |
| 「肝硬変の死亡率，入院発生率の検討」（昭和55～57観察年度）および前回統計時の死亡率との比較検討について | 83 | 60 | 服部　　功<br>（日本生命） |
| 日本における自殺の傾向について | 83 | 60 | 中原　義行　他<br>（第一生命） |
| 発生経験からみた自殺死亡について | 83 | 60 | 吉原　信良　他<br>（明治生命） |
| 血液検査の保険診査への導入（第一報）―導入に関する諸問題の解決についての経験― | 83 | 60 | 安藤　博章　他<br>（日本生命） |
| 保険加入者の検尿成績―尿中ナトリウム測定の保険医学的価値に関するパイロットスタディ― | 83 | 60 | 貞本　晃一　他<br>（明治生命） |
| 診査と集団検診の経験（その10）―大腸腫瘍症例について― | 83 | 60 | 前澤　　貢　他<br>（東邦生命） |
| 丹治指数の再検討と体格基準について | 83 | 60 | 白水　知仁<br>（日本生命） |
| 両眼失明による高度障害保険金支払に関する一提案 | 83 | 60 | 小西　克彦<br>（日本生命） |
| 嘱託医の診査内容統計について―診査件数別・年齢別比較― | 83 | 60 | 山岡　誠二　他<br>（住友生命） |
| 衆議院議員の寿命調査 | 83 | 60 | 小野　陽二　他<br>（明治生命） |
| 標準下体再保険契約の死亡率調査 | 83 | 60 | 山田　　郁　他<br>（協栄生命） |
| 当社における高血圧欠陥体の死亡経験について | 83 | 60 | 吉江幹之助　他<br>（朝日生命） |
| 糖尿欠陥の死亡状況，入院発生状況の検討（昭和55～57観察年度）および前回統計時死亡率との比較検討について | 83 | 60 | 村山　正道<br>（日本生命） |
| 精神障害入院の経験 | 83 | 60 | 佐藤　幸一　他<br>（明治生命） |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　名（所属） |
|---|---|---|---|
| 最近における我が社の短期死亡例についての検討 | 83 | 昭和60年 | 崎谷　寿子　他<br>（千代田生命） |
| 職業別死亡率と被保険者集団 | 83 | 60 | 鈴木　守和<br>（朝日生命） |
| 標準体死亡率の地域差について | 83 | 60 | 上野　　武　他<br>（第一生命） |
| 診査機関別にみた選択効果について―10年比較― | 83 | 60 | 尾曾越俊彦　他<br>（日本生命） |
| 検定調査士扱の早期死亡について | 83 | 60 | 石山　　明　他<br>（住友生命） |
| 血液検査の保険診査への導入（第二報）―血液検査導入後，短期間の観察について― | 83 | 60 | 安藤　博章　他<br>（日本生命） |
| 人間ドック受診者における耐糖能異常と肝機能障害の関連について | 83 | 60 | 正寿　康雄　他<br>（住友生命） |
| 人工ペースメーカー装着者に対する危険選択 | 83 | 60 | 立澤　　惇<br>（大同生命） |
| 診査機関のシステム管理について | 84 | 61 | 安達　眞樹<br>（日本生命）） |
| 死亡率と医学的要因発見率の関係について―考察―診査事故データを中心として― | 84 | 61 | 田村　慶三　他<br>（第一生命） |
| 診査報状に関する意識調査―嘱託医について― | 84 | 61 | 岡本　　浩　他<br>（三井生命） |
| 人間ドック受診者における肝機能障害，耐糖能異常，肥満との関係について | 84 | 61 | 正寿　康雄　他<br>（住友生命） |
| 眼底所見による死亡率の検討 | 84 | 61 | 森田　周一　他<br>（第一生命） |
| 当社既給付における大血管手術の発生および予後について | 84 | 61 | 鈴木　守和　他<br>（朝日生命） |
| 生命保険被保険者の不慮の事故死の検討 | 84 | 61 | 薙野　久法　他<br>（明治生命） |
| 精神科系条件体の死亡例についての検討 | 84 | 61 | 杉本　健蔵<br>（日本生命） |
| 眼底所見による疾病入院の給付率について | 84 | 61 | 田村　慶三　他<br>（第一生命） |
| 災害関係特約の給付率について | 84 | 61 | 清家　克哉　他<br>（第一生命） |
| 入院証明書診断名への悪性新生物の混入について | 84 | 61 | 坂下　哲朗　他<br>（日本生命） |
| 年齢階級別主要死因別最低死亡率による生命表 | 84 | 61 | 豊川　秀治<br>（明治生命） |
| 当社区分別死亡統計について | 84 | 61 | 山岡　誠二　他<br>（住友生命） |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　名（所属） |
|---|---|---|---|
| 診査における腹部超音波検査導入の可能性についての一考察 | 84 | 昭和61年 | 磯浪　　亘<br>（日本生命） |
| 糖尿，糖尿病欠陥に関する実験的査定の死亡率について | 84 | 61 | 伊東　直文　他<br>（第一生命） |
| 体格分布と体格に影響を及ぼす諸要因について | 84 | 61 | 田村　　誠　他<br>（明治生命） |
| 標準体再保険契約の死亡率調査 | 84 | 61 | 長内　孝文　他<br>（協栄生命） |
| 医師（含歯科医師）および，その家族，医療関係者の死亡，入院給付発生について | 84 | 61 | 大石　　浩　他<br>（日本生命） |
| 日本人の職業別寿命調査―内閣閣僚― | 84 | 61 | 小野　陽二　他<br>（明治生命） |
| 昭和59観察年度における肝硬変の短期死亡例について | 84 | 61 | 小山田敬司<br>（日本生命） |
| 当社手術給付における心臓手術の発生および予後について | 84 | 61 | 平野　　信　他<br>（朝日生命） |
| 農協生命共済における自殺死亡統計について | 84 | 61 | 三好　久視　他<br>（全国共済農業協同組合連合会） |
| 血圧と疾病入院発生状況の検討 | 84 | 61 | 渡辺　孝之　他<br>（明治生命） |
| 人間ドック受診者10年後の血圧に関する検討 | 85 | 62 | 正寿　康雄　他<br>（住友生命） |
| 腫瘍マーカーの現況と生命保険医学 | 85 | 62 | 真柄　俊一<br>（第一生命） |
| 尿の腫瘍マーカー診査導入の検討―当社60年度早期死亡例を中心として― | 85 | 62 | 山田　　充　他<br>（三井生命） |
| 心電図所見と疾病入院発生率および死亡率についての検討 | 85 | 62 | 森田　周一　他<br>（第一生命） |
| 診査で発見された心房粗細動の検討 | 85 | 62 | 佐藤　幸一<br>（明治生命） |
| 「腰痛」の入院・死亡発生状況について | 85 | 62 | 中田　　勉<br>（日本生命） |
| 当社における標準体高額契約の死亡状況 | 85 | 62 | 山田　隆祥<br>（日本生命） |
| PMRを用いた保険契約者集団の死因解析 | 85 | 62 | 一言　正尚　他<br>（東邦生命） |
| 特別条件別許容死亡率と超高度欠陥体への応用について | 85 | 62 | 白水　知仁<br>（日本生命） |
| 生存率と死亡指数 | 85 | 62 | 岡本　　浩　他<br>（三井生命） |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　名（所属） |
|---|---|---|---|
| 日本人の体格の推移について | 85 | 昭和62年 | 薙野　久法　他<br>（明治生命） |
| 肥満度別身体データの4年間の追跡結果について―明治生命スタディー― | 85 | 62 | 江口　弘芳　他<br>（明治生命） |
| 節酒の肝機能及び脂質代謝に及ぼす影響 | 85 | 62 | 三河　一夫　他<br>（大同生命） |
| 当社の自殺死亡状況について | 85 | 62 | 出口　幸孝<br>（日本生命） |
| 当社標準下体契約の死亡・疾病入院発生状況について | 85 | 62 | 清家　克哉　他<br>（第一生命） |
| 当社における血圧異常による条件体の入院・死亡状況 | 85 | 62 | 松村　享吉<br>（日本生命） |
| 血圧と疾病入院発生状況の検討（第2報） | 85 | 62 | 渡辺　孝之<br>（明治生命） |
| 糖尿病―昭和59年請求分の当社入院給付 | 85 | 62 | 今泉　啓子　他<br>（朝日生命） |
| 嘱託医の診査成績と経験発生率の検討 | 85 | 62 | 叶多　則之　他<br>（明治生命） |
| 告知出現率に関する考察 | 85 | 62 | 高橋　茂樹　他<br>（安田生命） |
| 人間ドックによる選択 | 85 | 62 | 長野　有宏<br>（大同生命） |
| 昭和59年観察当社標準下体死亡統計 | 85 | 62 | 三宅　　誠<br>（住友生命） |
| 日本人の職業別寿命調査―第三報― | 85 | 62 | 小野　陽二　他<br>（明治生命） |
| 診査環境に関する一考察 | 85 | 62 | 佐々木光信　他<br>（千代田生命） |
| 血液検査の保険診査への導入（第3報）―糖尿・糖尿病について― | 86 | 63 | 種田　裕昭<br>（日本生命） |
| 血液検査の保険診査への導入(第4報)―肝疾患について― | 86 | 63 | 小林　　徹　他<br>（日本生命） |
| 当社における標準体契約の料率別死亡状況 | 86 | 63 | 登岐祥二郎<br>（日本生命） |
| 給付率統計から見た代用診査方式の問題点について | 86 | 63 | 今別府昭仁　他<br>（第一生命） |
| 死亡率統計からみた代用診査方式 | 86 | 63 | 小林三世治　他<br>（第一生命） |
| 多変量解析による診査データの分析(1)（胸囲と体重に関する重回帰分析） | 86 | 63 | 田中　穂積　他<br>（住友生命） |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　名（所属） |
|---|---|---|---|
| 標準下体再保険契約の死亡率調査 | 86 | 昭和63年 | 山田　郁　他<br>（協栄生命） |
| 当社手術給付における心臓手術の発生および予後について—第２報— | 86 | 63 | 鈴木　守和　他<br>（朝日生命） |
| 心電図所見よりみた当社死亡状況（その１）当社心電図所見別死亡状況 | 83 | 63 | 三宅　誠　他<br>（住友生命） |
| 心電図所見よりみた当社死亡状況（その２）心電図記録理由別死亡状況 | 86 | 63 | 三宅　誠　他 |
| 当社における心電図実施状況および入院・死亡状況 | 86 | 63 | 柳沢　研一　他<br>（日本生命） |
| 医別にみた血圧，尿検査の疾病入院給付率について | 86 | 63 | 秋元　康志　他<br>（第一生命） |
| 診査区分別にみた血圧の死亡率について | 86 | 63 | 神田　重治　他<br>（第一生命） |
| 新契約決定前の契約確認による診断書入手例の検討—特に胃手術例における悪性新生物の比率と特徴について— | 86 | 63 | 山岡　誠二<br>（住友生命） |
| 胃潰瘍既往症のある被保険者の生命予後について | 86 | 63 | 新開　健二<br>（日本生命） |
| 生活習慣を中心とした血圧影響因子の検討 | 86 | 63 | 白水　知仁<br>（日本生命） |
| 喫煙者における虚血性心疾患リスクファクターの検討—特に血液レオロジー因子の検討— | 86 | 63 | 渡辺　孝之　他<br>（明治生命） |
| 検査結果からみた成人病検診受診者の日常生活に対する心掛け | 86 | 63 | 三河　一夫　他<br>（大同生命） |
| 青年期体重を考慮した成人病に対する危険選択 | 86 | 63 | 松田　弘史　他<br>（千代田生命） |
| 国民の世代生命表について | 86 | 63 | 豊川　秀治<br>（明治生命） |
| 小児被保険者の入院発生状況について | 86 | 63 | 薙野　久法　他<br>（明治生命） |
| 血圧値別にみた疾病入院の給付率について | 86 | 63 | 柴田　和顕　他<br>（第一生命） |
| 糖尿・糖尿病要因の死亡率について—合併所見の観点より— | 86 | 63 | 平賀　誠三　他<br>（第一生命） |
| 血清アデノシンデアミナーゼ（ADA）—臨床的意義と保険医学における有用性について— | 86 | 63 | 真柄　俊一　他<br>（第一生命） |
| 給付歴よりみた告知の正当性について | 86 | 63 | 三宅　誠<br>（住友生命） |
| 基本的体況データの実測値と自覚値 | 86 | 63 | 佐野　史和<br>（明治生命） |
| 診査と集団検診の経験（その11）—メンタルヘルスについて— | 86 | 63 | 前澤　貢　他<br>（東邦生命） |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　名（所属） |
|---|---|---|---|
| 保険料率と新契約時診査内容状況 | 87 | 平成元年 | 田中　康則　他<br>（日本生命） |
| 新契約決定前の契約確認により診断書入手事例の検討（第二報）―子宮・甲状腺・腸・卵巣・肺・腎臓の手術例における悪性新生物の比率と特徴について― | 87 | 元 | 山岡　誠二<br>（住友生命） |
| 多変量解析による診査データの分析(2)―クラスター分析による体形分類― | 87 | 元 | 田中　穂積　他<br>（住友生命） |
| 血液検査と報状内容の検討 | 87 | 元 | 上村　卓良　他<br>（第一生命） |
| 危険選択における腫瘍マーカーの導入の経験―CEA，AFPについて― | 87 | 元 | 佐々木光信　他<br>（千代田生命） |
| 最近20年間の40歳からの寿命の延びと成人病死の推移 | 87 | 元 | 村田　春枝<br>（明治生命） |
| エキスパートシステムの査定業務への応用―問題点と効果― | 87 | 元 | 佐々木光信　他<br>（千代田生命） |
| 医務査定支援エキスパートシステムの構築について | 87 | 元 | 渡邉　　毅　他<br>（協栄生命） |
| 常習喫煙者におけるヘモグロビン$A_{1c}$について | 87 | 元 | 渡辺　孝之　他<br>（協栄生命） |
| 常習喫煙者におけるヘモグロビン$A_{1c}$について | 87 | 元 | 渡辺　孝之　他<br>（明治生命） |
| 喫煙と社内定期健康診断における身体測定・検査結果との関係についての考察 | 87 | 元 | 三好　裕司　他<br>（明治生命） |
| 成人病検診時の血圧と喫煙習慣の関係 | 87 | 元 | 三河　一夫　他<br>（大同生命） |
| 飲酒・喫煙・肥満・高血圧と心電図虚血所見出現率 | 87 | 元 | 白水　知仁　他<br>（日本生命） |
| 最近の10年間の死亡率統計 | 87 | 元 | 井上　公俊　他<br>（第一生命） |
| 死亡率統計から見た体格・血圧・尿糖の関係 | 87 | 元 | 高松　芳郎　他<br>（第一生命） |
| 当社標準体契約における商品別死亡状況 | 87 | 元 | 稲葉　　繁<br>（日本生命） |
| 心疾患における死亡ならびに入院動向について | 87 | 元 | 佐藤　幸一<br>（明治生命） |
| 生命保険面接士の面接状況と死亡及び入院の発生の関係について | 87 | 元 | 佐野　史和<br>（明治生命） |
| 身体障害者の保険事故発生状況 | 87 | 元 | 照島　雅之　他<br>（日本生命） |
| 最近10年間の疾病入院給付率統計 | 87 | 元 | 山本　　勝　他<br>（第一生命） |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　名（所属） |
|---|---|---|---|
| 早期死亡の検討―昭和60年度の新契約について | 87 | 平成元年 | 野海　守寿　他<br>（第一生命） |
| 早期死亡からみた代用診査 | 87 | 元 | 嘉藤田　進　他<br>（安田生命） |
| 転換契約と非転換契約の早期死亡状況 | 87 | 元 | 金子　　均　他<br>（日本生命） |
| 当社62年度生命保険面接士扱非保険体相当例の集計 | 87 | 元 | 岡本　　浩　他<br>（三井生命） |
| 新しい心電計システムの考え方 | 87 | 元 | 小林三世治　他<br>（第一生命） |
| 生命保険職域での産業医活動と精神衛生 | 87 | 元 | 伊藤　直樹　他<br>（明治生命） |
| 当社における早期死亡の統計的分析 | 87 | 元 | 赤堀　俊也　他<br>（朝日生命） |
| 自殺未遂者の生命保険加入状況について―救命救急センターからの報告― | 87 | 元 | 黒沢　　尚<br>（日本医科大学） |
| 当社条件体契約における選択方法別死亡状況 | 88 | 2 | 脇　　耕二　他<br>（日本生命） |
| 払込み方法別当社死亡指数 | 88 | 2 | 小松　裕司　他<br>（住友生命） |
| 診査区分と死亡原因から見た転換契約と非転換契約について | 88 | 2 | 北島　武志　他<br>（第一生命） |
| 健康管理証明団体の新契約処理状況と経験発生率 | 88 | 2 | 佐野　史和<br>（明治生命） |
| 最近10年間の当社死亡率と国民死亡率との比較 | 88 | 2 | 藤本　　博　他<br>（第一生命） |
| 診査医扱告知書回答の検討 | 88 | 2 | 日野　智雄<br>（日本生命） |
| 当社における心電図所見と入院死亡状況 | 88 | 2 | 古賀伸一郎<br>（明治生命） |
| 手術給付後の死亡指数 | 88 | 2 | 上坂　邦夫　他<br>（日本生命） |
| 査定支援システムについて | 88 | 2 | 伊東　直文　他<br>（第一生命） |
| 単身赴任の健康に及ぼす影響について | 88 | 2 | 由本　光次　他<br>（明治生命） |
| 死因構造と疾病構造のダイナミスム―３大成人病，最近12年間の検討― | 88 | 2 | 村田　春枝<br>（明治生命） |
| 喫煙と体重―年代毎の喫煙量と体重との関係― | 88 | 2 | 三好　裕司　他<br>（明治生命） |
| 血清カルシウム及び尿中カルシウムと血圧の関連―飲酒者を対象とした検討― | 88 | 2 | 三河　一夫　他<br>（大同生命） |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　名（所属） |
|---|---|---|---|
| 心電図虚血所見の検討 | 88 | 平成２年 | 佐藤　幸一<br>（明治生命） |
| 腕・指デジタル血圧計による測定結果の比較検討 | 88 | 2 | 鈴木　啓之<br>（第一生命） |
| ドーピング検査と生命保険医学 | 88 | 2 | 塚越　　茂　他<br>（三井生命） |
| フルクトサミンの危険選択における意義 | 88 | 2 | 前田　　優　他<br>（第一生命） |
| 当社における腫瘍マーカーの検討―CEA，AFP，CA19-9について― | 88 | 2 | 志田　則夫　他<br>（日本生命） |
| 長期疾病入院の考察 | 88 | 2 | 宮副　一郎<br>（安田生命） |
| 疾病の予後に関する研究 | 88 | 2 | 山田　　充　他<br>（三井生命） |
| 入院継続率について | 88 | 2 | 佐々木光信　他<br>（千代田生命） |
| 自殺未遂者の生命保険の加入状況について | 88 | 2 | 岩崎　康孝　他<br>（日本医科大学） |
| 保険診査における指血圧計の使用経験 | 88 | 2 | 小原甲一郎　他<br>（千代田生命） |
| 当社１年間の高度視力障害保険金支払例についての検討 | 89 | 3 | 神田　重治　他<br>（第一生命） |
| 当社条件体の死亡状況について（Ⅰ）―神経系，呼吸器系，内分泌系疾患等― | 89 | 3 | 福島　正昭<br>（日本生命） |
| 当社条件体の死亡状況について（Ⅱ）―循環器系，消化器系，泌尿器系疾患等― | 89 | 3 | 皆川　伸幸<br>（日本生命） |
| 経験死亡率の将来予測について | 89 | 3 | 牧野　弘志<br>（第百生命） |
| 疾病入院給付からみた健康管理証明書扱い | 89 | 3 | 高山　　学　他<br>（安田生命） |
| 嘱託医・面接士・健康管理証明書扱いの地域別死亡指数について | 89 | 3 | 二ノ宮秀夫　他<br>（第一生命） |
| 胸囲及び腹囲と欠陥発現率及び経験発生率との関係について | 89 | 3 | 伊藤　直樹　他<br>（明治生命） |
| 当社の体格別死亡指数 | 89 | 3 | 清水　功基　他<br>（住友生命） |
| 指と上腕の血圧差と他因子との関連 | 89 | 3 | 鈴木　啓之　他<br>（第一生命） |
| 尿中電解質排泄量と節酒による降圧効果との関連 | 89 | 3 | 三河　一夫<br>（大同生命）<br>上島　弘嗣<br>（滋賀医科大学） |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　名（所属） |
|---|---|---|---|
| 地域別にみた当社血圧値別死亡統計について | 89 | 平成３年 | 牟田口成也　他<br>（住友生命） |
| 高血圧条件体の死亡状況 | 89 | 3 | 武藤　　敦<br>（日本生命） |
| 心電図心肥大所見の検討 | 89 | 3 | 佐藤　幸一<br>（明治生命） |
| 心電図誘導について | 89 | 3 | 塚越　　茂　他<br>（三井生命） |
| 診査有無別の疾病入院発生状況について | 89 | 3 | 高山　　実<br>（日本生命） |
| 当社における最近の疾病入院給付状況について | 89 | 3 | 由本　光次<br>（明治生命） |
| 条件体体格別死亡指数 | 90 | 4 | 林　　康嗣<br>（日本生命） |
| 医学的選択から見た告知身長・体重の信頼性 | 90 | 4 | 箭野　文秀　他<br>（第一生命） |
| 肥満度と臨床検査値異常出現率 | 90 | 4 | 五島良太郎　他<br>（住友生命） |
| デジタル体脂肪測定器ファートレックスBFT 1000の使用経験 | 90 | 4 | 高島　宏幸　他<br>（千代田生命） |
| 地方別にみた選択方法及び死因別死亡指数について | 90 | 4 | 岡島　和弘<br>（日本生命） |
| 当社における医学的要因の経年変化 | 90 | 4 | 谷藤　　匠　他<br>（第一生命） |
| 面接士の選択効果に関する一考察 | 90 | 4 | 圓谷　徹彦<br>（千代田生命） |
| 累積統計の盲点―増加する面接士扱と減少する嘱託医扱死亡指数の比較― | 90 | 4 | 粟田　正樹<br>（日本生命） |
| 告知書改訂に伴う告知発現率の変化について | 90 | 4 | 由本　光次<br>（明治生命） |
| ポケット型心電図モニターの応用について―双極誘導心電図と12誘導心電図― | 90 | 4 | 塚越　　茂　他<br>（三井生命） |
| 生命保険医学的にみた心電図自動判定と可視判定の比較 | 90 | 4 | 本間　春城　他<br>（第一生命） |
| 死亡診断書にみる心・脳血管疾患について | 90 | 4 | 三宅　　誠　他<br>（住友生命） |
| 診査時の血圧変動―複数回測定による実測値の変化について― | 90 | 4 | 上村　卓良　他<br>（第一生命） |
| 条件体計算による修正死亡指数を用いた当社条件体契約の評価 | 90 | 4 | 石丸　博文　他<br>（朝日生命） |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　名（所属） |
|---|---|---|---|
| 当社における条件体の金額死亡率 | 90 | 平成４年 | 宮本　敬三　他<br>（第一生命） |
| 新たな死因分類方法による死因分析 | 90 | 4 | 中尾　修一　他<br>（朝日生命） |
| 血液検査実施の再検討 | 90 | 4 | 清水　一良　他<br>（住友生命） |
| 飲酒・喫煙習慣と平均赤血球容積（MCV）との関連 | 90 | 4 | 三河　一夫　他<br>（大同生命）<br>上島　弘嗣<br>（滋賀医科大学） |
| 喫煙・非喫煙を判別する検査についての文献的考察―特に保険医学的見地から― | 90 | 4 | 糸川　英樹<br>（住友生命）<br>塚越　　茂<br>（三井生命） |
| ３大疾病保障保険支払状況 | 91 | 5 | 高嶋　啓一　他<br>（日本生命） |
| 悪性新生物手術後死亡状況について | 91 | 5 | 奥田　俊幸　他<br>（日本生命） |
| 喫煙と飲酒の男性社内健康診断結果に及ぼす影響 | 91 | 5 | 金子　亘弘　他<br>（明治生命）<br>山岡　和枝　他<br>（帝京大学） |
| 職場健康診断時における喫煙実態調査―産業医活動の一環として― | 91 | 5 | 西村　信哉　他<br>（明治生命） |
| 尿糖陽性者の臨床検査値異常出現率―当社職員の健診結果より― | 91 | 5 | 小松　裕司　他<br>（住友生命） |
| 当社の蛋白尿，糖尿の死亡指数について | 91 | 5 | 成橋　広昭　他<br>（住友生命） |
| 慢性透析療法の生命保険医学的考察 | 91 | 5 | 山田　　操　他<br>（大同生命） |
| 環境因子の災害入院日数への影響 | 91 | 5 | 杉山　景一　他<br>（千代田生命） |
| 血圧値別にみた疾病入院の給付率について | 91 | 5 | 杉原　英男　他<br>（第一生命） |
| 当社における職業別死亡統計について | 91 | 5 | 森　　博明　他<br>（朝日生命） |
| 当社における高額死亡の検討 | 91 | 5 | 加藤　　明　他<br>（第一生命） |
| 体格（BMI）別死亡並びに入院発生状況 | 91 | 5 | 立川　　浩　他<br>（日本生命） |
| 当社における面接士扱・嘱託医扱経験死亡率の比較について | 91 | 5 | 大山　司郎<br>（明治生命） |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　名（所属） |
|---|---|---|---|
| 嘱託医の診査内容と診査件数の分布について | 91 | 平成５年 | 緒方　行男　他<br>（第一生命） |
| 契約の消滅および一時払養老保険の診査機関別死亡指数に与える影響 | 91 | 5 | 久富　一貴　他<br>（朝日生命） |
| 台湾と日本九州における死亡構造の国際比較研究（第一報・第二報・第三報） | 91 | 5 | 鄭　　石彦<br>（東邦生命） |
| 告知書および健康管理証明書扱証明書改訂に伴う告知ならびに異常所見出現率の変化 | 92 | 6 | 伊藤　博澄<br>（日本生命） |
| 医学的選択よりみた告知体重の信頼性 | 92 | 6 | 杉田　　治　他<br>（住友生命） |
| 委嘱面接士扱契約の経験発生率について | 92 | 6 | 肥野　武彦<br>（明治生命） |
| 申込前の支社医長の危険選択業務による新契約効率の改善―一支社における研究報告― | 92 | 6 | 山岡　誠二<br>（住友生命） |
| 診査規定の決定方法に関するひとつの考え方 | 92 | 6 | 杉山　景一　他<br>（千代田生命） |
| 重大疾病保障保険支払い状況（平成４年10月～平成５年12月） | 92 | 6 | 松本　文夫<br>（大同生命） |
| 肝疾患による早期死亡例の検討 | 92 | 6 | 清水　一良　他<br>（住友生命） |
| 当社における最近２年間の高度障害保険金支払の分析 | 92 | 6 | 川辺　圭一　他<br>（朝日生命） |
| 当社における死因別死亡の推移について―災害死亡を中心として― | 92 | 6 | 福田　健文　他<br>（第一生命） |
| 標準体契約の血圧値別死亡状況 | 92 | 6 | 黒木　長充　他<br>（日本生命） |
| 条件体における死亡率統計から見た心電図所見と血圧の関係 | 92 | 6 | 窪田　廣治　他<br>（第一生命） |
| 入院給付金受給後の再入院率 | 92 | 6 | 西川　征洋<br>（日本生命） |
| 主契約の属性別に見た入院発生状況 | 92 | 6 | 江藤　誠司<br>（日本生命） |
| 悪性新生物死亡例の入院証明書について | 92 | 6 | 清水　功基<br>（住友生命） |
| 職場健康診断時における喫煙調査―心身医学的観点より― | 92 | 6 | 西村　信哉<br>（明治生命） |
| 飲酒・喫煙習慣を考慮した血圧と平均赤血球容積（MCV）に関する検討 | 92 | 6 | 三河　一夫　他<br>（大同生命）<br>上島　弘嗣<br>（滋賀医科大学） |
| ３大疾病保障保険標準体における保険事故発生状況について | 93 | 7 | 直塚　香司<br>（日本生命） |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　名（所属） |
|---|---|---|---|
| 特定疾病保障保険金の請求状況の検討 | 93 | 平成７年 | 内山　武史　他<br>（第一生命） |
| 特定疾病保障保険支払状況 | 93 | 7 | 上原　秀規　他<br>（朝日生命） |
| 血液検査内容とその生命予後 | 93 | 7 | 小野　一朗<br>（日本生命） |
| 新契約時における肝臓疾患の血液検査結果の分析 | 93 | 7 | 粟倉　　眞　他<br>（第一生命） |
| 標準体における体格（BMI）別の死因別死亡状況について | 93 | 7 | 堀之薗瑞恵<br>（日本生命） |
| 循環器疾患の家族歴の有無からみた成人病検診データの検討 | 93 | 7 | 三河　一夫　他<br>（大同生命）<br>上島　弘嗣<br>（滋賀医科大学） |
| 新契約の内容と喫煙習慣 | 93 | 7 | 堀　　三郎　他<br>（明治生命） |
| 死因別死亡指数の分析―３大疾病について― | 93 | 7 | 武田　文徳　他<br>（第一生命） |
| 健康診断結果通知書扱いの導入について | 93 | 7 | 佐藤　康弘　他<br>（千代田生命） |
| 査定におけるサポーティングシステムの導入―欠陥コードによる機械判定― | 93 | 7 | 姫野　陽一　他<br>（第一生命） |
| 都道府県別に見た死亡指数と入院発生指数 | 94 | 8 | 塩谷　敏之<br>（日本生命） |
| 阪神・淡路大震災における当社死亡統計，入院統計の分析 | 94 | 8 | 味元　寛幸　他<br>（第一生命） |
| 保険医学からみたBody Mass Index（BMI）と死亡および疾病入院との関係 | 94 | 8 | 堀　　三郎<br>（明治生命） |
| BMI別の原因別入院発生指数について | 94 | 8 | 白水　知仁<br>（日本生命） |
| 告知に見る健康診断受診状況と結果通知書扱い | 94 | 8 | 吉満　恵一　他<br>（千代田生命） |
| 告知病名と診断書病名の比較検討 | 94 | 8 | 泉尾　　護　他<br>（第一生命） |
| 当社における特定疾病保障保険支払状況 | 94 | 8 | 横山　　哲<br>（住友生命） |
| 特定疾病保障保険支払状況（第２報） | 94 | 8 | 川辺　圭一　他<br>（朝日生命） |
| 診査限定基準へのアプローチ―特定疾病保障保険について― | 94 | 8 | 宮副　一郎<br>（安田生命） |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　名（所属） |
|---|---|---|---|
| リビング・ニーズ特約における診断書提出例の生命予後 | 94 | 平成８年 | 清水　功基<br>（住友生命） |
| リビングニーズ特約専用診断書および主治医確認報告書の分析 | 94 | 8 | 中川　雄介　他<br>（第一生命） |
| 当社における体格（BMI）別の死亡指数 | 95 | 9 | 横山　　哲<br>（住友生命） |
| BMI別の原因別入院発生指数について（その２） | 95 | 9 | 中村　一俊　他<br>（日本生命） |
| 飲酒，喫煙習慣を考慮した体脂肪率とBMIおよび血圧に関する検討 | 95 | 9 | 三河　一夫　他<br>（大同生命） |
| 要因別死亡指数の検討 | 95 | 9 | 中嶋　　優　他<br>（第一生命） |
| 当社の蛋白尿，血尿の死亡指数について | 95 | 9 | 田村　隆志　他<br>（住友生命） |
| 脳血管疾患の死亡指数調査 | 95 | 9 | 高松　俊彰　他<br>（協栄生命） |
| 特殊検査と死因別死亡状況 | 95 | 9 | 丸尾　伸司　他<br>（日本生命） |
| 保険診査における心電図検査の有効性についての検討 | 95 | 9 | 才木　邦宣<br>（住友生命） |
| 検尿と血液検査を同時に実施した事例における尿糖・血糖値およびグリコヘモグロビン値に関する研究 | 95 | 9 | 大塚　　実<br>（住友生命） |
| 最近10年間の早期死亡例の検討 | 95 | 9 | 外間　之雄　他<br>（第一生命） |
| リビングニーズ特約における原因疾患別生存率の検討 | 95 | 9 | 津田　　純　他<br>（明治生命） |
| 海外入院給付の現状 | 95 | 9 | 前田　和信　他<br>（第一生命） |
| 告知病名と診断書病名の比較検討（その２） | 95 | 9 | 須藤　広明　他<br>（第一生命） |
| 診査時間と選択効率―血圧日内変動・季節変動― | 95 | 9 | 堀　　博展<br>（安田生命） |
| 生命表作成ソフトの開発 | 95 | 9 | 大橋　茂充<br>（朝日生命） |
| 生活習慣の保険医学的検討：特に飲酒・喫煙習慣について | 96 | 10 | 塚本　浩介　他<br>（明治生命） |
| 血液検査からみた入院リスク（第１報） | 96 | 10 | 一言　正尚　他<br>（東邦生命）<br>徳井　教孝　他<br>（産業医科大学） |
| 疾病入院給付後の予後調査 | 96 | 10 | 青田　浩司　他<br>（第一生命） |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　名（所属） |
|---|---|---|---|
| 虚血性心疾患の死亡指数に関する検討 | 96 | 平成10年 | 高松　俊彰　他<br>（協栄生命） |
| 体格評価におけるBMIとローレル指数の検討 | 96 | 10 | 栗山　進一　他<br>（大同生命） |
| 診査場所による血圧値の異同 | 96 | 10 | 木村　茂昭　他<br>（住友生命） |
| 告知と査定の欠陥出現頻度の乖離について | 96 | 10 | 松岡　義樹　他<br>（安田生命） |
| 尿糖とフルクトサミン値に関する検討 | 96 | 10 | 斉藤　範夫　他<br>（第一生命） |
| 腎性糖尿と耐糖能異常に関する研究―検尿と血液検査同時実施事例と，血液検査再診事例との比較検討― | 96 | 10 | 大塚　　実<br>（住友生命） |
| 健康診断結果通知書扱いの医的査定について一考察 | 96 | 10 | 高西　竜太　他<br>（千代田生命） |
| 死亡指数別平均余命を求めるための近似式の考案 | 96 | 10 | 大橋　茂充<br>（朝日生命） |
| ３大疾病保障定期保険特約及び乳癌に対する待期間導入の効果について | 96 | 10 | 北原　弘文　他<br>（日本生命） |
| 高度障害保険金支払事例の検討 | 96 | 10 | 須山　孝次　他<br>（第一生命） |
| 最近の自殺率の動向について | 96 | 10 | 豊川　好男　他<br>（日本生命） |
| 海外入院給付の現状（その２） | 96 | 10 | 内潟　芳之　他<br>（第一生命） |
| 体格および血圧が死因別死亡率に与える影響について | 97 | 11 | 白水　知仁<br>（日本生命） |
| 体格および血圧が死亡率，入院発生率に与える影響について | 97 | 11 | 松浦　利津　他<br>（日本生命） |
| HTLV-Iキャリアの死亡指数に関する検討 | 97 | 11 | 谷川　拓男　他<br>（大同生命） |
| 嘱託医個人別死亡指数と区間推定 | 97 | 11 | 大橋　茂充<br>（朝日生命） |
| 精神疾患における入院給付後の予後 | 97 | 11 | 津田　　純　他<br>（明治生命） |
| 尿糖陽性者の臨床検査値異常出現率―フルクトサミン値・肝機能検査値異常との関連について― | 97 | 11 | 樋口　健弥　他<br>（第一生命） |
| 尿蛋白陽性例の血圧値別による死亡指数の検討 | 97 | 11 | 中道　　洋　他<br>（第一生命） |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　名（所属） |
|---|---|---|---|
| 尿糖と血糖の関係の検討―第一報―，―第二報― | 97 | 平成11年 | 川村　正嗣<br>（慶應義塾大学・アリコジャパン）<br>谷　　正人<br>（慶應義塾大学） |
| 尿所見の日内変動に関する研究 | 97 | 11 | 木村　茂昭　他<br>（住友生命） |
| 疾病障害特約支払請求事例の検討 | 97 | 11 | 鈴木　章夫　他<br>（第一生命） |
| 当社リビングニーズ特約の分析（Ⅱ） | 97 | 11 | 芳賀　正治　他<br>（第一生命） |
| 体況査定照会制度による診断書入手例の検討 | 97 | 11 | 千葉　伸一　他<br>（明治生命） |
| 血圧値別・検尿値別・保険年度別死亡指数の検討 | 97 | 11 | 村田　哲雄　他<br>（三井生命） |
| 当社保険加入者における喫煙習慣についての検討 | 98 | 12 | 秋山　法久　他<br>（明治生命） |
| 特定疾病保障保険診断書からみた悪性新生物の支払請求例の検討―不払規定の現状に関して― | 98 | 12 | 泉　　泰治　他<br>（第一生命） |
| 高度視力障害保険金支払事例の検討 | 98 | 12 | 田口祐二郎<br>（明治生命） |
| 特定難病給付金の支払請求事例の検討 | 98 | 12 | 吉本　光宏　他<br>（第一生命） |
| 面接士扱加入申込の告知出現率・要因発見率の分析<br>―面接士教育に関する一考察― | 98 | 12 | 和田　　学　他<br>（第一生命） |
| 保険年度別死亡指数による生命表シミュレーション | 98 | 12 | 大橋　茂充<br>（朝日生命） |
| 高血圧治療例の保険事故発生状況 | 98 | 12 | 日永　里美　他<br>（明治生命） |
| 体格および血圧の複合欠陥の死亡指数に及ぼす影響<br>―特に狭長体かつ高血圧での死亡指数上昇について― | 98 | 12 | 横山　　哲<br>（住友生命） |
| 血圧，尿蛋白および尿潜血の複合欠陥別死亡指数の検討 | 98 | 12 | 片桐　　聡　他<br>（住友生命） |
| 飲酒習慣と死因別死亡状況について | 98 | 12 | 白水　知仁<br>（日本生命） |
| 都道府県別死因別死亡率について | 98 | 12 | 小川　淑美　他<br>（日本生命） |
| 職業別にみた保険契約の考察 | 99 | 13 | 白井　茂夫<br>（第一生命） |
| 気管支喘息の保険事故発生状況について | 99 | 13 | 石川　晋子　他<br>（明治生命） |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　名（所属） |
|---|---|---|---|
| 気管支喘息の死亡指数および死因の検討 | 99 | 平成13年 | 河野　康一　他<br>（住友生命） |
| 特定疾病保障保険における乳がん90日待ち期間の逆選択防止効果について | 99 | 13 | 西野　　猛<br>（第一生命） |
| 二次元死亡率による加入年齢別生命表 | 99 | 13 | 大橋　茂充<br>（朝日生命） |
| 過腹囲は死亡リスクを上昇させるのか？ | 99 | 13 | 横山　　哲<br>（住友生命） |
| 血圧および尿再検査の有用性―契約拡大の観点から― | 99 | 13 | 磯部　　実<br>（第一生命） |
| 健康管理証明書扱における肝機能数値別死亡指数の検討 | 99 | 13 | 片桐　　聡　他<br>（住友生命） |
| 個人健康診断結果通知書扱の検査異常出現率 | 99 | 13 | 鈴木　　淳　他<br>（第一生命） |
| 疾病入院特約給付後の死亡発生状況調査<br>―主な良性腫瘍について― | 99 | 13 | 千田　尚毅　他<br>（日本生命） |
| 疾病入院特約給付後の死亡と再入院の発生状況の調査<br>―消化器疾患について― | 99 | 13 | 井浦　秀一　他<br>（日本生命） |

**講演・その他**

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|
| 生命保険会社の被保険人に於ける結核症 | 1　1 | 明治35年 | 中浜東一郎 |
| 生命保険と肺結核 | 1　1 | 35 | 粟津　清亮 |
| 格外保険料に就て | 1　1 | 35 | 麻生義一郎 |
| 診査の標準に就て | 1　1 | 35 | 那須理太郎 |
| 保険医事に就て | 1　1 | 35 | 三宅　　秀 |
| 生命保険と医師の公徳 | 1　1 | 35 | 矢野　恒太 |
| 第２回万国保険医大会の景況 | 1　1 | 35 | 志田鉀太郎 |
| スコッチシ・ヰドース・ハンド・生命保険会社の死亡表に就て | 2　2 | 35 | 中浜東一郎 |
| 嘱託医の共通に就て | 2　2 | 36 | 森村　金造 |
| 保険医事に就て | 2　2 | 36 | 中浜東一郎 |
| 万国保険医大会に就て | 2　2 | 36 | 中浜東一郎 |
| 生命保険と衛生とに就て | 2　3 | 36 | 緒方　正規 |
| 巴里に於ける第３回国際保険医大会景況報道 | 2　3 | 36 | 中浜東一郎 |
| 19世紀に於る人類寿命の延長に就て | 2　4 | 36 | 粟津　清亮 |
| 経営談二則 | 2　4 | 36 | 矢野　恒太 |
| 娩産に因る死亡に就て | 3　6 | 36 | 木下　正中 |
| 小額保険の体格診査に就て | 3　7 | 37 | 中矢　野恒 |
| 肺結核脳溢血による死亡数に就て | 3　8 | 37 | 中浜東一郎 |
| 生命保険業務の範囲拡張に就て | 3　8 | 37 | 粟津　清亮 |
| 体格検査の効果に就て | 3　8 | 37 | 神村　信吾 |
| 生命保険と遺伝の関係に就て | 4　2 | 38 | 松崎故一郎 |
| 米国保険会社に於る医務に就て | 4　9 | 38 | キ　ン　グ |
| 伝染病接近者に於る診査医の注意に就て | 4　9 | 38 | 中村健三郎 |
| 豪太生命保険会社に於る脱腸の処置 | 4　9 | 38 | フロールシュッツ |
| 須く生命保険事業の発達を計るべし | 4　9 | 38 | 中浜東一郎 |
| 戦地に於ける死因統計 | 4　10 | 38 | 三好常三郎 |
| 声帯麻酔及慢性化膿性中耳炎に就て | 4　11 | 38 | 金杉英五郎 |
| 肺結核と脳溢血（高年及若年に於ける死亡率に就て） | 4　11 | 38 | 三好常三郎 |
| 測診法に就きて | 4　11 | 38 | 大島　　櫟・富永　谷造 |
| 肺結核の診断に就て | 4　12 | 38 | 中浜東一郎 |
| 検尿の必要なる場合に就て | 4　12 | 38 | 藤並　　生 |
| 生命保険診査 | 4　12 | 38 | 三井武三郎 |
| 脳出血症の年令に就て | 4　12 | 39 | 涌井　栄政 |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|
| 共通嘱託医を設置するの可否 | 5　13 | 明治39年 | 三好常三郎 |
| 共同診査医の設置に就て | 5　13 | 39 | 矢野　恒太 |
| 保険協会の事業 | 5　13 | 39 | 阿部　泰蔵 |
| 妊娠婦人の契約可否に就て | 5　13 | 39 | 林　蓮太郎 |
| 結核の早期診断に就て | 5　14 | 39 | 三宅　　秀 |
| 生命保険診査と周囲的関係 | 7　1 | 41 | 三井武三郎 |
| 弱体保険に就て | 7　2 | 41 | 粟津　清亮 |
| 年増方法に就て | 7　4 | 41 | 奥村　英夫 |
| 女子の身体の保険的危険に就て | 8　1 | 42 | 冨士川　游 |
| 死亡表に就て | 8　1 | 42 | 海老原介太郎 |
| 精神病に関する１，２の事項 | 8　2 | 42 | 三宅　鉱一 |
| 診査を確実にする方法に就て | 8　5 | 42 | 中浜東一郎 |
| 保険医務の拡張 | 8　6 | 43 | 粟津　清亮 |
| 年令と死因附日本と独逸の比較 | 9　2 | 43 | 三好常三郎 |
| 結核病死と職業との関係 | 9　3 | 43 | 中浜東一郎 |
| 糖尿病者の採否に就て | 9　4 | 43 | 林　蓮太郎 |
| 早期死亡数に就附総死亡数 | 9　5 | 43 | 鈴木孝之助 |
| 萎縮腎に就て | 9　6 | 43 | 南部　孝一 |
| 肺結核患者の治療所に就て | 10　1 | 43 | 中浜東一郎 |
| 死因類別統計表の改正に就て | 10　1 | 43 | 三好常三郎 |
| 初期肺尖結核の物理的早期診断法に就て | 10　1 | 44 | 高田他家雄 |
| 初期肺結核の物理的早期診断法に就て | 10　2 | 44 | 高田他家雄 |
| 前承横浜生命保険株式会社被保人の活力統計表に就て | 10　2 | 44 | 杉田　　盛 |
| 小額保険及傷害保険に就て | 10　2 | 44 | 粟津　清亮 |
| 生命保険と指紋の関係 | 10　3 | 44 | 片山　国嘉 |
| 心臓弁膜病に就て | 10　3 | 44 | 三好常三郎 |
| 保険医学上より見たる耳の疾患 | 10　4 | 44 | 岡田和一郎 |
| 内閣統計局に医事及び衛生統計部と称する一室を設けたる注意 | 10　4 | 44 | 花房直三郎 |
| 工場巡視官に就て | 10　5 | 44 | 中浜東一郎 |
| 大形複殖門條虫（新種の條虫）に就て | 10　6 | 44 | 栗本　東明 |
| 癌腫に関する統計に就て | 11　1 | 45 | 高田他家雄 |
| 日本婦人の死亡率に就て | 11　2 | 45 | 矢野　恒太 |
| 脂肥病に就て | 11　2 | 45 | 額田　　豊 |
| 糖尿検査の必要に就て | 11　2 | 45 | 中村健三郎 |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|
| 女子被保険者の死亡率に就て | 11　3 | 明治45年 | 窪田隆次郎 |
| 既往症又は現症隠蔽に依りて成立したる保険契約は裁判上無効と認められん事を望む | 11　3 | 45 | 中浜東一郎 |
| 各方面に於ける統計の必要を論じ殊に其最大緊要点に及ぶ | 11　4 | 大正元年 | 呉　文　聡 |
| 簡便生命保険に就て | 11　4 | 元 | 粟津　清亮 |
| 不整脈に就て | 12　1 | 2 | 丹治　善造 |
| 狂犬病に就て | 12　1 | 2 | 栗本　東明 |
| 本邦人の腎臓炎死に就て | 12　3 | 2 | 二階堂保則 |
| 子宮癌腫に就て | 12　4 | 2 | 木下　正中 |
| 医師相互の保険 | 12　5 | 2 | 中浜東一郎 |
| 日本三会社表に就て | 12　6 | 2 | 海老原介太郎 |
| 心臓障害に就て | 13　1 | 3 | 酒井和太郎 |
| 精神病学の方面より保険診査に対する２，３の注意 | 13　2 | 3 | 石川　貞吉 |
| 脂肪体質と生命保険 | 13　2 | 3 | 秋山　妙治 |
| 日本並に欧米に於ける女子保険 | 13　3 | 3 | 岩間　六郎 |
| 生命保険に於ける告知義務に就て我裁判例 | 13　3 | 3 | 玉木為三郎 |
| アクチュアリーの立場より見たる危険の選択に就て | 14　1 | 4 | 伊藤万太郎 |
| 脈搏の不整に就て | 14　1 | 4 | 呉　　建 |
| 養老保険及婦人死亡率 | 14　2 | 4 | 中松亀太郎 |
| 独逸国に於ける生命保険医学の現況に就て | 14　3 | 4 | 高田他家雄 |
| 再び死亡調査に就て | 14　3 | 4 | 長谷川要吉 |
| 肺結核の遺伝関係に就て | 14　3 | 4 | 石岡繁太郎 |
| 旧事談 | 14　4 | 4 | 三宅　　秀 |
| 保険医学の系統的研究法 | 14　4 | 4 | 高田他家雄 |
| 診査医と法律関係 | 14　6 | 4 | 山崎　　佐 |
| 無診査保険（未完） | 15　1 | 6 | 志田鉀太郎 |
| 診査と検尿 | 15　1 | 6 | 三井武三郎 |
| 本邦人口動態の概況 | 15　2 | 6 | 二階堂保則 |
| 英国に於ける保険業者及保険医 | 15　3 | 6 | 柳川　華吉 |
| 傷害保険の医事 | 15　4 | 6 | 粟津　清亮 |
| 職工の衛生状態 | 15　5 | 6 | 野田　忠広 |
| 検尿に就て | 15　6 | 5 | 須藤　憲三 |
| 保険診査医と告知義務に就て | 15　6 | 5 | 玉木為三郎 |
| 郡市の死亡率に就て | 16　2 | 6 | 中浜東一郎 |
| 生命保険と脂肪過多 | 16　3 | 6 | 高田他家雄 |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|
| 生命保険と家系研究（Ⅰ） | 16　5 | 大正6年 | 永井　　潜 |
| 生命保険と家系研究（Ⅱ） | 16　6 | 6 | 永井　　潜 |
| 検尿に就て | 17　1 | 7 | 柳川　華吉 |
| 早期死亡と診査季節との関係 | 17　2 | 7 | 三井武三郎 |
| 保険医学の研究 | 17　1 | 7 | 篠原　昌治 |
| 所謂脳溢血死亡と血圧測定 | 17　2 | 7 | 酒井　谷平 |
| 我国に於ける疾病保険の創始を促す | 17　3 | 7 | 粟津　清亮 |
| 職業と死因 | 17　3 | 7 | 秋山　妙治 |
| 本邦に於ける肺結核蔓延の状況 | 17　4 | 7 | 中浜東一郎 |
| 保険診査に於ける血圧測定の価値 | 17　4 | 7 | 川村嘉太郎 |
| 邦国人の国民死亡率との推移の趨勢に就て | 17　4 | 7 | 角尾猛次郎 |
| 保険診査に関する判例類輯の必要と其の応用（Ⅰ） | 17　5 | 7 | 山崎　　佐 |
| 保険診査に関する判例類輯の必要と其の応用（Ⅱ） | 17　6 | 7 | 山崎　　佐 |
| 産後貧血の一例に就て | 17　6 | 7 | 竹田　六郎 |
| 脳溢血に関する2，3の統計 | 18　2 | 8 | 高田他家雄 |
| 国民対被保険者就中女子保険者死因関係に就いて | 18　4 | 8 | 石岡繁太郎 |
| 体質論 | 18　5 | 8 | 大串菊太郎 |
| 妊婦の契約に就て | 19　3 | 9 | 丹治　善造 |
| 診査報状査定の一方法に就て | 19　4 | 9 | 鈴木　敏一 |
| インフルエンザに就て | 19　5 | 9 | 稲田　竜吉 |
| 国家と国家的企劃（Ⅰ） | 19　5 | 9 | ヘンリーモイヤ |
| 保険医師の立場より見たる告知義務の規定と判決例（Ⅰ） | 19　6 | 9 | 三浦　義道 |
| 戦時英仏伊3国に於ける食糧調節に就て（Ⅰ） | 19　6 | 9 | 中浜東一郎 |
| 国家と国家企劃（Ⅱ） | 19　6 | 9 | ヘンリーモイヤ |
| 保険医師の立場より見たる告知義務の規定と判決例（Ⅱ） | 20　1 | 10 | 三浦　義道 |
| 戦時英仏伊3国に於ける食糧調節に就て（Ⅱ） | 20　1 | 10 | 中浜東一郎 |
| 本邦に於ける食料問題 | 21　1 | 11 | 中浜東一郎 |
| 糖尿に就いて（Ⅰ） | 21　1 | 11 | 田中吉左衛門 |
| 拙稿「日本人の体格及び体格の分類に就て」に対し示教せられし高田学士の好意を謝し併せて其所論の2，3に就て同君に答う | 21　2 | 11 | 丹治　善造 |
| 社会衛生学に就て | 21　3 | 11 | 中浜東一郎 |
| 頸囲に就て | 21　5 | 11 | 岡村　　進 |
| 結核の早期診断に就て | 21　5 | 11 | 実吉　純郎 |
| 短期死亡殊に肺結核に就て | 22　3 | 12 | 秋山　妙治 |
| 推定体重算出法に就て | 22　4 | 12 | 板沢　政治 |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|
| 生産年齢に於ける日本人の標準体格に就て | 23　1 | 大正13年 | 大山稲三郎 |
| 測診上より見たる未産婦と経産婦 | 23　4 | 13 | 丹治　善造 |
| 学校教育に待つ結核の予防 | 23　5 | 13 | 沢田　嘉吉 |
| 生命保険医学研究所設置の必要 | 24　2 | 14 | 中田　篤郎 |
| 被保険者の健康増進に就て | 24　2 | 14 | 増田　雷助 |
| 欧米視察談 | 24　3 | 14 | 中浜東一郎 |
| 潜伏疾患と健康領域 | 24　5 | 14 | 真鍋嘉一郎 |
| 保険医事上参考たる可き２，３の計算に就て | 24　6 | 14 | 渡辺　　定 |
| 余の所謂「寿命値」vital value | 25　1 | 15 | 大串菊太郎 |
| 無診査保険に就て | 25　2 | 15 | 篠原　昌治 |
| ビルディング生活者の健康状態に就て | 25　2 | 15 | 村松　喬雄 |
| 生命保険医学上より見たる脚気 | 25　3 | 15 | 渡辺　　定 |
| 保険診査上の尿検査に対する一新知見 | 25　5 | 15 | 川口　輝志 |
| 糖尿病に就て | 25　5 | 15 | 前田　春雄 |
| 身体各部の血圧比較研究 | 25　5 | 15 | 早坂得奈治 |
| 被保人の死因と血圧 | 25　6 | 昭和元年 | 丹治　善造 |
| 生産年令に於ける日本人の体格　特に其変化の範囲に就て | 25　6 | 元 | 大山稲三郎 |
| 日本人健康男子の体重に就て | 26　1 | 2 | 板沢　政治 |
| 液状試薬を用いざる検尿法 | 26　1 | 2 | 板沢　政治 |
| 血圧亢進の成因に関する一考察 | 26　1 | 2 | 箱崎　孝平 |
| 胸囲殊に女子の胸囲 | 26　4 | 2 | 大串菊太郎 |
| 胸囲測定に就て１，２の注意 | 26　4 | 2 | 村松　喬雄 |
| 癌の早期診断に就て（第２回報告） | 27　3 | 3 | 前田　春雄 |
| 保険医学上より観たる異同論 | 27　3 | 3 | 草刈　春逸 |
| 最近の生命保険会社の拒絶体に就て | 27　4 | 3 | 大貫　弘平 |
| 蛋白尿に就いて | 28　2 | 4 | 渡辺　　誠 |
| 自殺に就て | 28　3 | 4 | 金沢　　潔 |
| 早期死亡保険体の観察 | 28　4 | 4 | 沢田　嘉吉 |
| 未成年優良保険体及び推定体重に就て | 28　4 | 4 | 三上　治夫 |
| 社医及嘱託医の診査効果に就て | 28　4 | 4 | 西村　英吉 |
| 自殺に就て | 28　4 | 4 | 杉田　直樹 |
| 欧米に於ける保険体撰択の現況 | 28　5 | 4 | 中条　鋭一 |
| 生命保険と自殺 | 28　5 | 4 | 原田謙太郎 |
| 統計所感 | 28　5 | 4 | 丹治　善造 |
| 自殺に就て | 29　4 | 5 | 草刈　春逸 |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|
| 簡易日光療法（Ⅰ） | 29　4 | 昭和5年 | 中村健三郎 |
| 簡易日光療法（Ⅱ） | 29　5 | 5 | 中村健三郎 |
| 簡易日光療法（Ⅲ） | 29　6 | 5 | 中村健三郎 |
| 簡易日光療法（Ⅳ） | 30　1 | 6 | 中村健三郎 |
| 簡易日光療法（Ⅴ） | 30　2 | 6 | 中村健三郎 |
| 簡易日光療法（Ⅵ） | 30　3 | 6 | 中村健三郎 |
| 血行器の機能検査に就て | 30　6 | 6 | 真下　俊一 |
| 生命保険と1，2の精神病 | 31　4 | 7 | 和田　豊種 |
| 保険医学上に必要なる精神病学 | 32　1 | 8 | 草刈　春逸 |
| 欧米生命保険会社に於ける血圧に関する査定方法 | 33　1 | 9 | 板沢　政治 |
| 健康維持に就て | 33　3 | 10 | 戸田　正三 |
| 糖尿病の診断及糖尿の予後 | 34　4 | 11 | 坂口　康蔵 |
| 癌に就いて | 35　1 | 11 | 布施　信良 |
| 生命保険医の糖尿検査に関する注意 | 35　5 | 11 | 坂口　康蔵 |
| 欧米保険瞥見 | 36　2 | 12 | 宮地　利彦 |
| 臨床漫談（診断と予後） | 36　3 | 12 | 入沢　達吉 |
| 生命保険に於ける皮膚病学の意義に就て | 36　4 | 12 | 松本　信一 |
| 身長及胸腹囲による体重推定に就て | 36　4 | 12 | 川井　三郎 |
| 日本人の体格諸問題 | 36　5 | 12 | 吉田　章信 |
| 最近に於ける被保険者保険施設の情勢に就て | 37　3 | 13 | 佐藤　　正 |
| 保険医学と眼科学 | 37　3 | 13 | 中村　文平 |
| 時局と体力向上問題に就て | 37　6 | 13 | 林　　春雄 |
| 廻盲部の外科的疾患に就て | 38　4 | 14 | 塩田　広重 |
| 遺伝学者はどんな研究をして居るか | 39　2 | 15 | 木原　　均 |
| 寄生性伝染性皮膚疾患 | 39　2 | 15 | 太田　正雄 |
| 独逸より帰りて | 40　1 | 16 | 石橋　長英 |
| 肺結核の診断及び予後に就て | 40　2 | 16 | 岡　　治道 |
| 輓近遺伝学の趨勢 | 41　1 | 17 | 川上　理一 |
| 血液型の話 | 41　3 | 17 | 古畑　種基 |
| 胃十二指腸の外科 | 41　4 | 17 | 都築　正男 |
| 我国生命保険に於ける選択効力に就て | 41　6 | 17 | 角尾猛治郎 |
| 無診査保険の死亡率について | 46　1 | 23 | 角　　辻治 |
| 体質について | 46　2 | 23 | 木谷　威男 |
| 肺結核予後の考察 | 47　1 | 24 | 北本　　治 |
| 結核の感染と発病 | 47　3 | 24 | 岡　　治道 |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|
| 高血圧の新見解と新知見 | 48　1 | 昭和25年 | 佐々　貫之 |
| 診療余話（座談）と新知見 | 48　1 | 25 | 西野忠次郎 |
| 最近の結核問題に付て | 48　3 | 26 | 隈部　英雄 |
| レントゲン写真の読み方について | 49　1～2 | 26 | 岡西順二郎 |
| 性病（特に梅毒並に淋疾）とその化学療法 | 49　1～2 | 26 | 中川小四郎 |
| 日本保険医学会創立史 | 49　3 | 26 | 町田　信 |
| 細菌学界への回顧 | 49　3 | 26 | 志賀　潔 |
| 最近の肺臓外科について | 50　3 | 27 | 宮本　忍 |
| 職業衛生の概説 | 51　1 | 28 | 梶原　三郎 |
| 心電図について | 51　1 | 28 | 樫田　良精 |
| 眼血圧について（要旨） | 51　4 | 28 | 植村　操 |
| 本態性高血圧症の病理と臨床 | 52　1 | 29 | 藤井　静雄 |
| 母性現象及び人工妊娠中絶の母体に及ぼす影響 | 52　1 | 29 | 安藤　画一 |
| 放射能障害の予後について | 52　4 | 29 | 都築　正男 |
| 第９回生命表の公衆衛生学的意義と職業別死亡率 | 53　1 | 30 | 菱沼　従尹 |
| 瘢痕の外科的考察 | 54　1 | 31 | 篠井　金吾 |
| 高血圧症と急性心臓死に関する２，３の知見 | 54　1 | 31 | 鴨谷　亮一 |
| Assessment of substandard risks by Munich Reinsurance Company | 54　4 | 31 | Dr. Kurt Quade |
| 癌の早期診断について | 56　1 | 33 | 田崎　勇三 |
| 脳波の臨床的応用 | 56　1 | 33 | 吉井直三郎 |
| 肝疾患の診断と治療 | 56　1 | 33 | 三方　一澤 |
| ――パネルディスカッション――<br>血圧測定――血圧測定の一般的事項 | 61 | 38 | 佐々　千之 |
| 血圧計 | 61 | 38 | 杉田　啓 |
| 血圧測定の実験的・手技的事項 | 61 | 38 | 上妻　正敏 |
| 血圧測定の手技―血圧の左右差― | 61 | 38 | 安田弥太郎 |
| 被検者の状態と血圧（第１報） | 61 | 38 | 舘野　豊　他 |
| 血圧再測定時の動揺について | 61 | 38 | 大竹　喜彦 |
| 血圧の統計的検討 | 61 | 38 | 橋田　襄 |
| 血圧と心臓病 | 61 | 38 | 川幡　千秋 |
| 血圧測定と降圧剤 | 61 | 38 | 岸　哲雄　他 |
| ――シンポジウム――胃・十二指腸潰瘍 | 62 | 39 | |
| 胃・十二指腸潰瘍の原因・症状・診断 | 62 | 39 | 吉江幹之助 |
| 胃・十二指腸潰瘍の臨床的予後 | 62 | 39 | 神山　守 |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|
| 胃・十二指腸潰瘍と年令・体格などについて | 62 | 昭和39年 | 今宮俊一郎 |
| 環境と消化性潰瘍 | 62 | 39 | 岸　哲雄 |
| 胃・十二指腸潰瘍告知の信頼性 | 62 | 39 | 吉利　正彦　他 |
| 胃・十二指腸潰瘍の経験死亡 | 62 | 39 | 水溜　延武 |
| ――シンポジウム――心臓疾患 | 63 | 40 | |
| 心臓疾患の疫学 | 63 | 40 | 池田　一義 |
| 診査の問題点 | 63 | 40 | 原川　信次 |
| 査定の問題点 | 63 | 40 | 鎮目　輝彦 |
| 査定上の問題点 | 63 | 40 | 天野　正秋　他 |
| 不整脈と心電図検査 | 63 | 40 | 大竹　喜彦　他 |
| 死亡査定上の問題点 | 63 | 40 | 小原　護 |
| 心臓疾患の死亡率とその予後 | 63 | 40 | 館野　豊 |
| ――シンポジウム――臨床検査法の診査への導入 | 64 | 41 | |
| 保険診査に眼底検査導入の問題 | 64 | 41 | 佐藤　義人 |
| 皮電計検査について | 64 | 41 | 田中　成美　他 |
| 肺機能検査の診査への導入 | 64 | 41 | 岡田　久輝　他 |
| 血糖検査の診査への導入について | 64 | 41 | 松田　武一 |
| 尿中血圧降下剤の検出とヘマティクスによる尿中赤血球検出法の診査への導入 | 64 | 41 | 奥村　修 |
| 癌反応の保険診査への導入について | 64 | 41 | 藤原　敬男 |
| 尿糖・尿蛋白について | 64 | 41 | 加藤　邦男 |
| 尿沈渣 | 64 | 41 | 浜崎　晃則　他 |
| 日本保険医学会の歴史 | 65 | 42 | 原　滋 |
| 無診査限度についての私見 | 66 | 43 | 吉田　忠 |
| 心・血管系の欠陥の選択――シンポジウム―― | 68 | 45 | |
| 調律異常 | | | 館野　豊　他 |
| 心音異常 | | | 木下　和之　他 |
| 心肥大 | | | 森岡　達治 |
| 心筋障害 | | | 比田勝一彦 |
| 心臓手術の既往症 | | | 宮尾　淳平 |
| 眼底所見 | | | 野口　芳之 |
| 危険選択と死差益 | 69 | 46 | 上野　元男 |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|
| 診査面からみた胃疾患の問題点——パネルディスカッション——<br>胃潰瘍<br>胃潰瘍<br>胃　炎<br>胃　炎<br>不定愁訴<br>不定愁訴<br>胃腫瘍 | 69 | 昭和46年 | 大竹　喜彦<br>中山　稔久<br>落合　清治<br>有川　清康<br>小室　義男<br>森岡　達治<br>高田　幾男<br>伊藤　清和 |
| 高血圧の予後とそのつかみ方——シンポジウム——<br>シンポジウムのはじめに<br>脳卒中・心発作発生に及ぼす血圧の影響<br>地域別・職業別にみた高血圧の特徴<br>高血圧の死亡率に影響する保険医学的諸要因の検討<br>高血圧受療者の生命予後<br>シンポジウムのむすび | 70 | 47 | <br>三原　通<br>福田　安平　他<br>小町　喜男　他<br>塚本　宏<br>安藤　博章<br>三原　通 |
| Diabetes and Seletion of Risks | 71 | 48 | Paul S. Entmacher |
| 最近の日本における糖尿病 | 71 | 48 | 葛谷　信貞 |
| 標準下体保険の死差益について | 71 | 48 | 館野　豊 |
| 保険診査における告知聴取上の問題点<br>——パネルディスカッション——<br>告知の周辺<br>診査報状の書式上の問題点<br>診査医側における告知聴取上の問題<br>疾患面からみた告知聴取上の問題<br>告知公平性への疑問<br>告知聴取の未来像に関する提言 | 71 | 48 | 有澤　誠<br><br>平川　安澄<br>宇都宮　健<br>有川　清康<br>橋本　栄人<br>緒方　佐男<br>菅谷　三郎 |
| 保険医学と危険選択—倫理的側面からの接近— | 72 | 49 | 鈴木　馨 |
| 肝疾患への保険医学的アプローチ | 72 | 49 | 有川　清康<br>山本　浩<br>陸田　博<br>佐野　松雄<br>中山　稔久 |
| 心音聴診について | 72 | 49 | 佐々　千之<br>岩倉　英夫<br>川本　久<br>向後　米造<br>樽見　幸郎 |
| 最近における危険選択上の諸問題 | 73 | 50 | 鳥井　静夫 |
| 疾病保険の選択——シンポジウム——<br>シンポジウムのはじめに<br>入院給付支払状況からみた若年者に多い傷病<br>青壮年者を対象とした給付状況と問題点<br>手術給付における選択上の問題点<br>疾病特約の料率算定の面よりみた疾病保険の危険選択上の問題点<br>シンポジウムのおわりに | 73 | 50 | <br>奈良　勝典<br>三原　通　他<br>井上　秀男<br>相模　嘉夫<br>伊藤　梅雄<br><br>奈良　勝典 |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|
| 診査時における脳卒中のとらえ方 | 73 | 昭和50年 | 重松　昭夫<br>宇都宮　健<br>清島　長典<br>岡田　竹雄<br>塚本　　宏<br>高橋　　寧 |
| 糖尿陽性者の新しい選択基準をめざして | 73 | 50 | 松田　武一<br>安藤　博章 |
| 糖尿について | | | 長田　俊彦 |
| 血糖検査について | | | 丸山　　実 |
| 糖尿病の診査と眼底検査について | | | 慶居豹一郎 |
| 心電図検査について | | | 星田　栄子 |
| まとめ | | | 安藤　博章 |
| 生命の尊厳と相互扶助 | 74 | 51 | 平沢　　興 |
| 疾病保険について——シンポジウム—— | 74 | 51 | |
| 各社の経験 | | | 尼子　隆士 |
| 疾病保険の診査上の問題点 | | | 陸田　　博 |
| 疾病保険の選択—査定を中心に— | | | 安藤　博章 |
| 症例研究—疾病保険の給付査定における選択の考え方— | | | 藤原　敬男 |
| 疾病保険に於ける生存調査の意義 | | | 佐野　松雄 |
| 疾病保険の将来の問題点 | | | 有澤　　誠 |
| 糖尿病に関する最近の話題 | 75 | 52 | 平田　幸正 |
| 疾病保険の現況と今後の問題点 | 75 | 52 | 尼子　隆士 |
| CTスキャンによる脳卒中の新しい医療体制と予後 | 76 | 53 | 田崎　義昭 |
| 血圧と脳発作死亡率 | 76 | 53 | 岡本　　浩 |
| 危険選択と検尿の意義——パネルディスカッション—— | 76 | 53 | 有川　清康 |
| 検尿の現状について | | | 中山　稔久 |
| 尿異常の出現率について | | | 佐野　松雄 |
| 迅速尿検査に於ける実際の問題点 | | | Dolphe Kutter |
| 診査医の立場からみた検尿について | | | 川本　　久 |
| 尿検査の問題点と将来の方向について | | | 上野　　武 |
| 診査と査定 | 76　別冊 | 53 | |
| 診査と査定による資料にもとずく危険評価の考え方 | | | 佐藤　　寿 |
| 診査の要点 | 76 | 53 | |
| 告知の聴取について | | | 沼田　輝夫 |
| 中枢神経系の欠陥について | | | 上野　　武 |
| 心音聴取のポイント | | | 岡本　　浩 |
| 肝疾患について（肝炎と肝硬変） | | | 斎藤　弘吉 |
| 手術痕から推定される被侵襲臓器について（胸，腹部を主に） | | | 北村　辰郎 |
| 免疫応答と免疫異常症 | 77 | 54 | 山村　雄一 |
| 超音波心エコー図による心臓病診断の現況 | 77 | 54 | 松尾　裕英 |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　名（所属） |
|---|---|---|---|
| 医的査定の理論と実際<br>医的査定の歴史と考え方<br>アメリカにおける「血圧研究」の伝統と現況<br>血圧異常（高血圧）の査定の実務 | 77　別冊 | 昭和54年 | <br>佐野　松雄<br>塚本　　宏<br>沼田　輝夫 |
| 動脈硬化の最近のトピックス | 78 | 55 | 五島雄一郎 |
| 超音波診断法の最近の進歩 | 78 | 55 | 和賀井敏夫 |
| 検定調査士の選択効果について | 78 | 55 | 松村　亮逸 |
| 循環器疾患による死亡の動向と危険選択 | 78　別冊 | 55 | 藤原　敬男 |
| 診査と死亡査定<br>重要事実（事項）と因果関係<br>保険診査上の過失<br>死亡査定の実例 | 78　別冊 | 55 | <br>木村　勇夫<br>吉本　昭二<br>中山　稔久 |
| 日本人の高血圧―疫学の成果と展望― | 79 | 56 | 佐々木直亮<br>（弘前大学医学部教授） |
| 最近の肝機能検査とその評価―肝炎関連抗原・抗体検査を中心に― | 79 | 56 | 鈴木　　宏<br>（山梨医科大学教授） |
| 保険医学の歩みと未来像――シンポジウム――<br>欠陥研究の立場から<br>選択制度の立場から<br>危険評価の立場から<br>約款運用の立場から | 79 | 56 | 有澤　　誠（大同生命）<br>鳥井　静夫（日本生命）<br>館野　　豊（安田生命）<br>大竹　喜彦（朝日生命）<br>平尾　正治（第一生命） |
| ライフ・サイエンスと医学 | 80 | 57 | 武見　太郎<br>（前日本医師会会長） |
| これからの保険診査に対するMEの導入と医療情報処理等について | 80 | 57 | 大島　正光<br>（㈶医療情報システム開発センター理事長） |
| 法体系と保険医学 | 80 | 57 | 平尾　正治（第一生命） |
| 保険医学の未来の展望―実務の立場から<br>――パネルディスカッション――<br>はじめに　保険医学をとりまく環境<br>診査技術について<br>新契約査定について<br>支払い査定について<br>医事研究について<br>医務行政関係<br>海外の事情 | 80 | 57 | <br>尼子　隆士（日本生命）<br><br>上野　　武（第一生命）<br>笹森　　繁（日本生命）<br>石川　　洵（三井生命）<br>佐野　松雄（朝日生命）<br>日置　　博（住友生命）<br>藤原　敬男（明治生命） |
| 心疾患治療の最近の進歩 | 81 | 58 | 曲直部寿夫<br>（国立循環器病センター病院長） |
| 脳血管障害の外科治療―現状と将来― | 81 | 58 | 菊池　晴彦<br>（国立循環器病センター） |
| 世界のなかの日本の保険医学 | 81 | 58 | 平尾　正治（第一生命） |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　名（所属） |
|---|---|---|---|
| 保険医学への提言——シンポジウム——<br>生命保険業界をとりまく環境<br><br>災害死亡の支払査定に関する一提案<br>診査医の立場から<br>査定医の立場から<br>西ドイツと日本の保険医学—過去・現在・未来—<br>社医の実態調査から | 81 | 昭和58年 | 三井　美澄（富国生命）<br>伊藤　　晃<br>（生命保険協会）<br>松田　武一（日本生命）<br>北村　辰郎（住友生命）<br>栃原　廣之（第一生命）<br>藤原　敬男（明治生命）<br>岩田　汎夫（朝日生命） |
| 最近のがんに関する課題 | 82 | 59 | 石川　七郎<br>（国立がんセンター総長） |
| 医療保障における課題 | 82 | 59 | 大谷　藤郎<br>（国民金融公庫理事<br>前厚生省医務局長） |
| 血液検査の保険診査への導入——シンポジウム—— | 82 | 59 | 塚本　　宏（明治生命）<br>北村　辰郎（住友生命）<br>斎藤　弘吉（第一生命）<br>中尾　博司（日本生命）<br>神前　　格（朝日生命）<br>相模　嘉夫（大同生命） |
| 事例研究：告知義務と診査過失—保険金支払査定のいろいろ———パネルディスカッション—— | 82 | 59 | 栃原　廣之（第一生命）<br>岩田　汎夫（朝日生命）<br>山田　　郁（協栄生命）<br>片山　利弘（第一生命）<br>依田　　調（住友生命）<br>小森　敏萬（日本生命） |
| 肥満と高脂血症—最近の話題— | 83 | 60 | 中村　治雄<br>（防衛医科大学校教授） |
| 無症候性蛋白尿／血尿のとらえ方 | 83 | 60 | 長沢　俊彦<br>（杏林大学医学部教授） |
| 検定調査士制度10年の歩みと将来的展望——シンポジウム——<br>検定調査士制度の創設の事情<br>検定調査士の実務<br>当社の健康確認統計<br>当社の健康調査統計に関する追加発表<br>検定調査士の選択の効果と限界<br>医務行政の面から<br>検定調査士制度の将来 | 83 | 60 | 中山　稔久（安田生命）<br>有澤　　誠（大同生命）<br>児玉　銑一（三井生命）<br>内野　隆平（住友生命）<br>河合　　博（明治生命）<br>岩田　汎夫（朝日生命）<br>河合　　博（明治生命）<br>栃原　廣之（第一生命） |
| 事例研究：入院給付金査定のいろいろ——パネルディスカッション—— | 83 | 60 | 渡辺　隆夫（千代田生命）<br>神辺　嘉秋（日本生命）<br>依田　　調（住友生命）<br>高田　幾男（第一生命）<br>舛田　耕二（千代田生命）<br>岩田　汎夫（朝日生命） |
| 医師の生涯教育 | 84 | 61 | 阿部　正和<br>（東京慈恵会医科大学学長） |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　名（所属） |
|---|---|---|---|
| これからの生命保険 | 84 | 昭和61年 | 竹内　昭夫<br>（東京大学法学部教授） |
| 皮膚病変の診かたととらえ方―皮膚病変と全身疾患― | 84 | 61 | 長島　正治<br>（杏林大学医学部教授） |
| これからの保険医学 | 84 | 61 | 安藤　博章（日本生命） |
| プロスタグランジン―現状と展望― | 85 | 62 | 早石　　修<br>（大阪医科大学長） |
| 前立腺の予防医学―前立腺がん自然史モデルを中心に― | 85 | 62 | 渡辺　　泱<br>（京都府立医科大学教授） |
| 自殺――シンポジウム――<br>臨床医からみた自殺（自殺の精神病理）<br><br>生命保険から見た自殺(1)<br>生命保険から見た自殺(2)<br>約款（検討）変遷の経緯及び外国約款の紹介<br>社会科学的側面から見た自殺 | 85 | 62 | 沼田　輝夫（日本生命）<br>藤井　久和<br>（大阪府公衆衛生研究所）<br>相模　嘉夫（大同生命）<br>上野　　武（第一生命）<br>渡辺　隆夫（千代田生命）<br>松本　　健（日本生命） |
| 高度障害――シンポジウム――<br>高度障害の変遷と高度障害・障害給付の内容，現行約款運用上の問題点<br>高度障害保険金支払の現状<br>新契約・支払査定実務から見た問題点<br>国内外の障害保障の紹介<br>――パネルディスカッション―― | 85 | 62 | 相模　嘉夫（大同生命）<br><br>山口　　誠（日本生命）<br>小西　克彦（日本生命）<br>岩田　汎夫（朝日生命）<br>山岡　誠二（住友生命） |
| 米国におけるエイズの現状 | 86 | 63 | 浅倉　稔生<br>（米国ペンシルベニア大学医学部教授） |
| 臓器移植とその関連領域 | 86 | 63 | 辻　　公美<br>（東海大学医学部教授） |
| 危険選択に関する今日的問題とそれに対する若干の考察（抄録） | 86 | 63 | 安藤　博章（日本生命） |
| 国民医療と民営保険の将来 | 87 | 平成元年 | 行天　良雄<br>（NHK解説委員） |
| 心臓移植―世界の現況と日本の立場― | 87 | 元 | 小柳　　仁<br>（東京女子医科大学教授） |
| 保険医学と寿命予測について | 87 | 元 | 塚本　　宏（明治生命） |
| 早期死亡の現状と問題点――パネルディスカッション――<br>事例研究<br>早期死亡の査定<br>特に早期死亡と全体死亡との比較<br>早期死亡統計<br>法律・約款とのかかわり | 87 | 元 | 笹森　　繁（日本生命）<br>真柄　俊一（第一生命）<br>小西　克彦（日本生命）<br>薙野　久法（明治生命）<br>三宅　　誠（住友生命）<br>三河　一夫（大同生命）<br>森田　明夫（朝日生命）<br>山田　　充（三井生命） |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　名（所属） |
|---|---|---|---|
| 健康のパラダイム | 88 | 平成２年 | 中川　米造<br>（滋賀医科大学教授） |
| 核医学診断の現状と展望 | 88 | 2 | 小西　淳二<br>（京都大学医学部教授） |
| ライフスタイルと危険選択 | 88 | 2 | 塚本　　宏（明治生命） |
| 選択方法とその問題点―現状と将来展望<br>――パネルディスカッション――<br>社医<br>嘱託医について<br>面接士制度における最近の問題点<br>代用診査<br>人間ドック | 88 | 2 | 北島　武志（第一生命）<br><br>磯浪　　亘（日本生命）<br>真柄　俊一（第一生命）<br>竹川　　裕（住友生命）<br>嘉藤田　進（安田生命）<br>三河　一夫（大同生命） |
| 暮らしのなかへ“健康意識”を | 89 | 3 | 中尾　喜久<br>（自治医科大学学長） |
| 疾病の予後 | 89 | 3 | 岡本　　浩（三井生命） |
| AIDS and Life underwriting Entering the Second decade of the HIV epidemic | 89 | 3 | Dr. M.L. Hefti<br>（スイス再保） |
| The Future of Medical Screening Technologies for Life Insurance Applicants | 89 | 3 | Dr. H.K. Kraus<br>（ミュンヘン再保） |
| 生命保険における医学的情報の取り扱い方<br>――パネルディスカッション――<br>診査における医学的情報の収集<br>新契約査定における診断書の意義と問題点<br>保険金給付金支払い時における書類について<br>臨床の立場から<br>その他の問題 | 89 | 3 | 司会<br>佐々木光信（千代田生命）<br>日野　智雄（日本生命）<br>宮副　一郎（安田生命）<br>前田　敏朗（富国生命）<br>中津　喬義（千代田生命）<br>佐野　史和（明治生命） |
| 肝・胆・膵外科，最近の進歩 | 90 | 4 | 森岡　恭彦<br>（関東労災病院長） |
| 疾病の予後（その２）―入院期間と死亡危険― | 90 | 4 | 岡本　　浩（三井生命） |
| 高齢化，少産化社会と将来の生命保険<br>――パネルディスカッション――<br>少産社会<br>シルバー産業<br>国際化<br>診査と査定 | 90 | 4 | 司会<br>田中　穂積（住友生命）<br>神田　重治（第一生命）<br>大山　司郎（明治生命）<br>高山　　学（安田生命）<br>後藤　牧人（日本生命）<br>ゲスト<br>梅津　哲二（大同生命）<br>相模　嘉夫（大同生命）<br>小原甲一郎（千代田生命）<br>石川　　彪（生命保険協会） |
| 老年医学の問題点 | 91 | 5 | 亀山　正邦<br>（住友病院院長） |
| 心疾患外科治療最近の進歩 | 91 | 5 | 川島　康生<br>（国立循環器病センター病院長） |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　名（所属） |
|---|---|---|---|
| 疾病と平均余命 | 91 | 平成5年 | 岡本　　浩（三井生命） |
| 保険医学とAIDS——パネルディスカッション—— | 91 | 5 | 司会<br>薙野　久法（明治生命） |
| AIDSとAIDSの疫学 | | | 三河　一夫（大同生命） |
| 流行規模の推計と生命保険への影響等の試算 | | | 牧野　弘志（第百生命） |
| 欧米における保険医学的経験と対応 | | | 森田　明夫（朝日生命） |
| 日本における保険医学的対応—告知書— | | | 前田　　優（第一生命） |
| 日本における保険医学的対応—HIV検査— | | | 磯浪　　亘（日本生命） |
| 腎臓と高血圧 | 92 | 6 | 黒川　　清<br>（東京大学医学部教授） |
| ヒト全遺伝子解明の現状と展望 | 92 | 6 | 清水　信義<br>（慶應義塾大学医学部教授） |
| 脳死・臓器移植と生命保険<br>——パネルディスカッション—— | 92 | 6 | 司会<br>小林三世治（第一生命） |
| 臓器移植の歴史 | | | 糸川　英樹（住友生命） |
| 脳死とは | | | 脇　　耕二（日本生命） |
| 心臓移植・肺移植・心肺移植 | | | 嘉藤田　進（安田生命） |
| 肝移植・膵移植 | | | 石丸　博文（朝日生命） |
| 腎移植 | | | 殿谷　　栄（明治生命） |
| 高血圧と心臓 | 93 | 7 | 矢崎　義雄<br>（東京大学医学部教授） |
| 生命保険とプライバシー | 93 | 7 | 古瀬　政敏<br>（立命館大学経済学部教授） |
| 世界的に忍びよる生命保険危険選択への脅威 | 93 | 7 | Dr. R.J. Pokorski<br>（スイス再保） |
| 診査医の軌跡—診査録を振り返って— | 93 | 7 | 北島　武志（第一生命） |
| 生前給付型保険と保険医学—リビング・ニーズ特約をめぐる諸課題—<br>——パネルディスカッション—— | 93 | 7 | 司会<br>薙野　久法（明治生命） |
| 商品開発の背景と特徴 | | | 西川　征洋（日本生命） |
| 支払時の対応 | | | 清水　功基（住友生命） |
| 支払（査定）状況 | | | 由本　光次（明治生命） |
| 海外事情 | | | 井上　公俊（第一生命） |
| 顧客プライバシー保護 | | | 国光　一裕（安田生命） |
| 内臓脂肪と文明 | 94 | 8 | 垂井清一郎<br>（共済組合連合会大手前病院長） |
| 循環器疾患の予後の改善 | 94 | 8 | 細田　瑳一<br>（東京女子医科大学教授）<br>田村　光司<br>（東京女子医科大学） |
| 社医の役割—その将来像— | 94 | 8 | 濱口　知昭（日本生命） |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　名（所属） |
|---|---|---|---|
| 多様化する商品と保険医学――パネルディスカッション――<br><br>海外における保険商品<br>生前給付型保険と医学的危険選択<br>介護保険<br>LTD（Long Term Disability） | 94 | 平成８年 | 司会<br>宮副　一郎（安田生命）<br>牧野　弘志（スイス再保）<br>小野　一朗（日本生命）<br>吉本　智信（安田火災）<br>高山　　学<br>（ユナム・ジャパン） |
| 肝胆膵癌の病態と予後 | 95 | 9 | 有山　　襄<br>（順天堂大学医学部教授） |
| 超高齢社会と介護問題 | 95 | 9 | 池上　直己<br>（慶応義塾大学医学部教授） |
| 日本保険医学会の更なる発展に向けて | 95 | 9 | 濱口　知昭<br>（日本生命） |
| 先端医療と保険医学――パネルディスカッション――<br><br>当社「高度先進医療特約」について<br>造血幹細胞移植<br>鏡視下手術とIVR（Interventional Radiology）<br>レーザー治療 | 95 | 9 | 司会<br>中川　和寿（三井生命）<br>辻　　泰二（千代田生命）<br>手塚　裕章（日本生命）<br>中尾　修一（朝日生命）<br>姫野　陽一（第一生命） |
| 医療と社会 | 96 | 10 | 養老　孟司<br>（北里大学大学院教授） |
| 医療データ通信及び電子カルテ | 96 | 10 | 開原　成允<br>（国立大蔵病院長） |
| 生命保険におけるパラダイムの変化 | 96 | 10 | 濱口　知昭（日本生命） |
| 悪性新生物と保険医学――パネルディスカッション――<br><br>診断法の進歩<br>癌の内科的治療法<br>悪性腫瘍と外科的治療<br>がん保険の給付 | 96 | 10 | 司会<br>嘉藤田　進（安田生命）<br>鈴木　　聡（日本生命）<br>高松　芳郎（第一生命）<br>北澤　　正（明治生命）<br>宇都出公也<br>（アメリカン・ファミリー）<br>ゲスト<br>牧野　弘志（スイス再保） |
| 異状死と生命保険 | 97 | 11 | 佐藤　喜宣<br>（杏林大学医学部教授） |
| 日本における結核症の現状と問題点 | 97 | 11 | 森　　亨<br>（結核研究所所長） |
| 情報処理技術の進歩と危険選択―イメージ査定の問題点を中心として――パネルディスカッション――<br>イメージ査定のビデオ紹介<br>イメージ査定の現状―アンケート調査より―<br>診査と査定における心電図処理技術の進歩<br>インターネットと危険選択 | 97 | 11 | 司会<br>佐々木光信（千代田生命）<br>横山菜穂子（明治生命）<br>原　　眞（ソニー生命）<br>中尾　修一（朝日生命）<br>横山　　哲（住友生命） |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　名（所属） |
|---|---|---|---|
| 病歴情報と身体所見の診断への寄与（抄録） | 98 | 平成12年 | 福井　次矢<br>（京都大学教授） |
| 精神科診療の最近の話題（抄録） | 98 | 12 | 松下　正明<br>（東京都精神医学総合研究所所長） |
| 保険医学の今日的課題 | 98 | 12 | 薙野　久法<br>（明治生命） |
| 海外における危険選択の現状と動向<br>―パネルディスカッション― | 98 | 12 | 司会　井上　公俊<br>（第一生命） |
| 海外の現状 パート１：情報収集手段（その１） | | | 牧野　弘志<br>（スイス・リー・サービス） |
| 海外の現状 パート１：情報収集手段（その２） | | | 大橋　茂充<br>（朝日生命） |
| 海外の現状 パート２：査定システム | | | 内山　武史<br>（第一生命） |
| 海外の現状 パート３：商品 | | | 牧野　弘志<br>（スイス・リー・サービス） |
| 新しい危険選択の考え方 | | | 後藤　牧人<br>（ジェネラルコロンリー） |
| ヨーロッパにおける危険選択 | | | 由本　光次<br>（ミューニック　リー　ジャパンサービス） |
| 日本における“心疾患の予後”研究の現況と展望 | 99 | 13 | 笠貫　　宏<br>（東京女子医科大学付属心臓血圧研究所所長） |
| Genetic Testing and Insurance　－What is the International Situation？ | 99 | 13 | Achim Regenauer<br>（ミューニック　リーサービス） |
| Influence of Emerging and Re-emerging Infectious Diseases to Life Insurance | 99 | 13 | Jan von Overbeck<br>（スイス・リー・サービス） |
| Hypertrophic Cardiomyopathy：Risk Factors for Life and Living Benefits Insurance, Association of Life Insurance Medical Directors of Japan | 99 | 13 | Robert Pokorski<br>（ジェネラルコロンリー） |

## 報　　告

| 題　　目 | 巻 | 年 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|
| 確率楕円による血圧分布とその予後 | 65 | 昭和42年 | 岸　哲雄 |
| 標準体死亡率の一般傾向について | 65 | 42 | 今宮俊一郎 |
| 生命保険会社における経験死亡の死因について | 65 | 42 | 塚本　宏 |
| 標準下体死亡率調査のための胸部X線，心電図コードについて | 65 | 42 | 安藤　博章 |
| 生命保険における心電図検査とその予後 | 66 | 43 | 三原　通 |
| 標準下体保険死亡率調査報告 | 66 | 43 | |
| 　標準下体死亡率調査の意義，経過，調査結果概況 | | | 鳥井　静夫　他 |
| 　現症・既往症・複合欠陥の死亡状況について | | | 吉江幹之助　他 |
| 　高血圧欠陥の死亡状況について | | | 福田　譲　他 |
| 　主要欠陥の死因別死亡状況について | | | 塚本　宏 |
| 　死亡指数の信頼区間の推定について | | | 長岡　克文　他 |
| 資料　昭和44年度より使用する「50項目死因分類表」について | 66 | 43 | 吉江幹之助　他 |
| 体格について | 67 | 44 | 高橋　静 |
| 「糖尿病患者の死亡率調査」に関する中間報告 | 67 | 44 | 佐々　千之 |
| アクチュアリー側からみた災害保障特約の現状と問題点 | 67 | 44 | 福地　誠 |
| 医務側からみた災害保障特約の現状と問題点 | 67 | 44 | 加藤　邦男 |
| 高度欠陥体の死亡率調査について | 68 | 45 | |
| 　欠陥体死亡率調査に関する文献的考察 | | | 上野　武 |
| 　今回の調査計画の概要 | | | 福田　譲 |
| 高血圧と生命予後<br>　―当社の申込者についての観察― | 69 | 46 | 水溜　延武 |
| 標準体における経験死亡の死因について | 69 | 46 | 上野　武 |
| 資料　日本における死因と危険選択 | 69 | 46 | 荒川　三郎　他 |
| 高度欠陥体の死亡率調査について　予後調査の進捗状況 | 70 | 47 | 荒川　三郎 |
| 標準体死亡率の分析 | 70 | 47 | 木戸　群 |
| 糖尿陽性者の予後―わが社の経験を中心として― | 71 | 48 | 安藤　博章 |
| 標準下体および高度欠陥死亡率調査報告 | 71 | 48 | |
| 　欠陥体死亡率調査の結果概況 | | | 荒川　三郎 |
| 　標準下体の欠陥別死亡状況 | 71 | 48 | |
| 　　体格・肺結核・尿異常など | | | 浜崎　晃則 |
| 　　心疾患・心音異常・脈拍異常・リウマチ性疾患・職業関係について | | | 上野　武 |
| 　　高血圧の死亡率 | | | 新井　正雄 |
| 　　高血圧の死因 | | | 山田　郁 |
| 　高度欠陥体・標準下体の欠陥別死亡状況 | 71 | 48 | |
| 　　肝臓・胆のう異常 | | | 塚本　宏 |
| 　　胃・十二指腸潰瘍など | | | 神辺　嘉秋 |

| 題　　目 | 巻 | 年 | 氏　名（所属） |
|---|---|---|---|
| 標準体死亡率調査の死因別死亡状況および高度欠陥体の欠陥別死亡状況 | 72 | 昭和49年 | |
| 　標準体死亡率調査の概要 | | | 石田　清志 |
| 　標準体死亡率調査死因別死亡状況について | | | 中山　稔久 |
| 　高度欠陥体死亡率―呼吸器・内分泌系欠陥および新生物― | | | 上野　　武　他 |
| 眼底検査の生命保険診査への応用 | 73 | 50 | 斎藤　弘吉 |
| 高度欠陥体の欠陥別死亡状況―循環器系欠陥について― | 73 | 50 | 新井　正雄　他 |
| 共同研究を始めるにあたって | 74 | 51 | 大竹　喜彦 |
| 循環器疾患発症の進展要因ときっかけ要因 | 74 | 51 | 福田　安平　他 |
| 第３次標準下体死亡率調査における欠陥別死亡状況 | 74 | 51 | |
| 　序論 | | | 平尾　正治 |
| 　体格・呼吸器・消火器・職業 | | | 神辺　嘉秋　他 |
| 　循環器・尿異常など | | | 上野　　武　他 |
| 　高血圧 | | | 塚本　　宏　他 |
| 　標準下体・死亡・廃疾者・名寄カード集計について | | | 加藤　邦男 |
| 国鉄循環器管理研究会との共同研究（昭和51年度）発表にあたって | 75 | 52 | 館野　　豊 |
| 血圧値の２時点間変動について | 75 | 52 | 渡辺　宏延　他 |
| 血圧値変動と脳・心事故について | 75 | 52 | 塚本　　宏　他 |
| 動的にみた血圧値と脳心発作の発生状況 | 75 | 52 | 実川　　浩　他 |
| 国鉄循環器管理研究会との共同研究（昭和51年度）むすびとして | 75 | 52 | 館野　　豊 |
| 高度欠陥体死亡率調査 | 75 | 52 | |
| 　高血圧の死亡率 | | | 木下　和之　他 |
| 　高血圧の死因 | | | 上野　　武　他 |
| 　まとめ | | | 平尾　正治 |
| 脳卒中心疾患の発症要因の分析―多時点血圧変動と治療要因について― | 76 | 53 | 佐野　松雄　他 |
| 脳卒中および心発作の予後―管理集団からの発生例について― | 76 | 53 | 前田　　裕　他 |
| 標準体死亡率調査死因別死亡状況について | 76 | 53 | 河合　　博 |
| 高血圧管理の効果 | 77 | 54 | 福田　安平　他 |
| 循環器治療と５年連続血圧値変動との関連について | 77 | 54 | 渡辺　宏延　他 |
| 胸部Ｘ線および心電図所見に関する標準下体死亡率調査 | 77 | 54 | 上野　　武　他 |
| 廃疾，障害，疾病関係約款の医学的検討 | 77 | 54 | 平尾　正治　他 |
| Prospective Follow-up Studyによる日本人糖尿病患者の長期予後調査―調査の概要と登録後２年までの成績― | 78 | 55 | 三原　俊彦　他 |
| Changes in ECG in 5 Years | 78 | 55 | 岡本　　浩　他 |
| 約款の医学的検討(2) | 78 | 55 | 平尾　正治　他 |
| 当社の欠陥研究―４分の１世紀の経験と総括― | 79 | 56 | 川本　　久（日本生命） |

| 題　　目 | 巻 | 年 | 氏　名（所属） |
|---|---|---|---|
| Prospective Follow-up Studyによる日本人糖尿病患者の長期予後調査 | 79 | 昭和56年 | |
| (1)　研究の構想とその概略 | | | 安藤　博章　他（日本生命） |
| (2)　3年間追跡調査の成績<br>—死亡率および死因におよぼす危険因子の検討(その1)— | | | 三原　俊彦　他（東京女子医科大学糖尿病センター） |
| Prospective Follow-up Studyによる日本人糖尿病患者の長期予後調査—4年間追跡調査の成績— | 80 | 57 | |
| (1)　糖尿病性細小血管症（神経障害，網膜症，腎症）の推移 | | | 三原　俊彦　他（東京女子医科大学糖尿病センター） |
| (2)　死亡率におよぼす危険因子の検討（その2） | | | 上野　　武　他（第一生命） |
| 標準体における死因の分析 | 80 | 57 | 佐野　松雄(朝日生命) |
| 約款の医学的検討（その3） | 80 | 57 | 平尾　正治　他（第一生命） |
| (1)　新手術給付の列挙手術名を中心に | | | 北村　辰郎(住友生命) |
| (2)　新約款の精神障害範囲を中心に | | | 田中　成美(第一生命) |
| 契約選択の構造—死亡危険の測定を中心として— | 81 | 58 | 安藤　博章(日本生命) |
| Prospective Follow-up Studyによる日本人糖尿病患者の長期予後調査—5年間追跡調査— | 81 | 58 | |
| (1)　糖尿病患者の血管障害の進展に関する諸因子の検討 | | | 三原　俊彦　他（東京女子医科大学糖尿病センター） |
| (2)　死亡率におよぼす危険因子の検討（その3） | | | 佐野　松雄　他（日本保険医学会共同研究班） |
| 約款の医学的検討（その4） | 81 | 58 | 平尾　正治　他（第一生命） |
| Prospective Follow-up Studyによる日本人糖尿病患者の長期予後調査—糖尿病患者の死因に関与する諸因子の検討（5年間追跡調査の成績）— | 82 | 59 | 三原　俊彦　他（東京女子医科大学糖尿病センター） |
| 保険医学からみた体格の諸問題 | 83 | 60 | 塚本　　宏(明治生命) |
| Prospective Follow-up Studyによる日本人糖尿病患者の長期予後調査—7年間追跡調査の成績— | 83 | 60 | |
| (1)　糖尿病のタイプ死亡率，死因との関係 | | | 三原　俊彦　他（東京女子医科大学糖尿病センター） |
| (2)　多変量解析によるインスリン非依存型糖尿病の死亡におよぼす危険因子の検討 | | | 上野　　武　他（第一生命） |
| 日本全会社生命表（1979～80）の概要について | 83 | 60 | 沖田　俊幸　他（日本生命） |
| 第5次標準下体死亡率調査における死亡状況—総論—第五次調査の概要— | 83 | 60 | 佐野　松雄　他（朝日生命） |

| 題　　目 | 巻 | 年 | 氏　名（所属） |
|---|---|---|---|
| 疾病関係保険における入院状況について | 83 | 昭和60年 | 佐野　松雄　他<br>（朝日生命） |
| Prospective Follow-up Studyによる日本人糖尿病患者の長期予後調査―7年間追跡調査の成績―<br>(1)　IDDMおよびNIDDMにおける細小血管症（網膜症，腎症，神経障害）の頻度とその推移<br>(2)　インスリン非依存型糖尿病患者の死亡率におよぼす危険因子の検討 | 84 | 61 | 三原　俊彦　他<br>（東京女子医科大学糖尿病センター）<br>上野　　武　他<br>（第一生命） |
| 成人集団における長期にわたる多項目健康診断成績よりみた肝疾患ならびに$HB_S$抗原・抗体の疫学 | 84 | 61 | 佐久間光史　他<br>（国鉄中央保健管理所） |
| 第5次標準下体死亡率調査における死亡状況―各論― | 84 | 61 | 塚本　　宏　他<br>（明治生命） |
| 第3次あり方委員会報告 | 84 | 61 | 塚本　　宏　他<br>（明治生命） |
| Prospective Follow-up Studyによる日本人糖尿病患者の長期予後調査―7年間追跡調査の成績―<br>(1)　インスリン非依存型糖尿病における肥満度と生命予後との関係<br>(2)　糖尿病患者の生命予後判定に関する判別分析の医学的査定への応用 | 85 | 62 | 三原　俊彦　他<br>（東京女子医科大学糖尿病センター）<br>田中　穂積　他<br>（住友生命） |
| 成人集団における長期にわたる多項目健康診断成績よりみた肝疾患の疫学および生命予後に関する研究<br>(1)　B型肝炎ウィルスキャリアの死亡率について<br>(2)　肝硬変，肝癌死亡のリスクファクターの検討 | 85 | 62 | 豊川　秀治　他<br>（明治生命）<br>斉藤　宣照　他<br>（JR東日本中央保健管理所） |
| 標準体死亡率調査の目的と意義 | 85 | 62 | 上野　　武　他<br>（第一生命） |
| 日本生命の危険選択におけるコンピューターシステムについて | 86 | 63 | 笹森　　繁（日本生命） |
| Prospective Follow-up Studyによる日本人糖尿病患者の長期予後調査―10年間追跡調査の成績―<br>(1)　インスリン非依存型糖尿病の生命予後におよぼす高血圧，高脂血症の影響<br>(2)　インスリン非依存型糖尿病の長期予後におよぼす危険因子の検討 | 86 | 63 | 三原　俊彦　他<br>（東京女子医科大学糖尿病センター）<br>田村　慶三　他<br>（第一生命） |
| 死亡率研究の意義について | 86 | 63 | 佐野　松雄　他<br>（朝日生命） |

| 題　　目 | 巻 | 年 | 氏　名（所属） |
|---|---|---|---|
| 臓器移植・脳死 | 87 | 平成２年 | 嘉藤田　進　他<br>（安田生命） |
| 契約年齢別死亡統計の作成 | 87 | 2 | 白水　知仁　他<br>（日本生命） |
| 医学的情報交換制度について | 87 | 2 | 三宅　　誠　他<br>（住友生命） |
| 支払い査定における診断書の取扱い | 87 | 2 | 小林三世治　他<br>（第一生命） |
| 第５回日本全会社生命表について | 88 | 2 | 白水　知仁　他<br>（日本生命） |
| $V_{1\sim2}$，$V_{1\sim3}$，QS型心電図の予後調査 | 89 | 3 | 梅津　哲二　他<br>（大同生命） |
| 再診査時の血圧・尿異常の出現率について | 89 | 3 | 伊東　直文　他<br>（第一生命） |
| 日本保険医学会第５次共同研究について | 89 | 3 | 小林三世治　他<br>（第一生命）<br>細田　瑳一　他<br>（東京女子医科大学） |
| 臨床検査と保険医学 | 90 | 4 | 磯浪　　亘<br>（日本生命） |
| 約款の医学的検討（その５） | 90 | 4 | 相模　嘉夫　他<br>（大同生命） |
| 経皮経管冠動脈形成術（PTCA）施行例の予後調査―１枝病変を中心とした検討― | 90 | 4 | 小林三世治　他<br>（第一生命）<br>細田　瑳一　他<br>（東京女子医科大学） |
| 非喫煙者割引制度の導入について | 90 | 4 | 白水　知仁　他<br>（日本生命） |
| 統一告知書の改正について | 90 | 4 | 医務委員会 |
| 健康管理証明書扱いにおけるHb値の選択について | 91 | 5 | 兼子　敏昭　他<br>（第一生命） |
| 新疾病入院保障契約の分子統計分析について―入院給付日数を中心に― | 91 | 5 | 白水　知仁　他<br>（日本生命） |
| 心筋梗塞症例の予後調査―１枝病変を中心とした検討― | 91 | 5 | 小林三世治　他<br>（第一生命）<br>細田　瑳一　他<br>（東京女子医科大学） |
| 入院給付後の死亡率調査―特に重症疾患について― | 92 | 6 | 前田　　優<br>（第一生命） |
| 血圧値別にみた成人病入院給付率について | 92 | 6 | 幾嶋　泰郎　他<br>（第一生命） |

| 題　　目 | 巻 | 年 | 氏　名（所属） |
|---|---|---|---|
| 心臓ペースメーカー植え込み症例の予後 | 92 | 平成6年 | 本間　春城　他<br>（第一生命）<br>細田　瑳一　他<br>（東京女子医科大学） |
| 当社における医的理由による決定前契約確認の状況 | 93 | 7 | 横山　　哲（住友生命） |
| 協会経験死亡率における死因別死亡率の推移 | 93 | 7 | 白水　知仁　他<br>（日本生命） |
| 拡張型心筋症の予後 | 93 | 7 | 中西　幸子　他<br>（朝日生命）<br>細田　瑳一　他<br>（東京女子医科大学） |
| 修正死亡指数による条件体分析と保険体評価基準の見直し | 94 | 8 | 清水　一良<br>（住友生命） |
| 持続性心室頻拍症の予後 | 94 | 8 | 中西　幸子　他<br>（朝日生命）<br>細田　瑳一　他<br>（東京女子医科大学） |
| 遺伝子検査と生命保険 | 95 | 9 | 小林三世治　他<br>（第一生命） |
| 大動脈疾患術後の予後 | 95 | 9 | 中西　幸子　他<br>（朝日生命）<br>細田　瑳一　他<br>（東京女子医科大学） |
| 危険選択としての腫瘍マーカーの応用 | 96 | 10 | 牧野　弘志<br>（スイス再保） |
| ホルター心電図検査施行例の予後 | 96 | 10 | 今泉　恵次　他<br>（日本生命）<br>笠貫　　宏　他<br>（東京女子医科大学） |
| 心房細動症例の予後 | 97 | 11 | 今泉　恵次　他<br>（日本生命）<br>笠貫　　宏　他<br>（東京女子医科大学） |
| 健康診断とその意義 | 98 | 12 | 佐々木光信<br>（千代田生命） |
| 循環器疾患の予後と医療情報データベース | 98 | 12 | 田村　光司　他<br>（東京女子医科大学附属日本心臓血圧研究所）<br>細田　瑳一<br>（榊原記念病院） |
| 特定疾病保障保険調査報告―香港・マレーシア・シンガポール― | 99 | 13 | 後藤　牧人<br>（ジェネラルコロンリー） |

資　　料

| 題　　目 | 巻 | 号 | 年 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|---|
| 死亡表と体格診査の関係（大意） | 1 | 1 | 明治35年 | 矢野　恒太 |
| 第２回国際生命保険診査医会に於ける演説抄録 | 1 | 1 | 35 | 中浜東一郎抄 |
| 肺結核及び肺気腫の素因たる胸廓の変状に就て | 1 | 1 | 35 | 尼子　四郎抄 |
| 肺結核の早期診断に関する輓近の研究 | 1 | 1 | 35 | 尼子　四郎抄 |
| 亜爾箇保児中毒と生命保険 | 1 | 1 | 35 | 尼子　四郎抄 |
| 所謂麻痺性胸廓に就て | 1 | 1 | 35 | 尼子　四郎抄 |
| 酒客の保険可能に就て | 1 | 1 | 35 | 尼子　四郎抄 |
| 死亡統計表 | 1 | 1 | 35 | 石岡繁太郎編 |
| 明治生命保険株式会社検尿成績表 | 1 | 1 | 35 | 明治生命保険株式会社 |
| 帝国生命保険株式会社診査成績表 | 1 | 1 | 35 | 帝国生命保険株式会社 |
| 黒人種と生命保険 | 2 | 2 | 36 | |
| 癌腫による死亡に就て | 2 | 2 | 36 | |
| 死亡統計表 | 2 | 2 | 36 | |
| 死亡生残表 | 2 | 2 | 36 | |
| 告知義務不履行の判決例 | 2 | 2 | 36 | |
| 生命保険の材料として急性関節リユウマチに就て | 2 | 2 | 36 | |
| 保険上より観察せる喘息 | 2 | 3 | 36 | |
| 結核に関して１，２の測定 | 2 | 3 | 36 | |
| 妊婦は保険すべきか | 2 | 3 | 36 | |
| 50歳以上の保険申込人の承諾に就て | 2 | 3 | 36 | |
| 脂肪過多に就て | 2 | 3 | 36 | |
| 死亡生残表（矢野氏第２表） | 2 | 3 | 36 | |
| 死亡原因類別調査報告書 | 2 | 4 | 36 | 宮入慶之助 |
| 生命保険に於ける癌腫 | 2 | 4 | 36 | |
| 癌腫の増加 | 2 | 4 | 36 | |
| 自殺の原因について | 2 | 4 | 36 | |
| 肺結核の早期診断 | 2 | 4 | 36 | |
| ゴータ「バンク」の新死亡表（万国保険医協会会報第２巻第４号載） | 3 | 5 | 37 | 「プロフエッソル」「ドクトル」フロールシュツ　述東耀生抄録 |
| （雑纂）大戦争に於ける軍人死亡の比較に就て（承前） | 3 | 6 | 37 | 田口　他男 |
| 抄録（本論は昨年11月英国インスチチュート・オブ・アクチュアリに於ける演説を抄訳したるものなり） | 3 | 8 | 37 | ロデリック・マッケンヅイー・ムーア（松崎生抄訳） |
| 本邦７会社の死亡経験 | 4 | 6 | 38 | 松崎故一郎 |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|
| 弱体の生命保険に就て | 4　11 | 明治38年 | ウイリヤム・ヒューズ |
| 体格等位標準表 | 4　12 | 38 | 三島　通良 |
| 所謂「イデンチテート」事件の判決例 | 4　12 | 38 | 神前診査医 |
| 既往症隠蔽の判決例 | 5　4 | 38 | |
| 結核殊に肺結核素因存在の早期確定（抄訳）（第１席） | 5　4 | 39 | エフ・マルチュース |
| 結核殊に肺結核素因存在の早期確定（抄訳）（第２席） | 5　4 | 39 | アー・ゴットスタイン |
| 一定の死亡統計表を調製すること | 5　14 | 39 | 進藤隆之助 |
| 職業と結核死亡とに就て | 5　16 | 39 | 大島　　樑 |
| 診査上視診の任務（抄訳） | 6　1 | 40 | 三井武三郎 |
| 結核殊に肺結核素因存在の早期診断（抄訳） | 6　1 | 40 | フロルシュツ |
| 有害の蛋白尿との鑑別に関する新方法（抄訳） | 6　2 | 40 | ヒングストン・コオックス |
| 診査上視診の任務（抄訳）（前号の続き） | 6　2 | 40 | 三井武三郎 |
| 麻痺狂の早期診断（医学中央雑誌第51号） | 6　3 | 40 | 森田　正馬 |
| 結核症診断の一進歩 | 7　1 | 41 | 中浜東一郎 |
| 潜在性及既発性器質的脳脊髄疾患に及ぼす外傷の影響（抄訳） | 7　1 | 41 | ヨット・リーヂンゲル |
| 生命保険会社の外国保険に於ける種痘規定（抄訳） | 7　1 | 41 | エル・パイフェル |
| 遭難保険会社に於ける診査医の職責（抄訳） | 7　1 | 41 | パウル・フランク |
| 診査医必携（プロビデントセービング生命保険会社）（抄訳） | 8　2 | 42 | |
| 有隣生命保険会社死亡数及結核死亡数 | 8　1 | 42 | |
| 第６回国際労働者保険会議（抄録） | 8　1 | 42 | グ　ロ　ス |
| 社会政策的保険法に於ける医師の地位（抄録） | 8　1 | 42 | ケ　ー　ル |
| 労働者保険月刊雑誌（抄録） | 8　1 | 42 | |
| 災禍の結果としての自殺（抄録） | 8　1 | 42 | |
| 糖尿の生命保険上の価値（ブロッホ氏抄録） | 8　1 | 42 | 伊藤　斌夫 |
| 診査医制度（ミューチュアル生命保険会社） | 8　1 | 42 | 鈴木　太郎 |
| 死亡被保険者病名男女別統計表 | 8　2 | 42 | 明治生命 |
| 肺癆・脳溢血・癌腫死亡百分比例 | 8　2 | 42 | |
| 職業と死亡率（抄訳） | 8　2 | 42 | |
| 耳疾と保険（抄録） | 8　2 | 42 | |
| 診査医必携（プロビデントセービング生命保険会社）（承前）抄訳 | | | |
| 労働者保険に於ける医師の職務並に地位（抄録） | 8　3 | 42 | ルドルフ・レンホック |
| 生命保険と職業誓約（抄録） | 8　3 | 42 | ハーベル・ドレーゼ |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|
| 万国共通死亡原因類別修正意見 | 8　4 | 明治42年 | 二階堂保則 |
| 労働者保険に於ける医師の職務並に地位（承前）（抄録） | 8　4 | 42 | ルドルフ・レンホッフ |
| 生命保険と医師（抄訳） | 8　4 | 42 | 三井武三郎 |
| 万国委員決定疾患名称類別 | 8　4 | 42 | 二階堂保則 |
| 生命保険に関する医師の職責（抄録） | 8　5 | 42 | 西牧　保市 |
| 地方病研究報告（Ⅰ） | 9　1 | 42 | 藤浪　教授<br>中村助教授 |
| 亜爾箇保児中毒と結核との関係 | 9　1 | 42 | S・I生抄 |
| 結核死？　黄疸死？ | 9　1 | 43 | 洪艮　九郎 |
| 地方病研究報告（前号の続） | 9　2 | 43 | 藤浪　教授<br>中村助教授 |
| 職業と死亡率 | 9　2 | 43 | |
| 人の命数（生存希望） | 9　2 | 43 | |
| 契約経過１・２・３年未満死因別統計表（其１） | 9　2 | 43 | |
| 結核と生命保険 | 9　3 | 43 | クラインシュミット（TM生訳） |
| 死亡に関する共同的調査（未完） | | | 原島　　茂 |
| 梅毒血清診断法の生命保険に対する価値 | 9　4 | 43 | フリツムンク（TM生抄訳） |
| 肺疾患の診断に於ける重要徴候たる筋の強直性及び軽触法 | 9　4 | 43 | ドクトル・ボッテレガー（高田他家雄訳） |
| 死亡に関する共同的調査（承前） | 9　5 | 43 | 原島　　茂訳 |
| 初期肺結核の重要診法たる肺尖打診法 | 9　5 | 43 | ドクトル・クロップストッタ述（高田他家雄訳） |
| 死亡に関する共同的調査（承前） | 9　6 | 43 | 原島　　茂訳 |
| 診査上知り難き要項 | 9　5 | 43 | オスカア・エムデン（TM生抄訳） |
| 診査医の実地意見 | 9　6 | 43 | シュニッエル（TM生抄） |
| 米国及び英国の新統計に依れる粉塵中の職業者の肺結核死亡 | 9　6 | 43 | マルガレテ・ワインベルク（SI生抄訳） |
| 準健康体に対する保険に就て | 10　1 | 44 | ドクトル・グリーン著（原島　　茂訳） |
| 酒と生命保険 | 10　2 | 44 | William Bingham |
| 診査に於ける線腫脹の価値 | 10　2 | 44 | ローベルト・パールト |
| グリーン教授の診査医論 | 10　3 | 44 | 原島　　茂訳 |
| 防止することを得べき疾病との戦闘 | 10　4 | 44 | 原島　　茂訳 |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|
| 実地医師に必要なる生命保険上の諸問題に就て | 10　4 | 明治44年 | ドクトル・ファイルヘンフェルト述（高田他家雄訳） |
| 実地医師に必要なる生命保険上の諸問題に就て | 10　5 | 44 | ドクトル・ファイルヘンフェルト述（高田他家雄訳） |
| 防止する事を得べき疾病との戦闘（Ⅱ） | 10　5 | 44 | 原島　　茂訳 |
| ばいゑるんよりの手紙 | 10　5 | 44 | 竹内作次郎訳 |
| 医師と私設保険 | 10　5 | 44 | ファイルヘインフェル述（T・M生訳） |
| 保険医学断片 | 10　5 | 44 | マットレイ述（高田他家雄訳） |
| 日本人と独逸人の死因と年令の関係 | 10　5 | 44 | 竹内作次郎訳 |
| 肺結核の早期診断 | 10　5 | 44 | 竹内作次郎訳 |
| プロイセンに於ける肺結核の減退 | 10　5 | 44 | 竹内作次郎訳 |
| 国際労働者保護会 | 10　5 | 44 | 竹内作次郎訳 |
| 独乙に於ける銘酒屋と其の鎮圧策 | 10　5 | 44 | エシリア・フォン・カッタック述（原島茂訳） |
| 英国保険法案 | 10　6 | 44 | 竹内作次郎訳 |
| 独乙國医師経済保険会第11回定期総会 | 10　6 | 44 | 竹内作次郎訳 |
| 寿命の延長 | 10　6 | 44 | ラート著（大山稲三郎訳） |
| 診査医への実地指導 | 10　6 | 44 | 三井武三郎訳 |
| 実地医師に必要なる生命保険上の諸問題に就て | 11　1 | 44 | ドクトル・ファイルヘンフェルト述（高田他家雄訳） |
| 煙草と健康 | 11　1 | 45 | ドクトル・リシジ述（SH生訳） |
| 英国国民保険法案 | 11　2 | 45 | 竹内作次郎訳 |
| 英国倫敦ラヂウム治療所 | 11　2 | 45 | 竹内作次郎訳 |
| 肺結核患者に関する通告及取扱 | 11　3 | 45 | SH生訳 |
| 世界に於ける出産率減途の趨勢 | 11　3 | 45 | エイ，ニュスホルム述（SH生訳） |
| 瑞西保険法案 | 11　3 | 45 | 竹内作次郎訳 |
| 生命保険嘱託医に対する実務上の心得 | 11　3 | 45 | 竹内作次郎訳 |
| 生命保険嘱託医実務上の心得（承前） | 11　4 | 大正元年 | 竹内作次郎訳 |
| 世界に於ける生産率減途の趨勢 | 11　4 | 元 | ニュースホルム述（SH生訳） |
| 被保険者の既往症又は現在の隠蔽に就いて | 11　4 | 元 | 土橋　　茂 |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|
| 不健体危険の取扱に就て | 11　5 | 大正元年 | アーサー・バンタ述（原島茂訳） |
| 脊髄癆に因する大腿骨頸部骨折なるや或は負傷の結果若くは特発骨折なるか | 11　5 | 元 | 竹内作次郎訳 |
| 独乙保険学会医部会議報告 | 11　5 | 元 | 竹内作次郎訳 |
| 日本新死亡表 | 11　5 | 元 | ハラルド・ウエスターカード |
| 血歴の研究 | 12　1 | 2 | ビー・シモンヅ（原島茂訳） |
| 災害保険同業組合の一判決物語 | 12　1 | 2 | クラウン氏述（TM生抄訳） |
| 新施行規則と死因統計表 | 12　1 | 2 | |
| 教育者と肺結核 | 12　1 | 2 | |
| 血歴の研究（其二） | 12　2 | 2 | ビー・シモンヅ（原島茂訳） |
| 災害保険同業組合の一判決物語（承前） | 12　2 | 2 | クラウス(TM生抄訳) |
| 死亡表とは何ぞや | 12　3 | 2 | 惣崎　貞夫 |
| 無診査保険に就て | 12　4 | 2 | 秋山　妙治 |
| 結核と療養所 | 12　5 | 2 | 秋山　妙治 |
| 保険診査用採尿器及び検尿器 | 12　5 | 2 | 中村健三郎 |
| 疑はしき死亡調査に就て | 13　1 | 3 | 長谷川要吉 |
| 肺結核感染の部位１，２の統計 | 13　1 | 3 | 小泉　正義 |
| 早期死亡に就て | 13　2 | 3 | 中村健太郎<br>妹尾　堅太 |
| 生命保険医務上蛋白尿の価値 | 13　4 | 3 | Frik Berlia |
| 梅毒の己往症を隠蔽したる場合会社が其契約を無効なりと主張するは当然なり | 13　4 | 3 | |
| 亜児個児と自殺 | 13　5 | 3 | SI |
| 戦争と医師 | 13　5 | 3 | SI |
| 医事数理値と調査報告数項の説明 | 13　6 | 3 | KM生 |
| 動脈硬化性及び体質精神性異常症の鑑定に就て | 13　6 | 3 | レクチェイ |
| マンチエスターの産業病（稍大範囲の） | 14　1 | 4 | 三井武三郎抄 |
| アルコホルの長寿に及ぼす効果（Ⅰ，Ⅱ） | 14　1 | 4 | O生 |
| 興味ある死亡診断書作成に就て | 14　2 | 4 | 大山稲三郎 |
| 戦争死亡率に就て | 14　2 | 4 | 高田他家雄訳 |
| 尿より妊娠を診断する法 | 14　4 | 4 | 浅田　　一 |
| 結核血歴を有する被保険者に就て | 14　5 | 4 | BS生抄 |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|
| 桑港に於ける万国保険大会（Ⅰ） | 14　6 | 大正４年 | 奈良　三郎 |
| 弱体者取扱の実務（其一其二） | 15　1，3 | 5 | ケーエム抄 |
| 婦人と保険 | 15　1 | 5 | 三本木 |
| 仮病と保険 | 15　1 | 5 | 三本木 |
| 桑港に於ける万国保険大会（Ⅲ） | 15　1 | 5 | 奈良　三郎 |
| 保険契約復活者の死亡率 | 15　2 | 5 | アーサー・ハンター（TS生抄） |
| 診査ノ一所感 | 15　3 | 5 | 三井武三郎 |
| 身長体重に因る死亡表 | 15　4 | 5 | 三本木 |
| 生命保険と生命救済 | 15　5 | 5 | TS生抄 |
| 欧米に比したる日本の生命保険 | 15　6 | 5 | TS生 |
| 診査料及死亡診断料に就て | 15　6 | 5 | SI生抄 |
| 合衆国の国民生命表 | 16　1 | 5 | ロージャスグロヴァー（TS生抄） |
| 米国生命保険会社の発達 | 16　1 | 6 | スベクター（KM生抄） |
| 医的選択の標準を定むる必要（第１回，第２回） | 16　2，3 | 6 | アーサー・ハンタオスカー・ロヂアース（TS生抄） |
| 申込書及告知書の謄本交付に就て | 16　2 | 6 | 石岡繁太郎 |
| 米国に於ける癌腫死亡率の統計的研究（1916年の癌腫死亡率） | 16　3 | 6 | ケーエム生抄 |
| 1916年に於ける結核死に就て | 16　4 | 6 | TS生 |
| 生命の保存 | 16　5 | 6 | TS生 |
| 死亡経験 | 17　1 | 6 | TS生 |
| 生命保険に関する鑑定の一例 | 17　1 | 7 | 中浜東一郎 |
| 食道癌の臨床的統計（第３回報告） | 17　1 | 7 | 赤松是三郎<br>深沢　忠義 |
| 食道癌の臨床的統計（第４回報告） | 17　1 | 7 | 赤松是三郎 |
| 生命保険より見たる血圧 | 18　2 | 8 | マックスゲッフ述（SI生） |
| 血圧と諸現象との関係 | 18　2 | 8 | アーサー，ハンター（SI生抄） |
| 癌腫問題の一般的観察及其結論 | 18　3 | 8 | |
| 大戦後の結核予防に就て | 18　3 | 8 | アームストロング |
| 癌腫問題の一般的観察及其結論 | 18　4 | 8 | |
| 悪性感冒に就て | 18　4 | 8 | アーサー，ハンタ述 |
| 癌腫問題の一般的観察及其結論 | 18　5 | 8 | |
| 癌腫問題の一般的観察及其結論 | 18　6 | 8 | |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|
| 生命保険上より見たる心臓疾患（Ⅱ） | 18　6 | 大正８年 | ブロウトン |
| 国民は如何なる疾病に因て多く死亡する乎且つ如何なる疾病に因る死亡が増加する乎並に日本生命に於ける死亡との比較 | 19　1 | 9 | 丹治　善造 |
| 生命保険上より見たる心臓疾患（Ⅲ） | 19　1 | 9 | ブロウトン |
| 癌腫問題の一般的観察及其結論（Ⅰ） | 19　2 | 9 | |
| 癌腫問題の一般的観察及其結論（Ⅱ） | 19　2 | 9 | |
| 癌腫問題の一般的観察及其結論（Ⅲ） | 19　3 | 9 | |
| 癌腫問題の一般的観察及其結論（Ⅳ） | 19　4 | 9 | |
| 癌腫問題の一般的観察及其結論（Ⅴ） | 19　5 | 9 | |
| 癌腫問題の一般的観察及其結論（Ⅵ） | 19　6 | 9 | |
| 独逸に於ける現在の診査料，診査報状及2，３条件 | 20　1 | 10 | |
| 癌腫問題の一般的観察及其結論（Ⅶ） | 20　1 | 10 | |
| 身体損傷と寿命との関係 | 20　2 | 10 | ジョン・ホーマン |
| 身体損傷と寿命との関係（承前） | 20　5 | 10 | ジョン・ホーマン |
| 日本人の体格及体格の分類に就て | 20　3 | 10 | 丹治　善造 |
| 癌腫問題の一般的観察及其結論（Ⅷ） | 20　3 | 10 | |
| 保険診査と尿診断 | 20　3 | 10 | 田中吉左衛門 |
| 医的撰択の進化 | 20　3 | 10 | |
| 統計観察の論理 | 20　4 | 10 | 亀田豊治朗 |
| 丹治学士の「日本人の体格及体格の分類に就て」対する批評竝に駁論 | 20　4 | 10 | 高田他家雄 |
| 医的撰択の進化（承前） | 20　4 | 10 | |
| 癌腫問題の一般的観察及其結論（Ⅸ） | 20　5 | 10 | |
| 統計観察の論理（承前） | 20　5 | 10 | 亀田豊治朗 |
| 標準下体保険の発達 | 20　5 | 10 | 高田他家雄 |
| 癌腫問題の一般的観察及其結論（Ⅹ） | 20　6 | 10 | |
| 標準下体保険の発達（承前） | 20　6 | 10 | 高田他家雄 |
| 生命保険に関係ある糖尿 | 20　6 | 10 | シュー，ブルックス |
| 軽度の蛋白の意義に就て | 20　6 | 10 | 佐藤菊太郎 |
| 国民対被保険者の結核死亡に就て | 21　2 | 11 | 石岡繁太郎 |
| 糖尿に就て（Ⅱ） | 21　2 | 11 | 田中吉左衛門 |
| 癌腫問題の一般的観察及其結論（XI） | 21　2 | | |
| 心臓病と寿命との関係 | 21　4 | 11 | 高田他家雄 |
| 1920年に於ける腸窒扶斯の死亡 | 21　5 | 11 | |
| 新会社と弱体保険 | 21　6 | 11 | |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|
| 新会社と弱体保険（承前） | 22　1 | 大正12年 | |
| 無診査保険 | 22　3 | 12 | |
| 告知事項と精神病 | 22　3 | 12 | 荻野　孚美 |
| 生命保険契約に附随した癈疾保険の恩典（Ⅰ） | 23　3 | 13 | たつを生 |
| 生命保険契約に附随した癈疾保険の恩典（Ⅱ） | 23　3 | 13 | たつを生 |
| 生命保険契約に附随した癈疾保険の恩典（Ⅲ） | 23　4 | 13 | たつを生 |
| 糖尿病の死亡率 | 23　4 | 13 | 竹　朗　生 |
| 肺結核に関する現今の概念と生命保険 | 23　4 | 13 | 多羅尾　節 |
| 一診査医の見たる生命保険会社と医師との関係 | 23　6 | 13 | 竹　朗　生 |
| 健康体の血圧に就て | 23　6 | 13 | 竹　朗　生 |
| 外科大手術の生命保険死亡率に及ぼす影響 | 24　1 | 14 | Marion Souchon |
| 生命保険に関する腹部疾患 | 24　2 | 14 | テホドール・フリードマン |
| 定期体格検査に就て | 24　2 | 14 | |
| 無診査撰択は外務員の判断に依る | 24　3 | 14 | |
| 無診査保険賛否 | 24　3 | 14 | トーマスブラックバーン |
| 無診査保険争議 | 24　3 | 14 | |
| 癈疾条項付生命保険に於ける危険撰択と癆疾事故の取扱方に就て | 24　3 | 14 | H・Aバーカー |
| 将来の死亡と無診査保険 | 24　4 | 14 | チスカル・リユッケル |
| 無診査生命保険 | 24　4 | 14 | |
| 英国生命保険会社の無診査保険実施の概観 | 24　4 | 14 | |
| 両腕に於ける血圧の差違 | 24　4 | 14 | WHボーデンスタブ |
| 亜米利加生命保険会社の予定死亡に対する実際死亡率 | 24　5 | 14 | |
| 生命保険に於ける血圧測定の価値 | 24　5 | 14 | フランク・Hホイーラ |
| 保健施設に就て（Ⅰ） | 24　6 | 14 | ミュールベルグ |
| 保健施設に就て（Ⅱ） | 25　1 | 14 | ミュールベルグ |
| 盲目者保険 | 25　2 | 15 | |
| 弱体保険 | 25　2 | 15 | |
| 生命保険会社と人類命数延長（Ⅰ） | 25　3 | 15 | リーゲイ・フランケル |
| 生命保険会社と人類命数延長（Ⅱ） | 25　4 | 15 | Leek. Frankel |
| 喘息の経済的意義 | 25　5 | 15 | Fr. L. Hoffman |
| 弱体保険の再保険に就て | 25　6 | 昭和元年 | オスカー・エムデン |
| 米国に於ける延命協会の事業に就て（Ⅰ） | 26　1 | 2 | |
| 米国に於ける延命協会の事業に就て（Ⅱ） | 26　2 | 2 | |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|
| 「メ」社契約者福祉増進施設に関する歴史的考察 | 26　3 | 昭和2年 | |
| 米国ロックフエラ寄附国際衛生局 | 27　1 | 3 | 中浜東一郎 |
| フベルト・カーレ氏「モヒ」中毒短期療法 | 27　1 | 3 | 中浜東一郎 |
| ゴール氏の「世界闘病戦績」を読む | 27　1 | 3 | 加藤哲太郎 |
| 日本保険医学協会史 | 27　2 | 3 | 石岡繁太郎<br>富長　久郎 |
| 生命保険医事に関する判決例（Ⅰ） | 29　1 | 3 | 高田義一郎 |
| 生命保険医事に関する判決例（Ⅱ） | 29　2 | 5 | 高田義一郎 |
| 生命保険医事に関する判決例（Ⅲ） | 29　2 | 5 | 高田義一郎 |
| 結核患者の無塩食栄養法の実際 | 29　3 | 5 | 千　俄　生 |
| 体重過多と予防寿命 | 29　4 | 5 | |
| 各社の死亡率一般に増加す | 29　4 | 5 | |
| 独逸国に於ける生命保険医学の中央研究機関 | 29　5 | 5 | 原田謙太郎 |
| 医学輓近の進歩が生命に及ぼしたる影響 | 29　5 | 5 | |
| 血圧反射に就て | 30　1 | 5 | 井坂　　英 |
| 結核のGerson食療法 | 30　1 | 6 | 原田謙太郎 |
| 遺伝学によって進化及び発生上に投ぜられたる光明 | 30　1 | 6 | 大山稲三郎 |
| 臨界体に就て | 30　2 | 6 | 高田他家雄 |
| 保険金50,000弗以上の高額契約に関するペン，ミューチュアル会社の死亡経験 | 30　5 | 6 | 高田他家雄 |
| 高額契約者の統計的研究 | 30　5 | 6 | 高田他家雄 |
| 医長の関係方面に就て | 31　1 | 7 | 高田他家雄 |
| 結核に対する人工気胸法の社会的的及臨床的価値 | 31　2 | 7 | 太田成三郎 |
| 数学的査定法の基礎に就て | 31　2 | 7 | 高田他家雄 |
| 生命保険に於ける高度危険体に就て（Ⅰ） | 31　3 | 7 | 高田他家雄 |
| 生命保険に於ける高度危険体に就て（Ⅱ） | 31　4 | 7 | 高田他家雄 |
| 生命保険に於ける既往症の隠蔽に就て | 31　5 | 7 | 高田他家雄 |
| 保険と医師 | 31　6 | 7 | 中浜東一郎 |
| 医師と保険（Ⅰ） | 32　1 | 8 | Otto Neustätter |
| 若齢者に於ける高血圧 | 32　1 | 8 | 久原　健三 |
| 米国生命保険者の被保険者撰択法 | 32　2 | 8 | 高田他家雄 |
| 脳動脈硬化症 | 32　3 | 8 | 草刈　春逸 |
| 医師と保険（Ⅱ） | 32　3 | 8 | Otto Neustätter |
| 拒絶体の内容に就て | 32　4 | 8 | 田中　真平 |
| 英国アクチュアリーの被保険者撰択論 | 32　4 | 8 | 高田他家雄 |
| 伊太利に於ける生命保険の被保険者健康奉仕施設 | 32　5 | 8 | 原田謙太郎 |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|
| 医師と保険（Ⅲ） | 32　6 | 昭和８年 | Otto Neustätter |
| 北陸地方に於ける生命保険診査の実状より見たる撰択の意義 | 33　2 | 9 | 戸田　安衛 |
| 高血圧に於ける心雑音の臨床的意義 | 33　2 | 9 | 久原　健三訳 |
| 外遊者の資料蒐集上注意を要すべき事項 | 33　3 | 9 | 板沢　政治 |
| 査定並に決定に於ける被保険体の質量的関係に就ての私見 | 33　3 | 9 | 坂口　豊治 |
| 輓近臨床的業績の生命保険医学に対する意義 | 33　5 | 9 | 早川　正俊 |
| 診査医の警戒すべき結核に就て | 33　5 | 9 | 早坂得奈治 |
| 我等の心得べきスポーツ医学 | 34　1 | 10 | 北島　　勇 |
| 腹水早期診断法として二重音及立位性水平濁音界の意義に就て | 34　1 | 10 | 早坂得奈治 |
| 喘息を有する被保険者の死亡率 | 34　2 | 10 | 高田他家雄 |
| 米国々民保険問題に対する生命保険の寄与 | 34　3 | 10 | 溝淵　照信 |
| 弱体保険の取扱に就て | 34　4 | 10 | 岡部　柾雄 |
| 第１回生命保険医学国際会議経過報告 | 34　5 | 10 | 竹田　六郎 |
| 第１回生命保険医学国際会議の状況 | 34　5 | 10 | 原田謙太郎 |
| 不良早期死亡防止に関する第１回座談会 | 34　5 | 10 | 渡辺　　定　他 |
| 癌の診断に就て | 34　6 | 10 | 前田　春雄 |
| 精神病と生命保険 | 34　6 | 10 | 宮地　利彦 |
| 生命保険会社と結核の問題 | 34　6 | 10 | 宮地　利彦 |
| 収縮期雑音 | 34　6 | 10 | 一色　嗣武 |
| 診査と瞳孔所見 | 35　1 | 11 | 矢沢　士郎 |
| 蛋白尿の意義 | 35　2 | 11 | 井手　顕之 |
| 診査瑣談 | 35　2 | 11 | 三井武三郎 |
| 婦人科領域に於ける保険医学 | 35　3 | 11 | 本間　正雄 |
| カッシング氏病に就て | 35　3 | 11 | 柴田　　勝 |
| 独逸国に於ける医師義務補習教育制度 | 35　3 | 11 | 高橋　　繁 |
| 測定血圧価の引用価値 | 35　3 | 11 | 原田　博雄 |
| 高血圧に於ける脳下垂体後葉 | 35　4 | 11 | 矢沢　士郎 |
| 聴診法血圧測定時に現はれる重復音に就て | 35　4 | 11 | 北脇　乾明 |
| 生殖ビタミンE | 35　5 | 11 | 加藤貞一郎 |
| 血族的白血病 | 35　5 | 11 | 徳永徳次郎 |
| 百年前の我国に於ける無塩食食餌療法「塩断ち療法」の文献 | 36　2 | 12 | 原田謙太郎 |
| 循環系疾患の予後に関する外国文献抄録集（Ⅰ） | 36　2 | 12 | 田中　豊一 |
| 結核死亡率の低減した原因は何か | 36　3 | 12 | 原田謙太郎 |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|
| 循環系疾患の予後に関する外国文献抄録集（Ⅱ） | 36　3 | 昭和12年 | 田中　豊一 |
| 蠹魚談話 | 36　4 | 12 | 温故堂主人 |
| 戦争の生命保険に及ぼす影響と戦争危険の取扱方法 | 36　5 | 12 | 気賀真一郎 |
| 第11回万国アクチュアリー会議に於ける標準下体保険に関する報告（Ⅰ） | 36　5 | 12 | SK |
| 1936年米国医的欠陥体調査報告 | 36　6 | 12 | 渡辺　　定 |
| 血圧測定の際に於ける聴診間隙に就て | 36　6 | 12 | 北脇　乾明 |
| 第11回万国アクチュアリー会議に於ける標準下体保険に関する報告（Ⅱ） | 36　6 | 12 | SK |
| 外国からの反響 | 36　6 | 12 | 一色　嗣武 |
| 最近の生命保険医学に関する海外の定期刊行物の主要題目 | 36　6 | 12 | 一色　嗣武 |
| 15ヶ国に於ける国民の寿命と死亡数 | 37　2 | 13 | アイラート・パストール（日吉次郎訳） |
| 膕反射の消失を伴へる外見的瞳孔強直症に就て | 37　3 | 13 | マイヤー（梶塚正敬訳） |
| 第11回万国アクチュアリー会議に於ける標準下体保険に関する報告（Ⅲ） | 37　3 | 13 | SK生訳 |
| 保険診査に於ける電気心働図採取法の価値（Ⅰ） | 37　4 | 13 | テーラー（日吉次郎訳） |
| 保険診査に於ける電気心働図採取法の価値（Ⅱ） | 37　5 | 13 | テーラー（日吉次郎訳） |
| X線及電気心働図の査定に及ぼす影響（Ⅰ） | 37　6 | 13 | ハインス・フェローズ（日吉次郎訳） |
| 生命保険に於ける自殺の意義 | 37　6 | 13 | ケーウェル（山崎健雄訳） |
| X線及電気心働図の査定に及ぼす影響（Ⅱ） | 38　1 | 14 | テーラー（日吉次郎訳） |
| ブラトン氏病に就て | 38　4 | 14 | 柴田　　勝 |
| 耳疾患と生命保険 | 38　4 | 14 | ヘルマレ・バルト（山崎健雄訳） |
| 結核に於ける遺伝と体質の意義 | 38　5 | 14 | 山崎　健雄 |
| 糖尿病と遺伝素質 | 38　5 | 14 | ウンベル（大串菊太郎訳） |
| 1939年巴里に於て開催せられたる第２回生命保険医学国際会議の報告 | 38　6 | 14 | ルドルフ・ケーベル（高田他家雄訳） |
| 蠹魚談語（続） | 38　6 | 14 | 温故堂主人 |
| 漢方医から篇った比喩の例 | 39　1 | 15 | 原田謙太郎 |
| 心室内分離の予後 | 39　1 | 15 | カプラン及カッツ（田中豊一訳） |
| 収縮期心臓雑音の臨床的意義 | 39　3 | 15 | ラッハマン（日吉次郎訳） |
| 結核に対する人類の挑戦劇 | 40　1 | 15 | 鷲見　慎一<br>野坂　礼三訳 |

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|
| 結核の予後 | 40　2 | 昭和16年 | 原田謙太郎 |
| 日本学術振興会脳溢血予防委員会経過報告 | 40　2 | 16 | 渡辺　　定 |
| 保険申込者の糖尿其契約並に死亡率に関する研究 | 40　3 | 16 | 有福　精一訳 |
| 世界大戦後の独逸国に於ける体育奨励文献例 | 40　4 | 16 | 原田謙太郎 |
| 世界大戦後の独逸国に於ける体育奨励文献例 | 40　6 | 16 | 原田謙太郎 |
| 腹部触診法の話 | 41　2 | 17 | 原田謙太郎 |
| 印東玄徳先生年譜並に遺稿 | 42　2 | 18 | 原田謙太郎 |
| 高血圧予後に関する最近のアメリカの動向 | 47　2 | 24 | 谷島　辰男 |
| アメリカ生命医学の紹介（Ⅰ） | 47　3 | 24 | 谷島　辰男 |
| アメリカ生命医学の紹介（Ⅱ） | 48　1 | 25 | 谷島　辰男 |
| 心臓肥大危険評価 | 48　2 | 25 | 谷島　辰男 |
| 関節の標準角度と運動領域 | 66 | 43 | 三上　治夫 |

**他**

| 題　　目 | 巻　号 | 年 | 氏　　名 |
|---|---|---|---|
| 生命保険に対する検尿の価値 | 1　1 | 明治35年 | 中村健三郎<br>三井武三郎 |
| 診査医に就て | 1　1 | 35 | 平松駒太郎 |
| 精神病初期の為謝絶せし一例 | 4　9 | 38 | 三好常三郎 |
| マヌファクチュラース生命保険会社に対する詐欺事件 | 4　10 | 38 | 中央衛生会 |
| 保険医の非医務的職務に就て | 4　11 | 38 | 粟津　清亮 |
| 診査報状記載用項を一定する件 | 5　14 | | 山岐文二郎 |
| 結核殊に肺結核素因存在の早期確定 | 5　16 | | エフ・マチチェース |
| 結核殊に肺結核素因存在の早期確定 | 5　16 | | ア・ゴットスタイン |
| 北米生命保険医事数理調査 | 3　2 | 大正２年 | 協会 |
| 最近５ヶ年間に於ける不具癈疾保険進歩 | 16　6 | 6 | ST生 |
| 生命保険上より見たる心臓疾患（Ｉ） | 18　5 | 8 | ブロウトン |
| 癌腫問題の一般的観察及其結論 | 21　3 | 11 | |
| 傷害と結核の関係 | 21　5 | 11 | |
| 生命保険医学に就て | 28　3 | 昭和４年 | 中浜東一郎 |
| 衛生上より見たる諸種の刊行物 | 30　2 | 6 | 中浜東一郎 |
| 生命保険詐欺　祕したる己往症に関係なき疾病による死亡と保険金騙取（大審院判例） | 30　4 | 6 | 原田謙太郎 |
| 死の苦痛 | 33　6 | 9 | 原田謙太郎 |
| ビタミンAを以ってなせる種々胃疾患治療に就て | 35　6 | 11 | 水野　沢斎 |
| 保険診査閑談２つ３つ | 36　6 | 13 | 傍島　　亘 |
| 指数W/h$^2$援用に拠る体質対死亡率の研究 | 37　1 | 13 | K生 |
| 診査報状統一に関する研究 | 42　4 | 18 | |
| 結核同棲問題に就ての座談会 | 48　3 | 26 | |
| 米国小児の医療保護 | 49　1～2 | 26 | 谷島　辰男 |
| 過食療法の実験談 | 49　3 | 26 | 石岡繁太郎 |
| 欠陥研究（Impairment Study　1954）の抄録 | 53　1 | 30 | 一色　嗣武 |
| 内科医と生命保険<br>（The Internist and Life Insurance） | 53　4 | 30 | ハリー<br>E．アンガーライダー<br>（櫨山　盛政訳） |
| 心筋梗塞についての調査 | 60　1 | 37 | 大竹　喜彦 |
| 婦人下腹部の診査をめぐる新判例について | 63 | 40 | 平尾　正治　他 |
| 寿　命<br>A．寿命学の提唱<br>B．日本人の寿命の動向 | 65 | 42 | 渡辺　　定 |
| 最近の耳鼻咽喉科領域における検査法の進歩 | 90 | 平成４年 | 新木　　隆　他 |

## 編集後記

この度の日本保険医学会創立100周年にあたり，原稿を頂いた諸先輩方を始め，学会役員，事務局，学会誌刊行センターの方々の御理解と御支援により「日本保険医学会100年史」が刊行できましたことを会誌委員会を代表して感謝申しあげます。また，原稿執筆，編集に協力頂いた会誌委員の皆様の努力にも敬意を表します。

さて，100年史編集が着々と進行中のある日，ニューヨークの貿易センタービル，米国国防総省が飛行機ハイジャックによるテロ攻撃を受け，多くの人命が失われました。亡くなられた多くの人々と其の家族に心から哀悼の意を表します。世界の人々の心への衝撃は大きく，また，世界経済への打撃もどこまで続くのかと不安になります。

保険事業の世界に身を置く者としては，失われた人命，建造物，装備などへの損失補償へ関心が向きます。そこでどうしてもMutuality相互扶助という概念が頭に浮かびます。損害保険では，災害や事故による物品損失の補償は実損填補ですから，相互扶助組織（民間保険）加盟者（契約者）はそのリスク（価値）に応じて負担をするという相互扶助の基本理念は理解し易いのですが，生命保険ではどうでしょうか。もちろん，この基本理念は生きており，契約者は被保険者のリスク（健康状態）に応じて負担をすることに変わりはありません。そこで注目されるのが，そのリスクをいかに正しく正当に評価するかでしょう。科学的，客観的に事実に基づいて評価出来るよう日々努力するのが我々保険会社に身を置き危険選択に携わる者の務めでしょう。個人の健康状態の評価は医学的問題以外にも倫理的問題も含んでおり，生活習慣病のような個人の努力により大いに変化改善されるものならば，他人（保険者）が評価することに抵抗感は無いでしょうが，遺伝病や体質などはどうでしょうか。これらは評価されることに馴染まない性質のものであり，保険者が評価することには倫理的な問題があるとの意見もあります。

300年以上に亘って続いてきた生命保険の理念は消滅しないと確信していますが，リスクの評価と倫理問題は，遺伝子検査の問題が世界中の世論の関心を集めるようになって保険業界に大きな衝撃を与えています。日本保険医学会100年の歴史を担い，相互扶助に基づく生命保険を守り発展させていく責務を背負う我々は，この問題を避けて通ることはできないでしょう。100年史発刊が活発な保険医学会活動の起点になることを期待します。

平成 13 年 12 月 3 日　印　刷
平成 13 年 12 月 17 日　発　行

日本保険医学会 100 年史

編集兼発行人　日本保険医学会
製　　作　(財)学会誌刊行センター
印 刷 所　勝美印刷株式会社
東京都千代田区丸の内 3 丁目 4 番 1 号（生命保険協会内）
発 行 所　日本保険医学会